
教え子の進路に頭を抱えています。

紅い狐

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

教え子の進路に頭を抱えています。

【作者名】

紅い狐

【あらすじ】

私立聖祥大学付属中学校の教師がいろんな意味で問題児の三人を相手をする話。

微妙にアンチがあるかも。

キャラ崩壊あり。

注意：虹裏にあった「なのはSS」スレの住人の一人です。
スレ内容を一部参考にして書いていますが、今後はそれから外れて
いきます。

第一話 頼むから俺の話聞いてくれ

教え子の進路に頭を抱えています。

俺の名前は本田 敦と言います。

私立聖祥大学付属中学校の教師をしているのですが、ある三人の教え子の進路に頭を抱えています。

生徒 N・Tの場合 『魔法少女』

生徒 F・T・Hの場合 『魔法少女』

生徒 H・Yの場合 『魔法少女』

どういう訳か三人とも進路は『魔法少女』と書いていました。

本日の放課後三人を呼び出して話を聞くことにしました。

「あの高町、先生百歩譲って魔法少女っていうのは認めよう。

まあ人助けのために力を使いたいっていうのも立派なことだしな？」

俺は米神を抑えながら進路指導室で三人の進路相談をしていたはずなのだが、何故か三人は部屋に入ってきて直ぐに変身しやがった。

「だがな…高町、ハラウン、八神 その恥ずかしい格好はどう

「にかならんのか…」

そう変身したのはこの際良いとしよう、ここでは狐が人型になりたりするところだしな。

ただ、変身した後の姿が問題だった。

高町は小学校のころの制服を改造したもの、ハラオウンはかなりきわどい水着のような姿、八神は前の二人に比べたらまじがかなりスカートが短い。

「フェイトちゃんはもうどうしようもないと思いますけど私はまだセーフだと思うんです」

高町が何を言っているのか理解できない。

五十歩百歩っていう言葉知っているのか高町？

私は自分の顔が引き攣っているのが分かった。

「あのな……お前ら歳を考える歳を」

「ぴちぴちの14歳ですが何か？」

俺の問いに何が問題があるのか分からない様子で答える高町。

「せんせ、むしろ可愛いとか！ 萌えるとか！ そういうのは無いですか」

八神が何やら言っているがどう考えても

「風俗にしか見えないな」

「そんな生徒に言っているいいんですか？」

「先生もまだ若い方だが、コスプレの趣味は無いぞ」

いやだってなーこれは無いだろ。

因みに彼女らはこの姿で空を飛ぶらしい。

この際だから空を飛べることは目をつぶる。

「でもな八神、お前ら誰かに言われなきゃ十年はその路線続けるぞ。どうせその管理なんかの人は誰も止めないんだろ？」

「まさか〜十年もこんな格好してないですよー」

「そ、そうだよね…流石にもうちよっと落ち着いたパンツルックとか…」

「そうやそうや、二十歳越えてこんな痴女みたいな格好してたら引くでな^あ」

本当にそう思っているなら今からでもデザインを変更しろよ。

「あっ、でもフェイトちゃんはちょっと分からないかも？」

「何だ高町、何か知っているのか？」

何か高町が恐ろしいことを良いそうなので身構えてしまう。

「フェイトちゃんのお母さんはもっと凄かったんですよ？」

……なん……だと……

あのハラウンさんがハラウンより際どかっただと……信じた
くないな。

中二病をこじらせて誰も止めないところになってしまうのか……笑
い話ではなくなってきたぞ。

だがな、ハラウンさんの事は置いておいて。

「お前たちはもう少し恥じらいって奴を学びなさい……まったく、
家に見本になる人がいるだろ三人とも」

「「「え？」「」」

駄目でした。

「……じゃあ先生は私たちを見てムラムラしたりしたんですか？」

恐ろしいことを言い出すハラウン。

「馬鹿者、先生は仮にも教育者だ。生徒に興奮する奴があるか」

「じゃあ、どうやったたら興奮するんですか！」

だんだんハラオウンが可笑しくなってきた。

「いや先生が興奮するとかしないとかどうでもいいだろ！ 進路指導だぞお前ら！」

「分かっとらんのは先生の方や！これは女の戦いなんよ！」

八神までノリだした。

もう、キレてもいいよな。

八神達が持ってきた雑誌を丸めて八神の頭をはたく。

「やかましいぞ八神！」

「先生は年上か同い年の包容力の女性が好みなんだ。年下で言うことを聞かない犬っころみたいな女の子に劣情は催さない」

「それでウチに来た時にシャマルに鼻の下伸ばしてはったんですか…？」

八神がまたとんでもないことを言い出す。勘弁してくれ。

「いやそれもない。先生教え子の保護者さんをそういう目で見たりしないぞ」

「いいか？今学ぶべきことはたくさんあるんだ。自分の可能性を探す時間をもう少し取ってみても良いだろう。確かに人助けも大事だが、先生はそれ以上にお前らの人生を大切にしてほしい」

本心からそう思う。

こんな痴女みたいな姿で公の場を飛び回り、もしかしたら死ぬかもしれない危ない所に行くよりもっと周りに目を向けて欲しいと思う。

どうにもこいつらは魔法が絶対正しいと考えて、それ以外が見えていないような気がする。

「先生！私たちが頑張れば沢山の人を救えるんです！」

「それはとても素晴らしいことだと思うぞ。でもな、高町その格好で言われてもな」

「先生！」

「それにだ。お前たちみたいな子供が頑張らなくても大丈夫なように大人がいるんだ。もっと大人を信用しろ」

高町は何かを言いたそうにこちらを見ているが何を言ったらいいのか言葉に出来ないようだ。

「と云うかなお前たちが説得するつもりで持ってきたあの組織の機関紙（メガミ何たら、何たらタイプ）あれにお前らのグラビア載ってたのはどういう事だ？下手したらその仕事着よりきわどい

格好の」

俺が問いただと三人は一斉に目をそらした。
と、言うか未成年にこんな格好をさせる機関紙はどうなんだ。
国によっては持っているだけで逮捕されるぞ。
絶対に騙されてるぞお前ら。

「先生興奮しちゃうんだ……いけない進路相談されちゃうんだ……」

ハラオウンが顔を赤くしてこちらをちらちら見ながらトンでも発言をしだす。

「ちゃんと人の話を聞けよハラオウン」

ハラオウンに声をかけるが反応してくれない。

「おい、高町、八神、ハラオウンはどうか出来んのか？」

「先生にAからZまで教わっちゃってお嫁さんランクSSSになるまで徹底的に教導されちゃうんだ……」

早くハラオウンを止めなければ私の教師生命どころか人生が危ない。

「あーハラオウン？ 先生は英語は教えてやれるがお前の期待していることはできんぞ」

「すみませんフェイトちゃん春はいつもこんな感じなんです」

もう嫌だこいつら。

そして今日も何も変わらぬまま時間だけが過ぎていく。

こいつら本当に大丈夫かな？

第二話 最悪の未来を回避せよ

第二話 最悪の未来を回避せよ

私立聖祥大学付属中学校で教師をしている本田敦だ。

俺は今、非常に危険な状態だ。

何がって？

教師生活どころか社会的に危険だ。

俺は問題児を三人ほど抱えているのだが別に彼女たちが不良とか言う訳ではない。

むしろ性格はイイ性格。品性もしっかりしていると云える。(ただし仕事着を除く)

だが、最近彼女たちと話していて頭が痛くなってきた。

と言うか夢に出てきた。

しかも最悪な夢だった。

アラサーになった高町が結婚していないのに何故か養子を育てている。

さらに今の仕事が怪我して退役。

婚期も逃してこれからどうしようと相談に来る夢だ。

今朝はそれが原因で目が覚めた。

どうしたらこいつらをまともな道に導けるのか考えに考えたが分からなかった。

放課後 高町を進路相談室に呼んだら他の二人もついてきた。
ついでにハラオウンと八神にそのことを聞いたら目をそらされた。
あり得る未来らしい。

先日、高町と一緒に歩いている男の子を見つけその子の事を周囲から聞いたら高町の昔から友人と聞いた。

因みに高町が魔法に関わるようになった元凶らしい。
なので彼には最悪の未来が来ないように頑張ってもらいたい。

「あー高町少しいいか？」

「何でしょうか先生？」

「確か高町の交友関係でスクライア君がいたよな。彼とはどうなんだ？」

「ユーノ君ですか？ 友達ですけどなにか？」

「あー彼氏じゃないのか？」

俺がそう聞くと不思議そうな顔をしている高町。
しばらくすると何か得心がいったのか答えてくれた。

「ユーノ君はなんて言うか仲が良すぎてお互いもうそう言う目で見れないのでアウトなの」

「……そうか」

俺が残念そうに答えたのに反応した高町が心配そうに聞いてくる。

「先生どうしたの？ 私とユーノ君が付き合っていないことがそんなにショックだったの？」

俺は正直こんなことを生徒に言うつもりはなかったのだが思わず夢の話をしてしまった。

「……と言うことなんだ」

「先生は私をなんだと思っているの？」

俺は俯くしかなかった。

ただ、このままだと埒が明かないのでとりあえず進路相談と云うより恋愛相談することにした。

「お前たち時空何たらと言うところで身を置いて婚期を逃さないのか？学生のうちはまだいいかもしれないが社会人になったら十年なんてあっという間だぞ」

「別に家庭に入れとか、仕事をやめろとは言わないがな。大人になれば時間なんてあっという間に過ぎていくんだ。婚期を逃すと大変だぞ？最近じゃ卵子の劣化がどうかという話が広まって、高齢出産は益々厳しい状態だし
結婚も子供もない独り身で一生過ごすつもりなのか？」

と俺が一応異性に目を向けろと言ったら八神の奴がとんでもないことを言い出した。

「分かった、わかったわせんせ。シャマルとフェイトちゃんセツトで付けるから私らほっといてくれへん？ちょっと目瞑るだけやんか？な？」

思わず八神の頭を叩いた俺は悪くない。

「八神な。家族や友達を物みたいに扱うんじゃない。そんなんじや将来職場の人間も道具みたいに扱うようになっちゃまずぞ」

こいつらは俺が何を心配しているのか理解しているのか？
というか八神をこんな風に教育したのは誰だ？

「それにな八神。目を瞑るも何も先生なお前たちの事が心配で言っているんだぞ？多分このままいったら十年もしないうちに後悔するぞ、きっと……」

「そんなん言われても想像できひんわせんせ」

「だがな、先生には見えるんだぞ。お前等が今の精神のまま大人になり痛々しい姿で公衆の面前を飛び回り友情と同性愛の区別もつかないまま乳繰り合って人の話を聞かない性格が矯正されていないから面倒な事態を引き起こして他人に迷惑かける姿が」

本当にそんな未来が来そうなんだ八神分かってくれ。

今はそれで楽しいかもしれないが恋愛もせずに仕事と同性にセクハラしている未来しか見えないんだ。

「そうやな、 そうなったらせんせが私を貰ってや」

いやだから何度も言っているが俺は年下に興味はない。

「お嫁さんにされちゃうんだ……初めての夜に俺の女に仕込まれちゃうんだ……」

さっきまで黙っていたハラオウンが変なことを呟きだした。
本当に勘弁してください。

「ははは、ハラオウンは今日も元気だな」

「きっとミッドチルダにも高校にも行けないママにされちゃうんだ」

頼むからハラオウン、おなかを撫ぜながら顔を赤くしないでくれ。

高町と八神に視線を向けると。

「まあフェイトちゃんはこれが平常運転ですから」

駄目だろう高町。

「なあ高町に八神 ハラオウンは何時もこんな感じなのか？本気で何時か適当な男に騙されるんじゃないかと心配になってきたぞ」

俺のセリフに反応するハラオウンはもう限界だ。

「……先生が私のこと心配してくれてる。私のことしっかり見てくれている」

一回ハラオウンは家庭訪問した方がいいかもしれない。

「でも先生。正直今は結婚とかあまり興味ないんです。それより育児で職場から離れている間に、救えない命があるかもしれないんです！」

高町そこまで真剣に考えていたのかと感心していたら。

「……それに子供は……よ、養子とかって手もあるかな……なんて……にははは……」

なんだろう非常に悲しくなってきた。

高町は自分のご両親がいかに愛情を注がれているのに気付いているのか？

いやそれもだが一番怒るべき点は家庭を軽々しく考えることだな。

自分でも信じられないほど声が低くなるのが分かる。

「高町後で養子縁組がどれだけ大変か後で資料を取り寄せておいてやるからよく読んでおけ。後もう一度家庭や家族を軽々しく語ったら先生本気で怒るからな」

「それにな子供はぬいぐるみやお人形じゃないんだぞ。自分で家庭も持てないのに、他人様の子供を育てることが出来るはずないだろう。先生、不幸な子供を増やすようなことだけは許さないからな」

俺がそう締めくくると三人ともしおらしくしていた。

少しは思うことがあったのだろうか。

後は、こいつらの心の支えになってくれそうな人が見つければいいのだが。

「高町はもういいとしてハラオウンと八神はなあ……うん」

「あっ、私はあと数年ぐらいしたらイケメンやナイスミドルが身近に表れると予言されているんで」

「……お兄ちゃん、なら……血、血は繋がっていません！」

「なあ、八神よ誰が占ったのか知らんが、そのうちの誰かと結婚するとかお付き合いするとか出てなかったのだろうか？ それからハ

ラウンお前のお兄さんはもう結婚して子供もいるだろう。こないだ写真見せてもらったぞ」

本当にこいつら大丈夫なんか？

なんで俺こんなに心がボロボロになっているんだろ。

「最近は女性の社会進出も進んでいるしな、仕事を生きがいするのは先生も否定しない。だけど仕事の為だけに他の色々なものを全部捨て去ってしまわないかと不安なんだ。まあ、もうちょっとよく考えなさい」

時計を見るともう六時を過ぎていた。

「もうこんな時間か。ほら、暗くならないうちに帰りなさい」

帰宅を促すと八神が調子に乗り出した。

「せんせ、今夜は帰りたくないよ」

取り敢えず八神の頭を軽く叩いておく。

あほなことを言っているとまたハラウンが暴走しだしそうだ。

「先生の家で追加授業されちゃうんだ……バルディッシュ振るうより先生のピー握る方が得意にされちゃうんだ。」

手遅れだった。とりあえず誤魔化すために八神に話を振る。

「なるほど、八神はえらいな。特別に今から補習してやる。担任である英語の成績が赤点ギリギリでは示しがつかんからな」

「あと、そこで破廉恥なこと呟いている女子とっくと帰らんか」

正直に言う和高町は色恋沙汰に興味がないきらいがあるから良くは無いがいいでしょう。

八神もこちらをからかっているがまだまだ甘く小狸といった印象だ。

だが、問題はハラオウンだ。お前が時々見せる何かを期待する視線が洒落にならん……。

取り敢えず家庭訪問するか？

ハラオウンは成績は良いんだよな…成績は…はあ……なのになんでこんな……はあ……。

(先生が……私を見てはあはあ言っている……！)

また何か期待するような目でこっち見てるし。

まずはこいつらの普段の生活から見直した方がいいのかな？

「なあ、ハラオウン。一回家庭訪問しようか？」

「先生はフェイトルートに入っちゃうんだ……攻略してCG埋められちゃうんだ」

また暴走しました。

「よしハラオウン。先生の家庭訪問決定ポイントまであと三点だ。意味は分かるな？」

「先生が私の家庭に入っちゃうんだ……婿養子になっちゃうんだ……」

その発想はなかった。

「なあ、高町と八神？ハラオウンはどうしてこんな……」

「……多分家族の愛情が足りてなかったんじゃないかと……」

「今の家族やのうて元々の肉親の方やね……」

居た堪れない空気になった。

「先生ハラオウンの学校生活は見てきたが日常もこんな感じか？」

「……概ねこの通りとしか言いようがありません」

「こないだ、アメちゃんに釣られてフラフラ連れてかれそうになったのを見た時は肝が冷えました……」

俺たち三人は何とも言えない表情をしてハラオウンの妄想してい

る姿を見ていた。

「なあ高町、八神 早くハラオウンに彼氏を見つけてやってくれないか。守ってあげる男の子が居ないと、心配で先生眠れないぞ」

いや冗談ではなく。本気でそう思っている。

「いっそ先生がなってあげたらどうです？ フェイトちゃん、男子人気一位ですし」

「は？いや冗談でもきついで高町」

またトンでもないこと言い出すな高町の奴。

俺にハラオウンの介ううん面倒をみると言うのか何度も言うが年下には興味はないのだがな。

「でも先生最近教師と教え子がくっつくというのも多いと聞きますし」

「先生が生徒を守るのは当然のことだが、先生の言いたいのはそういう意味じゃない。というかそれだけ男子に人気なら、同年代でいくらでもいい相手が見つかるだろう。不純異性交遊はいかんが、子供同士の清いお付き合いなら寛容だぞ」

確かにこいつらは男子生徒に人気がある。

正直その辺のアイドルよりは可愛いとは思うが好みでない。

「先生、ごめんなさい。私実は同年代や年下はタイプじゃないんです」

何故か謝ってくる高町。

「奇遇だな、先生も年下は守備範囲外だ。じゃああれだな、高町のお兄さん辺りに友達を紹介してもらったらどうだ。高校時代は同級生だったけど見る目は確かだったみたいだし安心出来るな」

そういうと高町は何故か微妙な顔をしている。そういえば高町の兄はあまり友達が居なかったような。

「まあ、それにだ。若いときは皆そう言うものさ。だがな高町……年上の男っていうのは大抵妹扱いか変態しか相手になってくれないものなんだよ」

「いや、そういうことじゃ無いんです。お兄ちゃんはちょっと倍率が高すぎるので……」

どうやら問題は山積みだ。

取り敢えずはこいつらに普通の青春を送ってもらいたいな。

気が付けばかなりの時間がたって居た。

仕方がないので三人の家に電話した後車に乗せておくって行った。

早く休みにならないかな。

ⅠF エンド

高町達が卒業して十年がたったある日高町から連絡があった。
この時から嫌な予感はしていた。

そして待ち合わせ場所に着いてから後悔した。
やっぱり来るべきではなかったと。

だからあいつらと会って直ぐに謝ってしまった。

「すまん……お前たち先生がもっとしっかりしていたら……
先生の力不足だった」

そうだ。俺は過去の自分を殴ってやりたい。

だが、今はこいつらの今後の事を考えるのが先だ。

中卒で今は25歳。

地球での職歴なし。

地球で使える資格なし。

……やっぱり無理かもしれないな。

高町達も暗い表情だ。

「……こうなったのも先生に責任無いわけじゃないからな。再就
職先探す手伝い位はしてやる」

これは俺の本心で、もしかしたら贖罪なのかもしれない。

「……先生の家庭に再就職しちゃうんだ……」

訂正だ。ハラオウンは何も変わっていないかった。

「でも先生……異世界で魔法ぶっ放すぐらいしかしてなかった中卒女性なんて働き口あるんですか……？」

一方、高町は死んだような目でこちらに問いかけてくる。

取り敢えずはこいつらにどんなことが出来るか聞いてからでないと考えつかん。

まずは世間話というか気になっていたことを聞くとしよう。

「ところでお前ら、25歳にもなった今でもあの格好ということはないよな？」

俺が聞いた瞬間三人は仲良く明後日の方向を向きやがった。

「おいおい、人と話している時は顔をこっちに向けなさい。でもう一度聞くと25歳にもなった今でもあの格好ということはないよな？」

三人そろって滅茶苦茶目を逸らされた。

おいおい、どうしようこいつら手遅れだ。

……心が折れて泣きそうだ。

「ところで良い人見つけたんだよな……？」

俺がそう聞いたらこいつら体を反らしすぎてブリッジしだした。
何度目か分からないがもうヤダこいつら。

しばらくすると三人そろって

「私たち！」「仕事が！」「恋人やで！」

頼むから目を合わせてくれ。

「……なあ、言ってる悲しくないか？ 先生の目を見る。目を見て
いてみる。なあ！ それでその仕事を辞めて帰ってきたんだっ
てなあ？」

どうしよう涙が出てきた。

高町達の弁明を聞くも最終的な結論はこうだ。

「……つまりお前たちは、未だにあの格好で、しかも相手も見つ
かってもいないということか？この十年何をしてきたんだ？ 後高
町？ 未成年が遊び半分で養子縁組で格闘技やらせてるってか……
高町ちょっと向こうでOHANASHIしようか？」

三人は顔を青くして震えている。

俺が震えたいよ。

こうして今の受け持ちの生徒に加えて十年來の問題児の世話が回ってきた。

過労で死ぬかもしれない。

第三話 ハラオウンさん家の家庭事情

最近になりハラオウンのお兄さんクロノさんと久しぶりにあった。

その時に高町達についていろいろ話を聞いたところ色んな意味で悲しくなった。

一体あの子たちはどこでボタンを掛け違えたのだろうか。

そして今日も恒例になってきた進路相談だ。

他の先生方が最近優しく接してくる。

一度、生徒に手を出していないか疑われたので他の先生に変わってもらったところ15分後に出てきて俺に泣きついてきた。

その時の様子を見ていた先生方も胃を抑えていた。

ついでに彼女たちの書いた進路希望を見せたら絶対に上に見せるなと言われた。

見せたら俺の首が飛ぶがな。

下手すりゃ高町の手によって物理的に……。

それよりまずは、管理局だったか辞めてもらわないと高町の成績がヤバイ。

ハラオウンはどの教科もそれなりに取ってくれているし八神も英語以外は何とか大丈夫だ。

だが、高町お前は駄目だ。二人に比べて欠席率も多く数学以外は壊滅。特に国語は泣けてきた。

と言うか国語を教えている先生に泣きつかれた「話を通じない」

「正直高町兄より厳しい」

「なあ、高町。お前たちは確かに素晴らしい力を持ってる……だけどな。先生、それは人を傷つけるための物じゃないと思うぞ。どこの誰かの勝手な正義に振り回されていないか？だから軍人なんてやめておけ」

しかし俺の言葉全く意に反さない高町。

「なら先生、救助の為ならいいでしょう？」

「救助だけならいいがな……先生どうもお前らの話を聞いていると管理局はお前らを戦力として欲しがってるんじゃないのか？って気がしてな」

「それに災害救助隊なら先生の知り合いにいるからなんなら話を聞いてみるか？」

「でも、先生。銃を持っている人達の話聞くために肉体言語で再起不能にしてもいいでしょー？」

高町が何を言っているのか理解したくない。

「駄目に決まっているだろ。お前は話と拳の区別がつかんのか。暴力を振るう前に話をしなさい話を」

「でも、向こうは、話す事なんてないと言って攻撃してくるんで

す！だから話の席を設けるためにもバリバリ撃ちまくって蜂の巣にしているんです」

高町それじゃただのトリガーハッピーの思考だ。

「いいか、高町。世の中それを脅迫って言うんだ。大体なテロばかり起こるような社会のところで自分たちを正義の味方なんていう奴にろくなのは居ない」

「別に管理局が正義の味方を謳っていてもいいじゃないですか」

「正義の味方がいるのはテレビや漫画の中だけだ。現実をみる。仕事で正義を名乗るようになったっやおしましだ」

俺の考えを聞いて高町はまた何か言い返そうとして考えている。ところでさっきから意図的に無視してきたのだがハラウンさっきから何をいっている。

「先生に正義されちゃうんだ……初めての素晴らしい体験にされちゃうんだ」

「先生に体で止められちゃうんだ……戦いに精を出すより体に精を出されちゃうんだ」

「おい、高町に八神 ハラウンの病気はまだ治らないのか？」

「「フェイトちゃんは残念な子ですから」」

お前ら友達だろう。
友達なら止めるよ。

「でもなせんせ。本人達が納得してんねんからええやないの」

「それがちゃんとした判断の結果で納得しているならいいんだが……納得じゃなくて、そう教え込まれているじゃないのかと思えて心配なんだ」

何か心あたりがあるのか八神は黙り込んでしまった。

取り敢えず『もっと人の話を聞きましょう……』と

「ほれ、ハラオウンこの手紙を君のお母さんに見せなさい。あと八神はシャルマルさんにこの手紙を渡してくれ」

「えっ!?! これはまさか……ラブレターですか!?!」

本日のとんでもない発言来ました。

「先生!ラブレターなら私に下さい! なんてあんな母さんなんかに!?!」

ハラオウンの目から光が無くなり俯き加減で俺に言うてくるがどうしてその思考に陥った。

「ハラオウン、お母さんをそんな風に言うものじゃないぞ。先生は悲しいよ。それに魅力的なお母さんじゃないか」

「「…………え？」」

まさかハラオウンも駄目な感じなのか。

どうしたら良いんだよ。

生徒も保護者も駄目でしたなんて積んでないか？

今度は俺が思考の海に沈んでいると八神が阿呆なこと言い出した。

「いやーせんせ、私的にはシャルよりシグナムの方がおススメ
なんです」

「先生は家庭的な人が好みなんだ」

「えっ！？私！？」

ハラオウンが急に回復してこちらを向いてくる。

「よし、ハラオウン お前のどこが家庭的か言ってみろ」

「床上手！先生、私床上手です！」

何故か鼻息を荒くしてドヤ顔でいうハラオウン。
もう駄目だこいつ。

「そうかそうか、ハラオウンの進路希望は理容師…………と」

「さすがせんせ、フェイトちゃんの暴走を物ともしないその姿勢
尊敬に値するわ」

こんなことで尊敬されても嬉しくない。

ハラオウンは崩れ落ちた。

高町は思考中と

「でもな、せんせシヤマルは別に家庭的な雰囲気ありますけど、
あんま期待しすぎるんは……」

「あー料理が下手なんだろ。偶に渋い顔して弁当食べてるもんな
お前」

「……そうなんですよ。よく家事でうっかりしますかね」

「フムン、じゃあ八神。お前はどうかんだ？料理とか料理とか」

「えっ、得意やけど？なんなん実は私狙いなん？」

「いや？全然。うん全然」

ただなあ：八神はキャリアウーマンを口実に、家事なんか完全放
棄した墮落生活を送りそうで将来心配なんだ。

俺が再び沈んでいると今度は高町が復活した。

「先生、私はどうすればいいですか？料理も魔法もお話も得意です！」

「最近家庭科の成績下がっているのに自信があるんだな高町。まあ、高町の場合は数学以外はもう壊滅だが。お前の言うお話が得意と言う割には国語の成績はなんだこれ？」

再び高町轟沈。

でも今回は危機感を持ってもらうためにさらに追い詰める。

さらにはこいつ等に少しでも異性に興味を持たさなければ俺が死ぬ。

「高町、よく聞け。殴り合いでどうにかなるような話し合いは、じっくり腰据えて話し合えば何とかなるもんなんだ。確かに初等部の時は殴り合いで友達を作ったかもしれんがこれからはそうもいかないんだぞ」

「じっくりと腰を据えて……狙い撃つぜ☆」

もう嫌だこの子。何かウインクしながら言うってくるが痛々しい。

「それからお前たち、先生なこの前男子生徒と飯を食うんだがな。色恋沙汰になってお前らの話題出すと皆一様に顔を逸らすんだ。この年の男子が視線を逸らすって相当なんだぞ」

三人とも撃墜確認。

「倦怠期なんだ……先生捨てないで……」

訂正ハラオウンだけは変わらずだ。

「なあ、もうせんせがうち等を貰ってや」

八神は疲れ切った様子で俺に言うが疲れたのは俺だよ。

「八神なー重婚は出来ないって知っているだろう。それにバニングスや月村だって自分等の生活やプライベートがあるわけでだな。あいつ等の場合ただでさえ大人になるまでにしなきゃいけないことはいくつもあるんだ、お前たちに何時までも付き合っではいられないんだぞ？」

「と言うかだな、今は友達も多くていいかもしれないけどな。みんな家庭を持てば、友達より家庭との時間を大切にしようになるんだぞ。気がついたら周りはみんな家庭持ちで、プライベートじゃ誰にも構ってもらえない寂しい売れ残りの独り身になるんだ。それでいいのか？お前達」

「じゃあ売れ残ったら先生が貰ってくれますか？」

なんか話がエンドレスになってきた。

「嫌だ。無理！良い悪いじゃなくて無理！売れ残らないように努力しなさいと言う話をしているんだ」

「さっきも男子生徒の話をしたけどな、正直に言って女性としての魅力をお前等から感じたことは一瞬すらないぞ」

「小学生ならともかくな。お前くらいの見た目で能天気の下着が見えるのも気にしないで日常を送ってるとな周囲は普通引くんだ。引くんだよ。最近はバニングスや月村とゆっくり話したことがあるか？」

再び三人とも撃沈に成功。

こういう時に速攻で回復するのはハラオウンだ。

「じゃあ私は先生の養子になる！」

なんなのこの子。そんなに今の家にいたくないの。
俺はこの場にいたくないよ。

「先生はお前らを嫁にもらうような息子を育てるつもりはないぞ」

「なら義妹！義妹でどうですか！」

尚も食い下がってくるハラオウン。

「だから何度も言っているだろう。養子縁組は人形遊びじゃないんだ。と言うかハラオウンには立派なお義母さんが居るじゃないか。兄夫婦だっているのにどうして独身の先生がお前を養子にしなくちゃいけないんだ」

「もしかしてハラオウン。アレか、家に居づらいとそんなんじゃないだろうな？家庭環境に問題があるなら児童相談所に知り合いが居るからいつでも話は聞くぞ」

.....

するとハラオウンの様子が一変した。

「え、えとその…ちょっと、ちょっとだけど……前のお母さんのところと今のお義母さんのところがなんか変わってないような気がしたりするけど…気のせいだよね…？先生？」

一体ハラオウンの家庭はどうなっているんだ。

「え、えとね、昔の母さんは鞭で叩いたり無視されたりしてました。今のお義母さんは味覚障害でとんでもないもの食べさせられます！たすけてください」

涙目になりながらこちらにポツリポツリ現状を話してくれるハラオウン。

これはちょっと込み入った話になりそうだ。

「そうなのか？ ……高町、八神ちょっと席を離してくれ…いや今日はもう帰っていいぞ。ハラオウンと二人だけで話を聞きたい」

高町と八神に退室を促しハラオウンに向き直る。

「いいかハラオウン自暴自棄になるなよ。今まで先生も学校のみんなもお前の味方だからな。まずは児童相談所に連絡しようか」

「そこまでしてもらう必要はありません。でも少しだけ話を聞いてください」

「ああ、ゆっくりでいいぞ」

今までと様子が一変していた。

「前のお母さんは私の事を出来損ないの人形だと言って叩いたんです。今のお義母さんは叩かないんですけど、やっていることは変わらないんです。だから結婚して助けてください先生！」

最後の最後で台無しだ。

「ハラオウンな。結婚は逃げ場所じゃないぞ。大丈夫だから今までの事を全部話してくれ。それに悪かったな。今まで言動は助けてほしいからのアピールだったんだな。ごめんなハラオウン。先生気付けてやれなくて」

本当に情けない少し考えればわかる事だった。

この年で頭の中がお花畑過ぎると思っていたんだがこういうことだったのか。

だから絶対に助けようと思う。

裏話

私とはやてちゃんが先生に退出を促されて外で待っていました。

「な、なのはちゃん……もしかしたらフェイトちゃん裏切るつもりなんかな」

「流石執務官は狡猾なの……絶対に逃がさないの」

それに先生も先生だ。先に話していたのは私なのに途中からフェイトちゃんばかり気にかけて。

もっと私の話を聞いて欲しいの。

裏話+

なのは達が出て行ってからも先生は私の話をきちんと聞いてくれた。

気が付けば今まで思ってきたことやってきたことを何故か包み隠さず話していた。

どうしよう半分冗談なのにこんなに先生が真剣に……ホントに好きになっちゃいそう……。

IFエンド 数年後の未来

久しぶりにハラオウンから連絡があったので近くの喫茶店で会っ

た。

やっぱり残念な事だった。

自分が仕事の関係で保護した子供たちが居てその子たちの保護者になっただけらしい。

懐いてくれもした。だが、どこかよそよそしくすることもあり男の子の方は一緒にお風呂に入ってくれないらしい。

歳を聞いて納得したがそりゃ男のが可哀想だ。

ついでに引き取った子供たちが付き合うことになり余計に居場所がなくなっただけらしい。

因みに使い魔が居たらしいが、今はスクライア君とよろしくやっております。

高町は養子を引き取り暖かな母子家庭を築いております。

八神は管理局で偉くなり家族と今まで通り仲良く暮らしているみたいだ。

相変わらずの残念ぷりを発揮し続けるハラオウンだ。

そして切羽詰り居場所がなくなり俺の所に泣きつきに来たらしい。

「先生結婚してください」

「だが、断る！」

第四話 やっぱり残念な三人 (通称：お断りスリー)

「今日も今日とて進路相談。

どうも本田です。

先日気が付けばハラオウンに自宅まで付いてこられました。

少し前に家庭環境に問題がないか調べたのだが、やはり問題はなさそうだ。

ダダ気になるのは、血糖値がかなり高いぐらいだ。

取り合えず今日はハラオウンをどうにかできないか高町と八神に相談した。

因みにバニングスと月村は家庭の用事が忙しいとのことで呼んでない。

「なあ、高町、いい加減ハラオウンどうにかできないか？この前、先生の家にまできたぞアイツ」

高町は残念そうにこちらを見てくる。

「フェイトちゃんは寂しがり屋さんなので受け入れてください」

いや、受け入れたら駄目だろ。教師と生徒とか犯罪臭しかしいぞ。

「なあ、せんせ？」

なんだ八神、いい方法があるのか？期待して八神の方を見ると八神の手には近藤さんが握られていた。

「せんせ……念のためにゴムあげるわ」

思わず八神の頭を叩いてしまった。

「学校に変なもの持ってくるんじゃない八神」

「後それをお前が持っていて何になるんだ？ 相手もないのに」

八神は恐れることなく近藤さんを渡してくる。

「八神、これ穴が開いたりしてないよな？」

俺がそう聞くと八神は嬉しそうに

「いややわーせんせー♪ 穴は開いてないけど極薄やよ。ちゃんと0.02ミリも用意してあるで」

「極薄の使われちゃうんだ……にん！しん！されちゃうんだ……」

いつの間にかハラオウンが湧いていた。

一体誰が八神にこんなものを渡しているんだ。

「と、言うかな八神、先生はお前が友達を平気で売ってしまうような子ではないと信じたんだが……後ハラオウンは落ち着け」

「別に友達を売ってるわけではないですよ。ただ恋の後押しです。ついでにそれによって弱み握って私らの内申点にプラスαとか考えていませんよ」

もうヤダこいつ。

ああ、だからかこいつらのクラスの担任が一年経つと違う学校の教師になったのは。

「先生！私女性用コンドームの使い方がうまいと母さんに褒められました」

もう、ハラオウン家はクロノ君以外駄目だ。

今度の休みにクロノ君とザフィーラと恭弥を呼んで飲みに行こう。

「そうかそうか。でもなハラオウン、そういうことは先生に言わなくていいからな？」

「それでねそれでね。先生……この前お母さんに先生の事話したら『それは素晴らしいわね。是非仲良くなって管理局の……じゃなくてフェイトの事を知ってもらいなさい♪』って……ふぁいと、だよね！」

「ああ、本当だ！」

「じゃあ、……ぎゅってしてください……」

どうしようなんてこの子こんなにメンタル弱いのか？
話を聞いていたら戦闘系だろ？

高町程とは言わないがもう少しメンタル面でケアしないと駄目じ
ゃん。

「「ハーグ！ハーグ！ハーグ！ハーグ！」」

「指導中に茶化すんじゃない」

取り敢えず茶化してくる二人にアイアンクローをしておく。
これでも握力に自信はある。

「「いたい、痛い……いたたたたた。ちょっと先生ギブギブ！」」

「抱きしめるのは不味いぞハラオウン」

「じゃあ、やっぱり私は、いらぬ子なんだ！」

今度はハラオウンが泣きそうだ。

思わず頭を撫でてしまった。

これで満足したのかやっと落ちつけてくれた。

「えー……せんせそらないわー……」

「先生は生徒を甘やかない方針だぞ。八神は反省が足りんなもう一回握ろうか？」

俺も暴力や力は使いたくない。それは最後の手段だと思っているからだ。

でもこいつ等には使っていていいような気がしてきた。だってこいつ等どう考えても末期だもん。

「やめてせんせのアイアンクローは正直、割れるかと思ったわ。て言うかシグナムより握力あるんちゃう？」

「先生、前にも言ったけど、フェイトちゃんは小学生の頃にお母さんに裏切られちゃったの。だから愛情がないとか利用されてるとかそういうこと言うともんどくさくなっちゃうの。正直面倒見るの疲れたから先生にバトンタッチするの」

高町、ハラオウンの問題点を教えてくれるの良いが面倒はお前も見てくださいよ。

先生も面倒みるけど生徒と先生の間でしか見ないぞ。この時期の子供は色々複雑なんだ。

はっきりに言ってお前たちばかりの面倒は見てられんと言えたら良いんだがな。

「じゃあ、フェイトちゃんの面倒を見る代わりに私たちの魔法少

女で戦うのを許してください」

「それとこれとは別問題だ」

これは本当に魔法が好きなんだな。

だが、危険が付きまとうなら大人が止めてやるべきなんだと思う。

親が無理なら俺が止めるしかないか。

ううう胃が痛い。

「それからお前たちな一気に話を投げかけないでくれ。ちょっとは先生とキャッチボールしてくれ」

「でも先生は普通に返してくれるの」

「……私の胸をボールに見立てられちゃうんだ……握って触って心行くまで楽しまれちゃうんだ……」

「せんせは何だかんだ言ってしっかりと突っ込んでくれてるやん」

「……色々なところに突っ込まれちゃうんだ。……先生なしでは生きていけない体にされちゃうんだ……」

再び暴走モードに入りそうなので話を戻そう。

「とりあえず魔法少女は駄目だ。こんなに早くから人生ドブに捨

てることはない。魔法少女以外で第二希望の進路とかないのか？」

「後ハラオウンはちょっと道德と倫理の授業をした方がいいな…
…間に合うか分からんが」

やっと静かにしてくれた。

三人ともすっかりと考えてくれているみたいだ。

「はい！先生！」

ハラオウンが勢いよく手を挙げた。

いやな予感がするがとりあえず促す。

「第二希望は先生のお嫁さん！第三希望は先生の愛人が良いです。
子供は2ダース欲しいです！」

「そうか 何を言っているんだハラオウン」

「もしかして先生は性の奴隷とかそういうのじゃないと駄目なん
ですか！？望むところです」

最近のハラオウンの暴走に磨きが掛っている。
どうやって制御しよう。

「うーん、うちはやっぱりあれやねキャリアウーマン。管理局
で事務で働きます」

八神がやっとまともな事を言ってくれた。

「八神！いい事言ったな！就職だな。でも中卒採用は厳しいからせめて高卒で頼む」

現状の状態をまとめると

高町：魔法少女

八神：就職？

ハラオウン：意味不明な供述

チクシヨウほとんど進展してない。

「先生！私は先生がプロポーズしてくれたら魔法少女はやめます。奥さまは魔女になります！」

ハラオウンはいつも通りと。

「なあ、3人ともキャリアウーマンになりたいなら進学も視野に入れておけよ。そうだ！どこか行きたい高校とかないのか？」

「「「ないな」」」

こんな時だけ仲がいいなお前等。

「というか私たちが普通に進学するなら大学までエスカレーターなんじゃないんですか？」

高町は何を言っているんだろう？

「高町な、普通に上がってくればこんな苦勞はしないんだが…だってなお前等1年の時に仕事を優先しすぎて出席がヤバかったの理解しているか？」

「でも、今年に入ってまだ数回しか出ていませんよ？」

「先生が保護者各位に連絡して説得したからな」

複雑そうな顔をする高町。

「だけどここで止めなければ何時か大変なことが起こると思ってる。」

大体無理なのだ。学生と兵士の両立など。

「あのな高町。去年みたいなことを繰り返していると学業だけでなく体も精神も摩耗してしまうぞ」

「先生がお前を助けることができるのは学校だけなんだ」

「これは高町に限った話ではないぞ。ハラオウンも八神にも言えることだ。だからじっくりと腰を据えて考えてほしい」

なんか湿っぽい感じになってしまったが今日はこれでいいだろう。

3人とも今までにないほど考えてくれているみたいだし。

男たちの宴編

朝起きたら何故かハラウンが隣で寝ていた。

気が付けば学校にいて高町に相談していた。

「なあ、高町。今朝起きたらハラウンが隣で寝ていたんだが何か知っているかお前？」

高町は驚いた顔をした後笑顔で答えてくれた。

「ついにやっちゃいましたね先生！」

「やってもうたなあせんせ！」

二人して超絶笑顔だ。

まさか教え子に手を出すとは。

「先生ちょっと辞表だしてくる……後は警察に自首してくる。…元気でなお前たち」

何故か無罪放免でいつの間にかハラウンと結婚していた。

「という夢を見たんだがどう思う？」

今日見た夢の内容を高町恭也とクロノ・ハラウン、ザフィーラに話した。

最近俺を含めたこの4人で飲むことが多い。

「「「疲れているんだろ」「」」

やめてくれその気の毒そうな顔は！

まあ、疲れているのは自覚しているが最近どうも疲れが取れない。

いや、夢の中であいつ等の相談に乗っているはずが雑談になって疲れているんだ。

「と、言うかお前たちの身内の事でこんなに悩んでいるんだぞ。最近血尿出たわ」

「落ち着け敦。今夜はおごるから。頼むから今のなのはを見捨てないでくれ。やっと魔法以外に興味を持ち出して初めて母さんにお菓子作りを習い始めたんだ」

「僕からも頼みます。フェイトを見捨てないでください。最近嬉しそうに本田さんのことを話すんです。先生とはいえやっと思いの名前が出て笑うようになったんです」

「俺からも頼む。やっと思いの仕事の関係者以外での名前が出た

んだ。頼むから主を見捨てないでくれ。主を叱ってくれるのはお前だけなんだ」

お、お前らがもう少ししっかりしていたらこんなこんな悲劇にならなかったんだよ。

恭也には一回前に見た最悪の結末を言ったがお前もそうなるかも思っただら！

だったらそうならないように手伝えよ。

ちくしょ、ちくしょう、ちくしょ、うおおおおおおおおお
おおポオルテッカーうおおおおおおおおお！

「そうだ、敦は彼女居ないのか？」

「前の彼女はお前たちの妹のせいで別れたよ。ロリコンと言われ
てな！」

「すまん」

「もういい、頼むから誰か紹介してくれ。俺の心を癒してくれそ
うな人を頼む」

黙り込む3人。

恭也は月村と結婚しているし、クロノ君も鴛鴦夫婦といえる人が
いるし、ザッフィーは犬だし。

この勝ち組め。

「俺が紹介できるのは美由希だな」

「恭也は俺に死ねと申したか！」

「やはりそう思うのか」

「言っではなんだが美由希は一時期残念美人と呼ばれていたし調理実習で人を殺しかけたと聞いたぞ。そんな殺人料理を作るやつと一緒にいられるか」

恭也はまたすまなさそうな顔をして顔を伏せた。

「因みにな今学校のお断りスリーと言うのがいてな誰だかわかるか？ バニングスと月村妹は中学に入ってからあいつらと関わりを最小限にしたから免れたがな」

泣きそうな顔をする恭也達。少しは俺の苦労も分かち合ってくれ友達だろ？

ザフィーラが誰か思いついた表情をしていた。

「クロノ執務官、彼女はとうだろう？」

「誰かいるのかザッフィーー！」

「落ち着いてくださいアツシさん。ザフィーラ誰の事を言っているんだ？あっ母さんは駄目だぞ」

「ああ、聖王教会のカリム殿だ」

「なるほどな。確かに彼女に恋人はいないし性格もいい。家柄が少々問題だがまずは文通ならなんとかかなるか？」

「ビデオレターとかの方が良くないだろうか」

「どうやらあっちにいい人がいるみたいだ。」

クロノ君とザフィーラには任せよう。

さあ、今日は飲むぞ！

おまけ ネタ本田敦についての情報を皆さんに聞いてみた

良い先生だと思う。最近よく夢に出てくるの。怒られてるけど私のためだって分かるからそれが嬉しいの。

PN 星を軽く砕く少女

先生と結婚したい。先生の子供産みたい。先生に色々見られたい。いつか私の事を全部話したい。

PN ポンコツと言わないで

ええ、せんせやと思うよ。突っ込みも鋭いし、授業も分かりやすい。でも私の夢に合わない人や。

PN 誰が狸や！

昔はあまり話さなかったが最近ではよく話すが良い奴だ。一度手合せしたが神速を使ったらカウンターされたまた手合せ願いたいものだ。

PN シスコン1号

本当に妹がお世話になっています。僕の相談にも色々乗ってくれ

ましたし兄みたいな存在です。

P N シスコン2号

主がいつも世話になっている。何度か手合せしたこともあるが、まさか素手でバリアを破られるとは思わなかった。これからも頼りにしている。 P N 影の薄いオオカミさん

第五話 進路指導に希望の光が……

さて問題児3人の面倒を見てきたが未だに進展が見られない。
先ほど教頭先生に怒られた。

で、この間八神が管理局で就職すると言っていたが、どこにあるのか分からないので今日も楽しい進路指導だ。

「なあ、八神ちょっといいか？」

「何ですせんせ？」

「管理局と言うのはどこにあるんだ？ 先生一応伝手を使って調べたが分からなかったぞ」

「ここではないどこかにあるんや」

どうしよう物凄いドヤ顔して答えてくる。
頭を叩きたい。

「ミッドチルダです」

「ミッド…チルダ……と。おいおい外国か？ 中学の就職は先生が相手の会社に挨拶に行かないといけないんだぞ」

「じゃあ、先生もうすぐ夏休みなので就職活動をかねてミッドチルダに行きませんか？」

はあ、貴重な休みがこいつらの相手で消える。
でも仕方がなよな可愛い生徒のためだ。頑張るとしよう。
ああ、旅費も用意しないと。通貨はアメリカドルでいいのかな？
今度クロノ君に聞いておこう。

「先生！進路希望書いてきました」

「なに本当か！ハラオウンは偉いな」

「はい！頑張りました」

「早速見せてくれ」

ハラオウンから進路希望の紙を受け取った瞬間意識が飛んだ。

第一志望 先生のお嫁さん

第二志望 先生の愛人

第三志望 先生のセフレ兼執務官

もうこれ志望が死亡と書き直してもいいよな。

ハラオウンに期待した俺が馬鹿だった。

「なあ、ハラオウン？」

「先生！私制服エプロンには自信があります！」

「いや、ハラオウン？」

「もちろん裸エプロンも出来ます」

「よし、分かったハラオウン。先生休日に引率としてミッドチルダに連れて行ってやるから落ち着け。だから頼むから進路相談させてくれ」

「子作り旅行!？」

もう駄目だ……このハラオウン早くどうにかしないと……

「そういえばこの執務官と言うのはなんだ？初めて聞くのだが？」

「魔法で悪い奴らをぶっ飛ばす職業です！」

「官職にそんなのあったかなと思っていたらこれか！」

もうハラオウンが関わってくるとしんどくなってきた。

「高町、八神 お前たちの友達だろどうにかしてください」

最後の希望を込めて高町達に視線を向けるが逸らされた。

「正直私らこんなにアップパーなフェイトちゃん初めて見ました」

「先生と関わってからきつとこうなっちゃったの」

「せやな、私もそう思うわ」

「先生が責任取ってくれば手っ取り早いの」

「せんせ御免な。友達つつうても限界ちゅうもんがあってな」

なんてこったい。俺のせいだのだがその前から可笑しかったよう
な気がするな。

「他に原因はないのか？」

「あー……元々なのはちゃんちゃんのSLBぶつけたんが悪いんとちゃ
う?。」

「そんな事ないの!はやてちゃんちゃんが闇の書闇の書の闇に取り込んだのが
悪いの!。」

よくわからないことを言っているが要するにこうなる可能性は少
なくとも二つはあったのか。

「つまり二人とも心当たりがあるんだな?」

「「ありません!」」

どうなんだよ。そろそろ先生も我慢の限界だよ。
頭がち割るよ。

「せんせが捨て犬に餌をあげたんが悪いんや。愛する生徒達の所
為にせんといってくれる？」

「ああ、分かった分かった。とりあえず進路確認するぞ」

高町：魔法少女

八神：管理局（外国？）

ハラオウン：しつむかん（仕事内容不明）

うん？実は高町が一番ひどくね？

「なあ、高町。俺の記憶が正しならお前が一番何も考えていない
じゃないのか？」

「……なのは、わかんない☆」

即アイアンクロー

「いた、いたた、痛い先生」

アイアンクローを説いてやるが次の言動によっては本気で行く。

「先生！！アイアンクローするなら私に！！なのはに構っちゃい
や」

ハラオウンが何か言っているが気にしない。

「うわ————ん——！先生に傷物にされた——
——！」

こいつはいきなり何を言っているんだ？
少し現実を教えておいてやるか。

「一応言っておくがな高町。そんな叫び声を上げてても誰もお前の
味方をしないぞ」

「体罰教師美少女中学生三人を手籠めに……明日の朝刊の見出し
考えているんやけど。せんせ、どう思う？」

「八神、俺が塀の中に行くことで何か解決するのか？」

「やっぱり、うちでは効果薄いか。ならフェイトちゃんゴ—」

「分かったよはやて。フェイト・テストロッサ・ハラオウンは—
！本田先生と結婚して—！魔法も処女もすてま—す！」

「やめろ やめてくれ やめて下さいハラオウンさん。お前は
先生をそんなに塀の中に入れていいのか」

「ご丁寧に窓まで開けて叫ぶ奴がいるか。
やっちと落ち着いて話せる状態になった。」

「あのな学校内ならそういう系の話をしても構わないぞ。誰もまともに受け取らないからな。ただ外ではするなよ」

「しまった……あかんかったか。せんせも出し抜けんとガチガチな管理社会は渡っていかれへんわ……」

八神ねお前それで友達をなくしていることに気付いていないのか？

この前月村が泣きついてきたぞ。どうにかして下さいって。

「先生、私も決めました」

「おう、高町は一体なんだ。実家を継ぐのか？」

「私は教導官になることにするの。フルメタルジャケットばりにビシバシ鍛える鬼軍曹魔法少女するの」

魔法少女は抜けないんだな。なんでそんなにこだわっているだ？
二十歳まではセーフとか思っているのか？アウトだろ？

「そうか高町は自衛隊志望か。最近是不景気だから、そういうのもアリだと思うぞ。軍曹ということは一般曹候補生になるが、受験資格は高卒になるから高校進学だな」

「でもな高町、自衛隊に行くならちゃんとして防衛大出た方がいいぞ。士官以外は基本的に30前後で退役だ」

良くないが良かった。これで少しは上に報告できる。学年主任には報告できる。ひゃほーい。

と考えていることを表情に出さないようにしている。

「せんせー、でもなちょっと文化違えば魔法だってあるし犬だって空を飛ばしエリートコースまっしぐらの中学生だっておるんやで？」

「中学生腹ボテ魔法少女って良いですよね……先生」

またこいつらは大人がなんで居ているのか分かってないな。

後、ハラオウンはどこでそんな言葉を覚えてくるんだ。

クロノ君の性癖ではないし。

「そもそもそれが間違っているんだよ八神。中学生を軍人に採用するなんてどこの発展途上国だ？」

「でも、私たちの力があれば犯罪が減るのは確かやで」

「そうか、でも先生は中学生や小学生ぐらいの子供に自分たちの不手際のツケを払わすような世界は願ひ下げだ」

「なァ八神、お前が身体的な事情で一時期学校に通えなかったのは知ってるし、そういう心理状態に陥る事情も理解は示すがな……今は俺の話を真面目に聞いてくれ」

何故か八神が顔を赤くしてこっちを見ている。
何か琴線に触れること言ったか？

「先生の正義感に私の心もがっちり説得されちゃうんだ……。1
6歳の時に責任取ってもらうんだ……」

もうハラオウンは無視していいと思う。

「とうるか子供にそういうことをさせないために大人が居るんだ。
子供は将来のために学ぶのが仕事だぞ」

「それに逆に聞くがお前等、才能があるからって理由で10歳や
そこらの子供が実弾が飛び交う最前線に投入されるってことにどう
思う？」

「単純に考えて未来の担い手を戦地に送り出してしまったら社会
は終わってしまう。だからお前等にもきちんと日本の社会に居場所
を作って欲しいんだ」

また、三人でひそひそ話し出したな。

うん？結論が出たのか？

「じゃあ」

「やっぱり」

「三人とも先生のお嫁さんちゅーことで！」

「えっ？ 何言ってるの？マジで勘弁」

思わず素が出てしまった。

「まあ、お前らも16になる頃には、恋人の一人も出来ているさ。それにもうすぐしたら先生もおじさんと呼ばれるようになって、ウザい、キモいと言われるようになる。今だけさ」

「つまり16までずっと先生にメロメロなら責任取ってもらえるんですね！やったー！私だけの家族が出来るよ！」

その発想はなかった。

どうしてその発想が出てきた。

「こら、ハラオウン。立派なお義母さんや義兄さんがいるじゃないか。そんな事言ったら悲しむぞ」

毎回こんな寸劇ばかりだ。しかも回を重ねるごとにひどくなっていく。

神はいないのか！

「あと、八神なこの前シグナムさんにいきなり勝負を仕掛けられたんだか今度こういうことはしないように言っておいてくれ」

「えっ？」

報告書の一部抜粋

本日例の三人の進路が見えてきました。

特に高町は自衛隊に向かうようなのでしっかりサポートしていきたいと思います。

他二名は外国にある会社みたいなので詳しく調べておきます。

「本田先生ちょっと良いかね？」

「何でしょう教頭先生？」

「ほ、本当に進路に希望が見えたのかね？」

「はい。これからさらに頑張りたいと思います」

「そうしてくれ。彼女たちは学校始まって以来の問題児だ。頼りにしているよ」

ピンクの髪をした人にいきなり斬りかかれたが指二本で白羽取りしていた。

小学生ぐらいの時の高町さんに似た子供に極太のビーム撃たれていたが手刀で叩き斬っていた。

昔に氷村 遊が襲いに行ったら瞬きした間に地面に埋もれていた。

海の上に立っていた。

美由希さんの料理を見て悲鳴を上げていた。

その後なのはちゃんが作ったクッキーを食べていた。

メイドさんと仲良く歩いていた。

お断りスリーと似た三人ともう一人の子供と話をしていた。

第六話 先生の新たな決意

やっと夏休みに入った。

これでしばらくは高町達の面倒を見なくていいと考えていたら甘かった。

ミッドチルダに就職活動のために行くことになっていたからだ。

「なあ高町。先生な外国に行くことは聞いていたけどな、流石に異世界に連れてこられても困るんだが」

隣でハラオウンが既に暴走状態に入っているし。

「先生と婚前旅行なんだ……景色が綺麗なホテルで出来婚しちゃうんだ」

「ハラオウンはいつも通りだし役に立たん。八神、高町、お前たちがいっしょにしてくれ」

「まあまあ、ええやないのせんせ。いつも気を張っていたら疲れるだけやで。ほらぴちぴちはいんばいんの女子中学生達に囲まれて、この幸せもん」

八神が珍しく腕を組んでくるが、正直ここまで技術格差があるとは思っていなかったので少々気を許しすぎた。

「幸せってなんだ？」

後ろで高町が答えてくれた。

「振り向かないことじゃ無いですかね」

「結婚が幸せだって！言っていたよ！みんな！」

「そうだな。お前たちもあと十年したらちゃんと幸せつかむんだぞ」

「先生に子袋を掴まれちゃうんだ……幸せ絶頂させられちゃうんだ……」

本日もスロットル全壊（誤字に非ず）だハラオウンの奴。

「……ハラオウンはこんなんでも働けるのか？」

「……フェイトちゃんは、仕事の時はまだしっかりしていますから」

その後も管理局の施設内を歩いて紹介されたが、出鱈目過ぎて頭がいたい。

誰が食うんだよ宮崎アニメみたいな量のスパゲッティは……なんでこんなもんが社員食堂で出てくる。

地図を見たら首都なのに放棄区域とか書いてあるし。

訓練所ではどう見ても小学生ぐらいの子供が射撃の練習をしている。

「……なあ高町。あっちの訓練所で射撃練習してるのどう考えても小学生だよな？　ここはあれか？　少年兵の訓練所か？」

「あー懐かしいなああれ私らもやったねえ」

「うんうん、いい思い出だねー」

「簡単だったよね……」

頭が痛い。

こいつ等感覚がマヒしているのか？

「いや普通におかしいだろ。なんで子供に凶器持たせて軍事訓練なんてやってんだ大人はどうした大人は」

「今は警邏中ちゃいます」

「子供が戦わなければいけない社会なんておかしいんだよ！お前からこんなもの見せて先生が支持すると思ったのか！」

どうしてそこで不思議そうな顔をする。

なんで俺がこれを見て納得するように思う。

「……お前等、帰ったら社会と道徳と倫理の補習な」

「ちょっと待ってえな。なんでそんなん受けなあかんの？」

「私には関係ないの。どうせ帰ったら数学以外の全教科補習だし」

高町の奴は開き直っているな。

「平岡先生の社会の時間でアフリカの少年兵の話しただろうが！
何聞いてたんだお前等！」

一時間ほど説教しておいたがどこまで効果あるのか。

「…と、いう訳だ。お前らいい加減目を覚ませ。少年兵の末路は
抜け出せない地獄だぞ」

「えーでも私ら、普通に就職するよりええお給料もろてるし…」

「金の問題じゃないんだよ。大概の少年兵ってのはな、拉致や洗
脳みたいな世間一般のイメージで生み出されるんじゃないんだ。平
和な国の流行やかっこいいスタンスと同じでな、かっこいいとかイ
ケてるとか思わせて子供たちを誘うんだ。お前等の管理局とやらに
入ったときはどうだ？かっこいいとかすばらしい職業だと思わせ
てこなかったか？」

そこで黙る三人顔には『そういえば』と出ている。

「本当の悪党はいつもニコニコあなたの隣にでやってくるんだ。
治安維持や正義のためと言えれば聞こえがいいがやっていることは軍

人と同じだろ」

「そういえば私も最初は大きくなった猫や触手相手に戦ってただけなの…」

「しかも聞くところによれば八神は管理局に殺されかけたそうじゃないか。なあ、お前それでいいのか？」

「ハラオウンも良く考えろ。本当の母親に虐待されてて今の母親が助けてくれたんだらう？何で助けられた後軍人やっているんだ」

ハラオウンは俺がもう少しケアをすればいいが高町と八神はきちんと説得しなくてはならないな。

「よし、先生改めて決意した。お前らを真っ当な進路に進めて見せるぞ！」

はやて視線

せんせをミッドチルダに連れてきたんは失敗やったかもしれん。なんか余計管理局の印象が悪くなった気がする。

でも先生の言う通りに進学しても良いような気がしてきた。

せんせは、私らの深い部分まで知らんから言えるのかもしれないけど、何となく知っていても説得しにきそうや。

どうしよ。ほんまにどうしたら良いのか分からなくなってきたわ。

「見ろ八神！あの子なんて10歳もいってなさそうじゃないか！
と言うかヴィータちゃんじゃないか！あんな子を相手にいい大人が
よってたかって……本当に何なんだここは！」

あちゃーせんせに見られたくないところ見られたな。

「もう……もう先生は我慢の限界だぞ八神！ここで一番偉い奴の
とこに案内しろ！」

ああ、せんせが壊れた。

どうしようかな。そやあの人にぶつけてみたら何か掴めるかも。

レジアス・ゲイズがここのトップらしい。

そのまま気が付いたら彼の前にいて泣きながら謝られた。

「申し訳ない……真に申し訳ない！強い魔導師がいれば良い、とは
俺自身何度思ったことか……だが、守らねばならぬ対象に守られてい
ると言うこの事実！何度首をくりたいと思っただか……我々の力が足
らぬばかりに他次元世界の……年端もいかぬ少女達の未来を奪ってし
まうなどいくら頭を下げたところで決して許されてはならないこと

だというのは理解しておりますが…それでも我々は彼女達の力にすが
るしかないのです…」

なんでトップはこんなにまともなんだ！

因みにこの後アドレスを交換した。

後日飲みに行く約束もした。

本田先生目撃証言

お弁当の白米の所が胃薬でした。

狐と神社で話していました。

犯人を追跡中に殺されそうになったところを助けられました。今
では回復しティアナと一緒に暮らしています。流石地雷3エースの
先生です。

妹が人質に取られ狙撃しようにもできない状態でいきなり犯人の
後ろに現れて制圧していきました。流石残念すぎる3エースの先生
です。

聖王教会のカリム・グラシアとお茶をしている時にシスターが乱
入。一秒でシスターの頭を掴んで終了させた。

研究所に迷い込んできたのでガジェットで対応したら全滅した。
その後娘たちも対応に向かったが瞬殺され、私は鉄パイプを尻に突
き刺された。因みに三女は自信喪失し部屋から出てこない。

ⅠⅠⅠⅠⅠⅠⅠⅠⅠ 本編とは関係がありません。

ミッドチルダ 陸士部隊と言えはたった一人の男によって生まれ変わった。

武装隊員は勿論事務官までが魔力に頼らず戦えるようになり地上は平和になりました。

犯罪者たち曰く一番弱い事務官がなんでAクラスの魔導師を倒せるの？

八神が部隊を設立したので見に来てほしいと連絡があり見学に行った。

取り敢えずハラオウンの部下が子供だったのでやめさせた。

何故か代わりに俺が入った。

シグナムさんが俺を見かけるたびに最敬礼をするので部隊の一部が混乱していたが問題なし。

高町が、指導する様子を見たが相変わらず言葉不足なところが否めないので補足しておいた。

休みの日に歩いていたら路地裏から小さな女の子が出てきた。八神達が探していたものだったので直ぐに取りに来るように連絡。

ヘリがきてシャルさんと乗っていたら。こちらを狙っている二人組がいたのでヘリから飛び降りて制圧した。一人は以前襲われたので覚えている。

取り敢えず確保。もう一人気配を感じたが逃げたため放置。後で調べたら水たまりが出来ていた。

捕まえた二人組はナンバーズという戦闘機人と言うものらしい。ノエルさんと似たような存在だな。

後日レジアス中將から連絡があり今回の首謀者の動きを予測。

機動六課最強は誰かと聞かれたので八神を上げておいた。一応上司になるから金には勝てん。

地上本部公開意見陳述会の時のメンバーが八神とハラウン、俺の三人だ。後は六課で待機。

地上防衛隊に何人か教え子が居たので失敗したらお仕置きと言ったら防衛隊の士気があがった。そんなに俺が怖いか？

カリムと久しぶりに会い。今度の休みにデートに誘う。

襲撃されたので空戦をハラウンが、戦闘機人二人を相手にしたが逃げられたらしい。八神は全体的な指揮を。俺は地下から不審な気配を感じたので行くとギンガと昔に倒した眼帯の女の子と赤い髪の毛が戦っていたので乱入。

眼帯のこの攻撃は知っているので速攻で沈める。赤い髪の子の蹴りに合わせてカウンターで沈める。地面に違和感を感じたので衝撃を与えるともた出てきた。これも撃破。迎えに来たらしき子もいたが眼帯の子が持っていたナイフを投げて板を破壊して終了。

六課も襲撃があったらしいが被害はなかったらしい。

そろそろ俺の学校の休暇が終わるので首謀者の所に殴り込みをかけた。

前と地図の位置がほとんど変わらないので楽に終わった。

首謀者の男が俺を見た瞬間に尻を抑えたので直ぐに確保。後は膝を抱えて部屋の片隅で震えている子二人を確保。

因みに保護した子ヴィヴィオが俺をパパと呼ぶようになりカリムをママと呼ぶのでそのまま結婚した。

以上ダイジェストでSTS終了。

以降彼の戦闘シーンを見た人たちの感想。

Sクラスの砲撃を軽々と手刀で切り払っていました。

ガジェットを玩具のように壊していました。

チンクのナイフを蹴りの風圧で落としていました。

シューティングアーツが霞んで見えるほどの蹴りで大半の戦闘を終わらせていました。

縮地を初めて見ました。

空気中にある埃を利用して空を走らないでください。空戦魔導師が泣いています。

川の水を吸い込んでウォーターカッターしないでください。

ガジェットIII型でお手玉していました。

一部のナンバーズが彼を見て行動停止部屋の片隅に逃げて泣いていました。

スカリエッティは今回もお尻に被害を受けていました。

ストライカーゼストが逃げていました。

レジアス中將が土下座をしていました全国放送。

管理局の魔神が通り名になりました。

何度も言いますが本編とは関係ありません。

第七話 補習の女王

今日は進路相談ではなく補習だ。

なので問題児は補習の女王 高町のみだ。

何故か俺が高町にマンツーマンで数学以外全教科の補習をするこ
とになった。

休み前にあった期末試験の結果高町は、平均点が赤点と言う最悪
な結末を迎えてしまった。

「なあ、高町？お前なんでこんな成績なんだ？殆どの先生に匙投
げられたんだが……」

「……それなら先生も匙を投げてくれたらいいの……後魔法少女
も認めてくれたらいいの」

「いや、投げちゃ駄目だろ。先生も高町が何を分かっているか
理解しないといけないから簡単なテストを作ったぞ」

「……先生それって補習の全教科？」

「いや、赤点の全教科」

うん？ 高町がテストを受ける前から倒れてる。

ああ、テストの後に補習すると考えているのか。

「今日はテストが終わったら帰っていいぞ」

「えっ？」

「今日は採点して高町用の教材づくりするからな。直ぐには教えてやることはできないんだ。ごめんな」

午後三時にテスト終了し高町の頭から煙が出ている。

「先生！勉強なんかして何か意味なんてないと思います！社会は経験と技術を求めているんです！」

「いいか高町。頭のよろしくない人間はどの社会でも良いように使われてボロ雑巾だぞ。先生はお前にそんな末路をたどってほしくないな」

「教導隊のお仕事はとにかく相手を打ちのめして、プライドをへし折ってから鍛え上げることだっておそわれました！」

ほんとにロクなこと教えないな管理局。

ああ、だから高町が進もうとするのか。

どうにも高町がコミュニケーション能力が少し欠けているというか尖っているというか。

つまり『言葉より先に手が出ます』を通信簿に書かなくちゃならないのか。

因みにハラオウンと八神は『人の話を聞きましょう』だ。

「そうかそうか、大変だな。帰っていいぞ」

そう声をかけるとどこか寂しそうな顔をしている。

やっぱり何かあったのかねえ。

もう少し話をするか。

「いや待て高町。まだ用事があった」

直ぐに嬉しそうにこちらを見てくる。

その笑顔が辛い。

「先生私に何の用があるんですか？」

「ああ、夏休みの宿題をここでやってなさい。お前は言い訳してサボりそうだしな」

ああ、やっぱり絶望した顔になった。

「だから何かあったら先生に聞きなさい」

そのまま高町は黙って宿題をやり始めた。

すらすらと解いているところを見るに数学なのだろう。

しかしこれは酷い。実は高町用のテストは一年からの総復習＋一学期分の重要なところだけで作ったのだが……意志が折れそうだ。

特に国語系がひどい。この人の気持ちをまとめているのはどれで

すか？で記号問題が全部間違えているし、自分で考えて書きなさいの所は何故かフライパンで肉じゃがを作る方法だ。

意外なことに英語はそこそこ出来ていた。まあ、ミッドチルダでは英語が使われていたしな。

じゃあ、なんで試験の時は解いていないんだこいつ。

「なあ、高町。どうして作者の気持ちが肉じゃがの作り方なんだ？」

「お兄ちゃんから分からないときは何か適当に書いておけば点数がもらえると思ったの」

恭也は何を妹に教えているんだ。それは大学でしか使えないだろう。

「あー高町？それは、この問題文の中から考えて書くんだぞ？それにこの問題文に肉じゃがの作り方はかいてないぞ」

「でも、私はこれを書いた人じゃないから作者の気持ちなんて分からないの……昔から皆が何を考えているのか分からないの……」

「それは先生も分からないぞ。だからこそ話をする。分からないからこそ理解し合うことが必要なんだ」

しかしこんな調子の高町にどうやってあの濃いメンツと友達になったんだ？

「なあ、高町？ 今までどうやって友達を作ってきたんだ？」

「えーと、アリサちゃんとすずかちゃんは、二人が喧嘩している時に乱入して喧嘩しました。フェイトちゃんは魔法で戦ってバインドしてSLBを噛ましたら友達になりました。はやてちゃん達は襲われて一度負けて悔しかったから鍛えて再戦して友達になりました」

「え？」

正直ドン引きだ。

「みんなと仲良くなったのは喧嘩してから仲良くなりました」

これが高町流OHANASHIか。恭也の所為だな。

「それ以外で仲良くなった人はいないのか？」

「それ以降はあまり正面から戦ってくれる人が居ないのでいませんー！」

「なら、友達は今付き合いのあるやつらだけなのか？」

「はい！皆自慢の友達です！」

どうしよう。高町にとって友達を作るのは喧嘩してからじゃないと駄目らしい。

流石お断りスリーの一角。暴虐の高町だ。友達になろうとして殴りに行く。拳で語ってからしか会話ができない。

「ねえ、先生。魔法少女でもイイでしょう？」

「駄目です。高町はもっと社会常識を身に付けような。そうしたらもっと友達も増えるから」

「でも、戦った方が分かり合えると思うな」

もう嫌だこの子。胃が痛い。

その後高町と話しながら採点を終えたのだが、これは酷い。仕事内容が増えた。基礎が出来てないままここまで来てしまったのか。

まだ間に合うから良いけど。泣いて良いよね。

これから教えていくのに必要な教材をまとめて後は家で作るという。

気が付けば六時を回っていたので高町を家まで送る。

最近車の助手席に高町が座っていることが多いな。

はぁー前までは彼女だったのに今では問題児か。

家に帰り対高町用教材を作っているとRHさんとBDさんからメールが入った。

この二人は最近知り合ったチャット友達だ。

今日の事を話すと、二人がなんと手伝ってくれるらしい。
最近の仕事が落ち着いたために余裕があるらしい。

二人の協力のおかげで何とか一日で教材が出来た。
今度お礼をさせてくれと言うが、今は生徒を大切にしてくれと言われた。

なんて出来た人たちだろう。あいつ等もこの人たち位までに成長してもらいたいものだ。

はあー、今日から補習の日々だ。

憂鬱だ。毎日先生に怒られそうだ。
でもなんで教室に誰も居ないの？

「おはよう高町。今日から三週間毎日補習だな。土日も先生が
迎えに行くからな。気にするな」

「おはようございます。えーと、他の皆は居ないんですか？」

「ああ、高町は特別に先生とマンツーマンだ。覚悟しておけよ」

ああ、体から力が抜けていく。

その後先生によって全教科の試験が行われて頭が痛い。

レイジングハートも力を貸してくれないし。私終了のお知らせ。

でも、いつもならここで何か話があるのに今日はそのまま帰って
いいと言われた。

このまま帰ってもやる事が無いし、何よりアリサちゃん達は旅行に行っている。

つまり帰っても暇なの。何か無いかと先生を見ているとこちらに気付いてくれた。

先生が引き止めてくれたのは嬉しいけど……これは無い。宿題を
しなさいとは。

さっきまでこれ以上ないほど頭を使ったのにまだ使えと？

先生はそのまま採点に戻るし。

もっと先生とお話ししたいなと考えていたら先生が話を振ってくれた。

私が話すと先生は色んな顔をする。笑ったり、悲しそうにしたり、色々な顔が見れて楽しい。

家でもこんなに話すことはない。

結局時間が遅くなり先生が車で送ってくれた。

明日から覚悟するように言われたが、毎日先生と話せるならそれも良いかと思ってしまう。

ミッドチルダに来て四日目にティードとヴァイスから連絡があり今日暇なら飲みにいかないかと誘われたのでついでにレジアスさんも誘いました。

先日は俺も興奮状態になっていたのでそのことを謝ったら普通に気にしないでくれと肩を叩かれた。

初めは二人が混乱しカオスな現場になったがレジアスさんが今日は私のおごりで無礼講だと言うことで何とか治まった。

その後酒が入り空気が緩みだすと今度はティードが妹を自慢し、ヴァイスがそれに便乗しレジアスさんが親ばかりを發揮した。

「いやーしかし本田さんはすごいですね。魔力もないのに魔導師を一撃で倒した時は何事かと思いましたよ」

「そうそう、気配遮断して姿が見えなくなるし」

「何よりあの三人の手綱を握っているしな」

「あのーあの三人とはどちらの三人でしょうか？」

「陸の部隊では残念すぎる3エース」

「首都航空隊では地雷3エース」

「陸の上層部ではザンボット3だ」

「もしかして？」

「「高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやての三

人だ！」「」

もうヤダあいつ等異世界でも残念扱いかよ。

「あのー因みにどのあたりが？」

「「」周りの建物の被害を気にしない。犯罪者を見つけたら投降を促す前に攻撃を仕掛ける。スカートで飛ぶ！」「」

「ごめんなさい」

「「」頑張ってください。全てはあなたに掛っています」「」

マジか。くそーあいつ等の所為であいつ等の所為で！うおおお
おおおおおおお！ハイコート・ボォルテッカー！

その後もミッドチルダの問題を話。

ティードには縮地のコツをヴァイスには気配遮断のコツ、レジアスには気の使い方を伝授していました。

三人とも子供が戦うぐらいなら自分たちが犠牲になって戦いたいと考えている好漢だ。この位は良いだろう。

本田先生目撃情報

バイクに乗ってました。その後暴走族とかち合い……さような
らしてました。

車の助手席には良く高町なのはが座っている。

アパートで暮らしていました。

休みの日は翠屋でケーキを食べているのを見ました。

歩いていると良く後ろに金髪の女の子を目撃します。

恭也さんと良く釣りをしています。

八神さんちのザフィーラちゃんとヴィータちゃんと散歩をしているのを見ました。

病院から出てきて大量のお薬を貰っていました。

第八話 休みの日まで浸食される。

寝返りをうつと右手に何か柔らかいモノが当たる。

「ん？何だこの柔らかいのは？」

感触のある方に顔を向けるとハラオウンの顔があった。

「……先生のエッチ」

「ハラオウン？」

「おはよ。せ・ん・せ・い」

……なんだ夢か。前の時の悪夢再びか？

取り敢えず起きるとしよう。

立ち上がると意識もはっきりするだろう。

意識がクリアになりはっきりとする。

足元にはYシャツ一枚のハラオウンがいた。

それだけでなく。下着姿の高町と裸エプロンの八神が笑っていた。

昨日は恭也達と飲みに行って10時に恭也とクロノ君を返してそのあとザッフィーと3時ぐらいまで飲んで家に帰ってから鍵をかけたのは覚えている。

「……お前たちおはよう。……どうやって入った？」

「管理人のおばさんに先生の生徒で進路相談に来たんですと言ったら鍵開けてくれたよ」

……駄目だろ、おばちゃん。毎月家賃ちゃんと払っているじゃん。

「……着替えるから外に出ていけ。用件はその後聞く」

「せんせ、今の私らの格好分かってる？」

「今、私たちが出て行ったら先生の方が危ないの」

「先生！一緒に着替えよ！」

もうヤダこいつ等。

ついに社会的に俺を殺しに来た。

「先生は風呂場で着替えるからお前たちも早く服を着なさい」

「「「はーんー！」」」

あー怠いついでにシャワーも浴びようかな？

いやそうしたらあいつらが何をするか分からん。

さっさと着替えてあいつ等を追い出そう。

高町達が着替え終わったのを確認して座らせる。

「……で、朝から何のようだ？」

「日頃の感謝の気持ちを伝えようと思って頑張ってみました」

「どうや？せんせ。興奮したやろ？」

「……先生に朝のご奉仕するんだ。……興奮した先生に押し倒されちゃうんだ」

ありがた迷惑とはこのことか。

もう俺に休みすらないのか。

……誰か助けて下さい。

「……で、八神は何をしている？」

「あはは、ちょっと遅いけど朝ごはんの準備や昨日はザフィーラと飲みに行っていたんやろ？」

ザッフィーラを連れて行くべきではなかったかもしれん。

いや、もしかしたらこいつらに俺の今までの愚痴がばれているかも知れない。

「そうか、すまん。それからその二人。先生の下着を鞆に詰

めない」

「ごめんなさい」

はぁーこいつらも一応は思春期なのかね。

……で、ハラオウンは今日も暴走してるな。

この際俺の洗濯物を洗っているのは良いでしょう。

でもなぜハラオウンはなぜ女物の下着も一緒に干す？

「なぁ？ハラオウン？これはなんだ？」

「私の下着ですよ？」

「だからなぜ先生の下着と一緒に干す？」

「濡れたから？」

ぐはっ！ヤバい！このままでは俺が終わる。

思わず、膝をついてしまった。

胃が痛い。

高町、ハラオウンを止める！の意味を込めて見るとうなずいてくれた。

「フェイトちゃん。これを取ってこーい！」

やめて！俺のパンツ投げないで！

ハラオウンここは二階だ。

窓から飛び降りないで！

「せんせ？何やってんの？」

「なあ、八神。先生はもう駄目かもしれない」

「せんせ、そうは言ってもな。私たちの進路をホンマに一緒に考えてくれるのは嬉しいんよ。コミュ障のなのはちゃん達が生懸命考えてやったことや。多目にみたって」

「八神！なら、止めてくれ。先生の社会的地位が脅かされている」

「アウトになったら私が先生を貰ったるわ。それに異性の部屋に入るのは初めてやしテンションが上がっているんよ」

勘弁してくれ。

何が悲しくて教え子に婿入りしなくてはならないんだ。

大体先生に異性を感じないでくれ。

「それより、遅めの朝ごはん出来たよ」

「全員分の食器あるかな？」

何だかんだで八神の作ってくれた朝食を全員で食べたが普通に美味かった。

これで普段のあの態度がなければモテるだろうに。

もし彼氏が出来ても胃袋から掴めるだろう。

「で、もういいから帰ってくれ。先生久しぶりの休みなんだ。そ
うだろ高町？」

「そうですね。でも、アリサちゃん達は家族と旅行に行っている
けど私たちは家族が忙しいから旅行に行けないの」

「そうかそうか。大変だな。先生は、まだ仕事の準備があるんだ。
帰ってください」

忙しくはないが、仕事の続きがあるのは本当だ。

「先生、これを見て？温泉だよ温泉！」

「そうだな。温泉だな。しかも近いな」

「そこでや、せんせが私らの引率になってくれたら問題が解決す
るわけや。旅費はこちらで出すからお願ひします」

「引率なら八神の家族でも行けるだろ？家族と一緒に行ってきな
さい。高町とハラオウンもそれに同行させてもらえ」

何が悲しくて教え子、しかも女子を三人連れて温泉旅行に連れて
いかにゃならんのだ。

しかも教え子にお金を出させるなんて言語道断だろ。

「いやーだからな。先生に温泉で日頃の疲れを癒して貰おうと思
ってな」

「なんで、疲れを癒すのにお前らの面倒を見なくちゃならんのだ」

「嫌やわーせんせは、私らを現地に連れて行ってくれるだけでい
いねん」

「後は私たちは勝手に遊ぶから気にしなくてもいいの」

「私が先生の体を洗うよ！……その後に先生に洗われるんだ……
洗われてその場でおいしく頂かれちゃうんだ。今日の晩御飯はお前
だされちゃうんだ……」

「絶対にノウ！ 大体お前らを放置したら何をするか分からん。
駄目だ駄目だ！」

あいつらを連れて温泉に行ったらどうなるか想像するだけで寒気
がする。

主にハラオウンが暴走し八神が焚き付け、高町はそれを見てるだ
け。

こうやって考えると高町が普通に見えるがそうじゃないんだよな。

どうやって会話に入ったらいいのか分からないから返事をするだ
けの立ち位置にいるんだよな。

「せんせー、これを見ても断れるん？」

八神の声に意識を向ける。

八神が携帯の画面をこちらに向けてくる。

最悪なものが映っていた。

携帯には俺の上に跨っているハラオウン（裸Y）の姿が映っていた。その奥には高町が服を脱いでいる途中だ。

「ははは、よく出来たコラだな？」

「ほんまにそう思うんなら、そうなんやろうな。せんせの中ではな」

くそう！多分あれは本物だ。だが俺は寝ていたから手を出していない。

しかし、写真を見た人がどうとるかは別だ。

どうする？どうする？この危機を！

「さあー、せんせ？どうする？どうする？せんせならどうする？」

「少し待て！」

俺は急いで外にでて携帯を取り出し恭也に電話する。

『敦か珍しいな。お前がこの時間に電話してくるなんて』

「忙しい所すまん恭也。実はお前の妹とその友達が俺の家に来ている。助けてくれ。具体的には温泉に連れて行けと脅されている。ヘルプ・ミー」

『何となく事情は分かった。忍と父さん達に連絡する。少し待ってくれ。後少しだけ頑張ってくれ。結果が出次第連絡する』

これで高町家が動いてくれたらいいんだが、最悪恭也は道連れにする。

次はクロノ君だ。

『はい、クロノです。どうかされましたかアツシさん』

「ああ、クロノ直ぐに出てくれてありがとう。今大丈夫か？」

『はい。大丈夫ですよ』

「緊急事態だ。TFYが俺の家に強襲。温泉に連れていけのとことだ。援護を要請する」

『りょ、了解。直ぐに母さんとエイミーとで準備します。後ヴォルケンリッターに連絡もこちらからします。少しだけ持ちこたえて下さい』

「任せた」

さて、後は時間を稼ぎたいが他に何か打つ手はないか？

うん？メール？RHさんとBDさんから？

『こちらでも状況把握。管理局に連絡。レジアス中将が協力。人事課にヴォルケンリッターの休みの確保を約束。後伝言を預かっている。【希望を捨てないでくれ】』

こ、これは頼もしいがRHさんとBDさん一体何者なんだ？管理局の事も知っているしレジアスさんにも連絡取ってるし。

「あれ？レイジングハート？今何かしてた？」

「うん、バルディッシュもどうしたの？」

『No Problem』

高町とハラオウンがアクセサリーに話しかけてそれが返事をして
いるがまさかあの二基が……まさかな。

携帯が再び鳴る。相手は恭也からだ。

「もしもし。どうだ？」

『この土日なら俺も父さん達も行ける。あと、忍の家とアリサちゃんも行けるぞ。そっちはどうだ？』

「了解。こっちは後クロノ君からの返事待ちだ。ただ、この前向こうで知り合った管理局のお偉いさんも尽力してくれるらしい。恭

也、本当にありがとう」

『こちらこそすまない。本来なら俺たちのやらなくてはならない事なのに……全てお前任せにして悪かったな』

「気にするな、親友。これは俺の仕事でもあるからな」

『ありがとう』

恭也との電話を切ったら直ぐにクロノ君からかかってきた。

「クロノ君どうだった？」

『日によりますが調節します。母さんも行けそうです。後、何故かレジアス中將が掛け合ってくれてヴォルケンリッターは何時でも休めます』

「本当か！？なら高町家が今週の土日空けれるそうだから頼んでもいいかい？」

『全力で取り組みます。それでは！』

こ、これで問題が解決出来た。

後はこいつらを説得して終了だ。

「よし、良いだろう」

「え？ホンマにええん？」

「ああ！ただし先生は行かない」

「どういうこと？」

「先生がお前らの家族に連絡とって時間を作ってもらった。今週の土日に家族水入らず遊んできなさい」

「じゃあ、先生はどうするの？」

「先生はやることがあるから行きません」

「そ、そんなー」

「先生も行こうよ。一緒にイって子供作ろう？」

三人があまりに悲しそうな顔をするので罪悪感が湧いたが心を鬼にする。

ここで甘やかすと今度はどんな要求をされるか分かったもんじゃない。

たまには家族とゆっくり話して欲しいものだ。

高町なのはの場合

今日はフェイトちゃん達と一緒に先生の家に行ったの。

場所は何故かフェイトちゃんが知っていた。

先生を驚かすためにあんな格好したけど先生は相手にしてくれなかった。

きっと私とはやてちゃんの胸が小さいからだ。

あと、先生の下着を見つけた時に思わず鞆の中に入れようとしたけど見つかって阻止されてしまった。

下着のサイズは覚えたの。今度来た時には必ず。

後は、皆が忙しいと思ったから旅行の事を言い出せなかったのに、なのになんで先生は簡単にそんな事言えるの？

せっかく先生と一緒にいる時間が出来たと思ったのに。

それにお母さんとは、まだ話すけど。今更お兄ちゃんやお父さんと何を話せばいいのか分からない。

フェイト・T・ハラオウンの場合

はやてに先生と旅行に行く方法があると言ったから乗ったのに結局は行けなくなった。

あんな恥ずかしい格好までしたのに。

先生の反応は薄かった。

私は私だけの家族が欲しい。

確かにお義母さんもクロノも家族だけど。やっぱり私は私だけを見てくれる人が欲しい。

先生は私を見てくれる。私を知ってくれようと話しかけてくれる。

見捨てないでくれる。

だから先生が良い。

八神はやての場合

予想外やった。

せんせの交友範囲を舐めておった。

まさか管理局の方にも知り合いを作っているとは思わへんかった。

まだまだ駆け引きが甘いわ。

せんせは常に私の予測を上回る。

こんなんじゃないあの子等を守っていかれへん。

私にはあの子等しかおらへん。

でも、朝食をおいしそうに食べていた、せんせはなんや可愛かったな。

第九話 教え子たちの現状まとめ

はあ、高町達があそこまで暴走するとは思わなかった。今後はこういう事が無いようにしないとまずい。

手は出していなくても人の見方次第では淫行教師だ。

ひとまず、あいつ等の進路についてもう一度考えよう。

高町なのは

実家が翠屋。

成績は下の下。(数学除く)

一年での出席率低。

二年での出席率普通。

交友関係は非常に狭く主にハラオウン、八神、月村、バニングスの四人だったが中学に入りハラオウンと八神のみとなった。

また友達の作り方を知らない。(肉体言語のみで作ったため)

性格は至って真面目で素直(ただし肉体言語が多い)しかし人の話を聞かない。

魔法を使う時の服装が小学校の服装を改造したものでスカートで空を飛ぶ。

実家でもあまり会話をしない、出来ない？

両親とは一度話はしたが問題なしだが、高町の歪な育ち方からもう一度面談する必要あり。

今後の進路は魔法少女から鬼軍曹教導官魔法少女になった。

上司には自衛隊に進むため進学と伝えた。

フェイト・T・ハラオウン

実家が異世界の軍人？

成績は中の上（漢字が苦手なのか少し国語系の成績が悪い）

一年での出席率低

二年での出席率普通

交友関係は非常に狭く高町と同じである。（高町と関係により同性愛者と考えられていたが現在はバイセクシャルと考えられている）

魔法の使用時は水着みたいな格好でどう見ても痴女である。（実母はもっと酷かったらしい）

性格は真面目で素直だが、性的妄想が激しすぎる。また被虐的な思考に陥りやすい。しかし人の話を聞かない。

突拍子のない思考をし、何故か16歳になるまで俺にメロメロなら結婚するとか言い出した。俺が助けて！

家族とは話はするがどこか自分の居場所がないと疎外感を感じている模様。

また、生みの親から虐待を受けており今のハラオウン家に引き取られるが兵士として働かせられている？

血糖値が異常。

母親のリンディさんと一度面談したが問題のある性格には見えなかったが、今一度面談の必要性がある。

進路はしつむかんと言う異世界での職業？職種である。

今後も進路指導していき進学の道を選んでもらおうと思う。

八神はやて

両親が他界しているが、海外の親戚がいる。

家族は魔法関係の人間？

面談にはシャマルさんが来られた。

成績は中の中（英語が少し悪いが現国は非常に良い）

一年での出席率低

二年での出席率普通

交友関係は広く浅くといったところ。（ただし、同性にセクハラを繰り返すため他の生徒からクレームが来ることがシバシバ。ハラオウンにノーブラを奨めるのは止めてほしい）

魔法を使用するときの格好はスカートである。（曰くパンツじゃないから恥ずかしくないんや）

性格は、上記の二人に比べどこか達観しているところあり。ただ、同性のセクハラや他人を利用して目的を達成しようと考えているところあり。

家族とは非常に仲が良く問題無いように見えるが、家族の考えがこちらと合っていないところがあるため今後注意が必要。

しっかりと現実を見ているようで視野がまだまだ狭いため力を発揮出来ていないところあり。

進路は管理局の事務員と答えていたが恐らく嘘だろう。

また管理局が八神を殺そうとしたこともあるので気を付けなければならぬ。

被害者なのに加害者という立場にいるみたいだ。（レジアスさんからの情報。因みにレジアスさん情報で八神の事を考えてたら早く管理局から離さないと昔の事でまた命を狙われる可能性があるらしい）

今後進路指導していき八神の本心を聞きたいと思う。

何となく三人の事を纏めたが、なんでこいつ等うちの中学に来てるの？

一応ウチは私学でもそこそのレベルの学校だよ。
進学が普通だろ。

なのに異世界に就職。

しかも働くところが技術力はこっちを遥かに超えているが、テロとか頻発する発展途上国みたいなのところもあると非常にアンバランスだ。

ああ、こんなの学校の卒業生の進路欄で就職ともかけないし、どうすればいいんだよ。

やっぱり進学だな。頑張ろう。せめて高校は卒業してもらおう。じゃないとやっぱりあいつらが損するような気がする。

学校では何を学ぶべきか教えていかなくってはならない。

うん？教頭からメール？

今週末に温泉にでも行って休んできなさい？

上司命令。

お金は教頭先生が自腹で払っており予約は済んでいるとのこと。
場所は高町達が持ってきたパンフレットの温泉だ。

最後に教員一同からのメッセージ『いつもお疲れ様です。これでリラックスしてきてください』

……みんなありがとう。

……でもタイミングが悪いです。

まあ、あいつ等も家族そろってだから違うところに行くよな？

……せめて一家族だけにしてください。……神様。

第十話 血煙温泉ぶらり首 (前編)

ああ、久しぶりの温泉だ。

一人旅も久しぶりだな。

朝も早くに出たので渋滞もなかった。

宿について部屋に案内してもらい。

早速準備に温泉に行く。

途中で聞きなれた声が聞こえたような気がするが気のせいであり
ますように。

一応気配を消しておこう。

「……ねえ皆、先生の匂いしない？」

「フェイト、あんたが何を言っているのか分からないわ」

「でも、先生の車があったような気がするんだけど」

「三人とも先生とよく話しているもんね」

「まあ、説教がほとんどやけどな」

「ほんと、本田先生には頭が下がるわ。あんたたちの相手を毎日
しているんだもの。特になのはなんて三週間毎日補習だったんでし

「よっつ？」

「あれは、地獄だったの。だって朝から晩まで勉強だよ。しかも逃げる事が出来ない。お弁当食べていても偶に問題出してくるし。土日も迎えに来て勉強だし。……私の作ったお弁当は普通だと言うし」

「あはは、なのはちゃんも大変だったんだね」

「なのはずるい。先生に毎日密室でいけない保健体育の補習なんて！」

「何や聞き逃せないものがあったけどな。せんせにお弁当とかな」

……やっぱりお断り3に優等生二人か。

バニングスに月村お前たちに任せた。

頼むからその爆弾娘たちを抑えてくれ。

……俺は……俺は、休みたい！

じっと息を潜めて気配を消して通り過ぎるのを待つ。

しばらくして高町達の気配が遠のいていくのを確認して温泉に向かった。

なんで温泉に入るだけでこんなに疲れてんだろ俺。

温泉につかりながらぼうっとしていると恭也達の気配を感じた。

先に入ってきた恭也に話しかけられた。

「うん？敦か？」

「ああ、恭也か。やっぱりここになったんだな」

「ああ、なのはが持っていたパンフレットを見てな。お前はどしたんだ？なのはがお前は家でゆっくりすると聞いていたから驚いたぞ」

「ああ、教頭先生や先生方が気を回してくれてな。上司命令で温泉だ」

気が付けば他のメンツも入ってきている。

高町家の大黒柱の土郎さんにクロノ君、ザッフィーだ。

「いやー本田先生も来ていらしたのですか」

「ええ、久しぶりに休暇です」

「でもアツシさんが来るとは思いませんでした」

「ああ、主から家でゆっくりしているとのこと聞いたからな」

「俺もその予定だったのだが、教頭先生をはじめ先輩の先生方がお金を出して休んでこいと言ってくれてね」

「そうか、良かったな」

「いやーどうだろ？休みの日に教え子に会うのは気まずいぞ」

「そういうもんか？」

「恭也だって休みの日に学校の先生に会うのは嫌だったらだろ？それと一緒にだよ」

「それもそうか」

後は男連中でまったりと最近の事を話し合っていた。

土郎さんい今度面談することを伝えようと思ったが、旅行先でそれを言うのは無粋だと思い自重する。

全員で温泉から出てくると女性陣が見えたので気配を消して部屋に戻ることにしたが、……何故か恭也達に身体を拘束された。

やめろーシ ョッカーぶっ飛ばすぞー！

その後はなし崩しに高町・ハラオウン・八神・バニングス・月村の五家族と合流。

子供たちは遊ばしておいて保護者達と学校での話になった。

「ええ、バニングスさんはいつもハキハキして与えられた課題も完璧にこなしますし問題はありません。月村さんも成績面、生活面もいいですよ。それに委員長としても何時も頼りにさせていただいてます」

「あのー？なのははどうなんでしょう？」

「フェイトもどうなんでしょうか？」

「はやてちゃんは大丈夫でしょうか？」

「……今度時間を作ってください。色々話したいことがあります。近いうちに面談しましょう」

「「……はい」」

どんよりした問題児三人の保護者達。

正直な事を言うのは心苦しいが、ここで言わなければあの子たちは止まらないだろう。

教師は嫌われてなんぼなところがあると思っている。もちろんそれは結果を出さなければ意味がないが。

「今日の所は折角の旅行なんですからゆっくりして楽しみましょう。それにそんな顔されたら子供達が不安になります」

「「……そうですね」」

少し影があるが先ほどより表情は明るくなったので良かった。もう、胃が痛すぎる。

この前は宿直室で寝ていたら枕に大量の抜け毛もあったし……心なしか白髪があったような。

その後は恭也と話したり八神とハラウン連合によるセクハラを受けた^りして夕食時になった。

なぜ俺はここに居るのだろう？

右隣に高町、左隣にハラウン、正面に八神とバニングスと月村。

泣いていい？

うん？恭也からメール？

『お前は今泣いていい……泣いていいんだ』

うあああ あああああ！……帰ろう……家に……うおおおおお

おおおおおおおおお！

「せんせ、どんな気分や？聖祥中の美少女中学生を囲っているのは？」

「もう、先生を一人にしてくれよ」

「ちょっと、はやて！先生死にそうな顔しているわよ！」

「はやてちゃん。周りの視線が痛いの」

「はい！先生あーん」

「……先生。お酒をどうぞ」

「バニングス……お前が最後の希望だ！」

「月村……お前は思ったよりマイペースだな。だが、先生はお酌はいいから家族の所に戻って欲しいな。あと、どうせならノエルさんと代わってくれ」

「高町も視線が痛いなら家族の所に帰りなさい」

「ハラオウンは何時も通りか……どうせあーんするならリンディさんの方がいい」

「八神は後でお説教な。ヴィータちゃんがつまんなさそうにしているぞ」

ああ、保護者の視線が痛い。

男連中は見て見ぬふり。そんなだから娘が歪むんだよ。

俺もそっちでお酒飲みたい。

奥さん居ないから駄目？

ザッフィーカモン！

駄目だ肉に夢中だ！

リンディさんは俺が言ったのが聞こえたのか顔を少し赤くしながらうふふと笑う。

ノエルさんは恭也と忍の相手をしている。

「先生は私のお酒が飲めないんですか？」

「月村？……何を言っている？」

「私じゃダメなんですか！暗い子は駄目なんですか！この中で誰がお嫁さんにしたいんですか？」

よく見ると月村の顔が赤いし息から酒の臭いがする。

「誰だ！月村に酒を飲ませたのは！」

「バ、バニングス、と、止めてくれ！高町は俺の腕を抓るな。ハラオウンはなぜ脱ぐ。八神、後でその携帯貸せ叩き割ってやる！」

「いやー、こんなにすずかちゃんがお酒に弱いとは思わへんかったわ。で、せんせ誰がええの？」

バニングスは興味深々だし、月村は目が座っているし、高町は俺を抓ってくる、ハラオウンは半脱ぎで抱きついてくる。

駄目だ！キレそうだ。

カオスが過ぎるぞ！

第十一話 血煙温泉ぶらり首（後編）

カオスな光景は少ししたら治まった。

月村がそのまま寝てしまい。ファリンが連れて行った。

八神はヴィータちゃんが引張って連れて行ってくれた。

ハラオウンもアルフと名乗る少女に連れて行かれ、高町は美由希が連れて行っていった。

バニングスは家族の所に戻っていった。

やっと一息つける。

飯もゆっくりと食べられる。

「先生、先程はフェイトがご迷惑をお掛けしました」

片手にビール瓶を持ったリンディさんに話しかけられた。

「それから一杯どうです？」

「いえいえ気になさらずに……ありがとございます」

リンディさんにビールを注いでもらい一気に飲み干す。

「所でリンディさんに質問があるのですがよろしいでしょうか？」

「はっ？」

「ハラオウン……フェイトさんの血糖値が異常に高いのですが、
体どうゆうことでしょうか？」

「先生はご存じありませんの？お砂糖は体に良いんですよ」

「なるほどそれが美しさの秘訣ですか？」

「あらあら先生、こんなおばさんを口説いてどうするおつもり」

ハハハ……リンディさんがおばさんね。確かにクロノ君のお母さんなら歳だろうが……全然そう見えないな。

むしろ好みのタイプだ。

「ハハハ……何を言いますか。リンディさんはまだまだお若いですよ。結婚してなさらなかったら直ぐにでも結婚を申し込んでいるところですよ」

「うふふ……今度試してみます？」

「……喜んでと言いたいですが、生徒の保護者に手を出すのは世間体がね悪いんですよ。最近はよく問題になっていますからね」

「あらら、ならフェイトが卒業したらどうです？」

「ああ、それならいいですね」

少し酔ったのか自分が何を言っているのか分からないことがあったがでも良いよね。

たまには美人にお酌してもらっても良いよね？

正直リンディさんにかかわれているのは分かっているが……分かっているが口が止まらない。

以降再び悪夢が始まる。ダイジェストでお送りします。

「先生にお母さんと一緒に今晩食べられちゃうんだ。親子丼なんだ。一緒に孕むから孕み丼にされちゃうんだ」

おい、ハラOWN暴走するな！なんで親子丼になっているんだ。なんで先生がお前も口説いているみたいになっているんだ。

「でも、先生！私の方が若くてピチピチだよ。先生の赤ちゃんたくさん産めるよ！」

子供が何を言っている。

子供が子供を育てることが出来ないだろう。

それに先生は未成年に手を出さないぞ。

「アツシさん。母さんをよろしく願います」

「まあ、クロノったら。アツシさんなんて他人行儀じゃなくお義父さんでしょ」

クロノ君が何とも言えない顔をしていたが大丈夫だ……問題ない。

お互いにお遊びだ。そこから火をつけたりはしないよ。多分。

おい八神！こっちを撮るな。

「いやーせんせがリンディさんを口説いていた様子をカリムに送るだけや。最近カリムもようせんせの事聞いてくるからな。教えたいと思うって」

え？この様子をカリムに送る？やめて！

久しぶりにまともで優しく、少し運動音痴なかわいいカリムに送らないで。

最近はやっと名前で呼んでくれるようになったのに……そうまでして先生の結婚を阻止したいのか！

でも先生あきらめないぞ。

「でもな、せんせ。現実を見てみ。最近のフェイトちゃんの様子なら結婚するまですっとなつきまとわれるんちゃう」

え？ハラオウンがいるから無理？

大丈夫だ。ハラオウンも顔は良いから十六になれば彼氏の一人は出来るだろう。

それに先生も後少ししたら三十路だ。そろそろ身を固めて両親を安心させたいんだ。

「あははっははは！先生何時もこんな調子で進路相談しているの！あはっははは。息が出来ない！」

バニングスは何を笑っているんだ。

先生を助けてくれ！

「リンディさん、ちょっと一緒にお外に出てOHANASHIし
ませんか？」

おい！高町はリンディさんにOHANASHIしようとするんじ
ゃない。

魔法じゃなく言葉にしないで。

前から言っているだろう。

殴り合いは会話じゃない。じっくりと腰を据えて自分の言いたい
ことをお互いに納得するまで話し合うのが大切だ。

「先生は分かっているの。お互いに話し合うために相手を逃が
さないようにしないといけないでしょ？」

なに？じっくり話すために相手を拘束する必要がある？

そのためには暴力も辞さない覚悟がある？

高町夫妻に恭也、これがお宅の次女の姿です。

一度しっかり家族で向き合って話し合ってください。

「……分かりました。頑張ります」

やっと娘の現状に気付いてくれたか。

これで一安心だ。

その後もリンディさんが高町達を軽く挑発してカオスは戻らなかった。

せっかく骨休めに来たはずなのに俺は何をやっているのだろうか？
もう嫌だ疲れた。

その後は解散となったが再び男たちの二次会になった。

この時に何時ものメンバーに加えて土郎さんとデビットさん、鮫島さんも参加。

「「「「「「……お疲れ様でした」「」「」「」

「……先生。なのはは何時もあんな感じなんでしょうか？」

泣きそうな顔の土郎さんに聞かれたが嘘は言えないので正直に答えるしかない。

「大体あんな感じですよ。まあ、なのはさんはあまり言葉にするのが苦手、いやどこか遠慮しているところがありますので……まあ、一度時間を作って真剣に話し合ってください」

「しかし、なのはが、あんなに無口と言うか力を見せつけようと考えてるようになってるなんて思わなかったな」

「ああ、ここ三週間の補習でなのはさんの事が少し見えてきたよ。」

と、言うかお話Ⅱ拳でのお話となったのは恭也達の影響もあるんだぞ」

「俺たちの？」

「お前、昔に美由希にお仕置きするときやなんかあった時はお話ししようかと言って道場に連れて行っただろ？」

「ああ、そんなこともあったな」

「その出来事は、幼いなのはさんに影響していたんだ。それに土郎さんとデビットさんは覚えていると思いますが、なのはさんとアリスさんの喧嘩の事ではさんは殴り合ってから友達が出来ると考えるようになったようです」

「……え？」

「さらに止めとなったのがハラオウンの出来事です。今度は魔法の力を使ってお互いの力をぶつけ合うことで分かり合えたと言っていました。さらに才能があったこともあり一気にのめり込んでしまった。そこから魔法を使う理由として管理局に入った感じですね。私としてはもう少し他の道も模索してもらいたいところです」

「……そういえば先生の補習ですが、なのははそんなに点数が悪かったのですか？」

「はい、成績表はご覧になりました？ まあ、隠したのかも

しれませんが……一年次の基礎が出来ていないので二年の問題が分からない状態になっていたようです。今回の補習で出来る限りの事はしました。私が二年に入ってからクロノ君に頼んでなのはさんの出撃要請の回数を減らして貰ったのはそのためです」

「……一度、成績表を見せてもらいます。なのはを信用していたのですが……」

「信用したから何もしないのは止めてください。子供にとってそれは自分に無関心だと言われていることと一緒にですから」

これで高町の家の方に何か良い影響が出ればいいのだが。

それからはお通夜ムードでしばらく過ごしたので気分転換に結婚生活について聞いてみたら壮絶な惚気大会に発展。

独り身のこっちにしたら勘弁してほしかった。

あと、最近はずッフィーがピンチだったらしい。

なんでもテレビで犬の飼い方でシャマルさんがずッフィーを去勢しようと言いついたららしい。

その場は何とかヴィータちゃんとシグナムさんの尽力により治まったらしいが本気でヤバかったらしい。

こうして夜が更けていった。

先に五家が帰るのを見送ってから帰ることにした。

「先生、昨日はありがとうございました。また後日お話を伺いに

参りますのでよろしくお願いします」

「アツシ先生、私も今度仕事の休みが分かり次第連絡させていただきます」

「アツシ様、昨日はお疲れ様でした。すずかお嬢様が昨日はすみませんでしたと事です。それでは失礼します」

「先生。もし教師が嫌になったら私に連絡してください。こちらがプライベートの連絡用アドレスです。先生のお仕事を直ぐに紹介させていただきます」

「アツシ、昨日の写真はカリム殿の所に送られないようにする。希望を捨てないでくれ」

と、保護者の皆さんから暖かいお言葉をいただきました。特にデビットさんは本当に無理だと思ったたら連絡しよう。

こうして俺の休みが終わった。

第十二話 新学期に入ったが……進路が決まりません。

さて早いものでもう新学期だ。

いろいろな不安要素もあるが頑張っ行ってこうと思う。

今日もあの三人の進路相談だ。

「で、新学期に入ったのになんでお前等変化無いの？高町は相変わらず魔法少女必要論だし、八神は取引持ちかけてくるし、ハラオウンは頭の中は春一色じゃないか」

「せんせ、前にも言ったけどフェイトちゃんはもう手遅れやと思うで」

「先生に春を買われちゃうんだ……フェイトのあそこは春一色だねされちゃうんだ……」

「フェイトちゃんのマン開の花は先生と言うおしべが来ない限り開きっぱなしなんです。先生が解決してください」

「だから、先生は年下に興味は無いと何回も言っているだろ」

「でも、せんせはフェイトちゃんのお乳に興味はないん？」

「初めから飛ばすなーこの脳内常春三人娘。あと、高町には夏休みの補習の効果がなかったのか。よし正しい植物学を教えてやる。」

「大体、ミッドチルダにまで行って管理局の人にも会ったんやからもう認めて下さいよ。いうならもうせんせとは、共犯関係なんですよ」

「何を言っているあんな恐ろしい軍事統制国家の内情を見せられて納得すると思っっているのか？先生、向こうで知り合った人たちに話を聞いたが、あんな所認める訳にはいかないぞ」

久しぶりにこのようなやり取りをしたような気がするが駄目じゃん。

あの旅行でなにか変わらと思ったけど変わってないじゃん。
助けてカリム！

「……先生の雄蕊からでた花粉で私の雌蕊が受粉しちゃうんだ……」

「ハラオウン頼むから目を覚ませ」

「高町に八神どうにかしてくれ」

「フェイトちゃん、男の人は上目遣いで抱きつくとイチコロだっ
てお姉ちゃんが言ってたよ」

「フェイトちゃん、こういう時の日本の諺教えたる。『射精したから和姦！』」

「いい言葉だねはやて！」

なんでこうなるの！お前らは先生が目の前で友達を襲っていても平気なの？

……駄目だ。ハラオウンに毒されたかな？

私も食べてと言っただけさ。

しかも八神あたりが『前菜がフェイトちゃん、メインがなのはちやん、デザートは私や！』

ああ、頭が痛い。

そしてハラオウンが抱きつき。

「先生！子作りしよ！」

「三人とも覚悟はいいな？今日も進路相談より説教だ！」

本日も進路相談は進みませんでした。

第十三話　なんか楽しくなってきた

何時も通り放課後になりお断りスリーを呼び出して進路指導。

「さて本日も進路指導だが、先生はお前らが魔法少女とか管理局とかヤクザも真っ青な職場に行かせたくないからしているのだが分かってるのか？　確かに最近はこのやり取りも楽しくは感じだしているが……お前等はそれ以外にやりたいことないのか？」

「真剣に魔法少女目指して何が悪い！誰にも迷惑かけてません！」

いや、迷惑はかけているだろう。

向こうの法律をすっかり覚えてないだろう。

だから逮捕するときの罪状を言わないように速攻で潰しているの知っているんだがな。

「……なら、仮に二十歳越えても『少女』と名乗るつもりか？

例えば、見合いでご職業は？と聞かれて『魔法少女』ですと答える二十代、三十代女性ってどう思う？」

一斉に目を逸らしたな。

「はい！　私は先生のお嫁さんになります」

「ハラオウンは少し待っている」

「待ちます！先生何年待てばいいですか!？」

「ごめん言い直す。しばらく黙っていなさい」

何時も通り暴走しだすハラオウンは放置する。

「で、高町に八神はどうするんだ？」

「二十歳過ぎたら魔導師です！魔導師です！」

「怪しさ爆発だな。もうちょっと人様に胸を張れるような職業を
だな言ってくれ」

「先生！はやてちゃんに張る胸はありません！」

「ちょっと待てやなのはちゃん！私はこれでも着痩せするねん。
大体なのはちゃんも言うほど大きくないやん」

高町と八神が胸の大きさを争いだした。

はあ、言葉選んだつもりなのにどうしてこうなる。

「と言うかな。なんでお前らは一年の頃の作文でなんで魔法少女
やるなんて書いてしかも授業中に周囲に触れ込んでいるんだよ！お
かげで周りはドン引きだ！最近バニングスや月村と学校で話しかけ
てこないのもそれが原因だ！だからどうにかしないといけないのに
お前らときたら……」

いかん。大声を上げてしまった。

こんなつもりではなかったのだが……

「……なあ、他にやりたいことないのか？」

「寿退社！」

「ハラオウン、ステイ！」

「魔法使いの教官！」

「それにはまず話すのが上手くないといけないな」

「お話は得意です！」

「お前のは肉体言語だろ！」

「大体な教官と言うのは物凄い責任が重大なんだぞ。中卒の教官なんて笑わせるな」

「うう……酷い」

高町が泣きまねをしだすが放置。

「あーあ、せんせがなのはちゃん泣ーかした！これは問題やね。早速、恭也さんと土郎さんに連絡や」

「あー八神な。やっても良いけど無駄だぞ。先生はお前らの保護者に泣かしても構わないからしっかりさせてくれと頼まれたからな」

「あー、もしかして私たち余り逃げ場なし？」

何を言っているんだろう？俺が担任になった時点でこいつらに逃げ場なんてあるわけないのに。

「と言う訳だ。高町は他に何か無いのか？……先生は高町のお父さんの大怪我の理由を知っているから余計の事、荒事に関わって欲しくないな」

高町はどこか浮かない顔をしており、ハラオウンはまた何か妄想しているのかクネクネしている。八神は黙って何か考えているがまた取引か？

「一回魔法から離れてみないか？」

「……でも私にはこれしかないの……。これしか褒められたり頼りにされたことが無いの……」

「そんな事ないだろ。実家の翠屋を継いだりとかないのか？」

「でも今からパティシエの勉強しても私……」

「ふつうのパーティシエは高校卒業してから目指すもんだろ。まだまだ時間があるから高校ぐらいは出ような」

高町も心配だが……翠屋も心配だ。

美由希が継いだら集団食中毒とか出そうで…… 知り合いの店がそうなるのは気分が悪い。

「……先生との間に子供は二人は欲しいですね」

「先生もお前たちばかりに構ってられないんだ。他の生徒の事やこれからの生徒の事もある。だから高町と八神がハラオウンの将来のことを一緒に考えてくれ」

今まで黙っていたが急に呟き出したハラオウンにもう白旗上げた
い。

高町達は一斉に驚いた顔をしてこっちを見てくる。

「先生！ここまで来て投げ捨てるってどうゆうことですか！」

「ヤリ捨てやね。この鬼畜教師！ それに私の心配はないんですか！」

「いやー正直教師としてどうかと思うが、八神はなんだかんだで世渡り上手そうだしな。まあ、学生の間にも一回痛い目にあっただ方がいいかもしれんが……因みに聞くが他にやりたいことは？」

「痛い目に合わないように魔導師を顎で扱き使う人」

「そうか、それならますます大学まで行きなさい。後、先生は前は指揮官とか考えたくないんだが」

「なんでなん？」

本当に分かってなさそうなので答えてやる。

「何でって、八神は肝心なところで投げ出す癖があるからな。それをどうにかしないと社会ではやっていけないぞ。と言うか、お前は指揮官とかなっても指揮を途中で止めて自分が前線に参加しただけだな」

「指揮を執るものが前線に出たら士気が上がるやん」

それは時と場合によるんだが……分かってくれないのか。

「何も分かってないな。やっぱり一回痛い目にあっておけ」

「あ……あはははは！ 家族を一度失って、また失くしそうになった私に怖いもんなんてあらへん！……ウッ、ウウウウ……グスッ」

何で分からないかな。こんなに今の家族が心配しているのに。

「その辛さが分かっているならなんで家族に心配かけるような道を進もうとしているんだ。まあ、言いすぎたかもしれないが……すまん」

「えーもんえーもん。私は結構そつなくなんでもこなすもん」

「はあー、ほんとに変に自信ある奴が一番心配なんだがな……まあ、痛い目みないとお前は学ばないか」

「ふーん……じゃ、痛い目みんようにせんせが私を貰ってや。そんでフェイトちゃんやなのはちゃんのようにしっかり、しっぽり、ねっぺりたっぶり心配してくれてもええやーん」

急に笑顔になり俺に抱きついてきた。

「フェイトちゃん程は無いけど私も結構あるんよ♪」

やれやれ。これはほんとに痛い目を見ないと駄目だな。

後ハラオウンがいつの間にか変身しているが高町がどうにかするだろう。

八神の顎をつまむようにしてこちらを向かせる。

「……してほしいのか？」

「……えっ」

「だから望み通りにしてほしいのか？」

「いい、いい、いい、いいやいや！ せんせ……じょ、冗談やろ？」

「……なんだ八神は冗談だったのか。悲しいな」

八神の顔が真っ赤になっている。

やっぱり免疫ないな。

まあ、刺激が強すぎた？

「い、いや冗談やのうて、そ、その……あの」

「ああ、冗談だ。先生が生徒に手を出すわけないだろう」

ネタばらしすると八神はしばらく呆然とした後。

「えっ？……うわあっああ！　だ、騙された！　誑かされた！

卑怯や！　せんせは乙女心をなんやと思ってるん！」

「そうだ大人は卑怯だぞ。これで一つ学べたな。でも、実際にお前みたいな奴は騙されることもあるから気をつけろよ」

頭をポンポンと叩いてやる。

こういう時はかわいい反応するんだな。

「はあーかなわんなー」

「まあ、もっと色々経験するんだな。そのためにも大学まで行きなさい」

「はーやーてー！　死ねええっええ！」

うん？ハラオウンが武器を構えている。

あれ？高町は？

「あっ、先生。今日は用事を思い出したので帰ります」

「お、おい高町。待ってくれ。いや、待ってください。ハラオウンを止めて」

気が付けば八神も変身してハラオウンと向き合っている。

「あははは、冗談や冗談。ややなーフェイトちゃん」

「はははは、そうだよねーはやてーごめんねー」

お互いに笑っているが目は笑っていない。

「先生はお淑やか女性が好みだな」

「だよねー。暴力は良くないよねー」

直ぐにハラオウンの動きが止まり制服に戻る。
疲れるな。

「……遊びはこの位にしてだ」

「えー私との関係は遊びやったん？」

即八神にアイアンクローをする。

「いたたたた！ギブ、ギブ！せんせギブや！」

「……轟戻だ……はやてばかり……轟戻だ！」

「ははは、心配するなハラオウン。先生は八神を轟戻したりしないぞ」

「そやでー、偶にお兄ちゃんと呼ばされてるだけで別に轟戻なんかされてへん」

再び二人とも変身して暴れ出そうとしたので二人ともアイアンクローで吊し上げる。

「「いたたたた。なにこれ。バリアジャケット着てるのに効果が
ない（あらへん）」」

「二人とも学校で暴れたら駄目だろう」

「「ごめんなさい」」

「全く、やれやれなの……こんな荒くれ魔法少女のリーダーを務められるのは私ぐらいなの。大体人を助ける力と名目しているのにその力で喧嘩なんて常識を勉強しなさいと」

偉そうに高町が言っているがさっきまで廊下に出てこちらを覗いていたやつと言って良いセリフじゃない。

「高町……お前はもっと友情を知るべきだ。あと、常識を勉強するのはお前も一緒だ」

「……で、お前たちの進学は？」

「はい！先生のお嫁さんで！」

「ハラオウンは帰りなさい。あと、早くリンディさんと呼んできてくれ」

「あーじゃあ私も先生のお嫁さんで」

「八神も帰れ。あとでシャマルさんとザッフィーとカリムに連絡して相談する」

「私は魔法鬼軍曹で！」

「高町は近いうちにまた家族会議な」

俺の返事に三人とも様々な顔で帰って行った。

ハラオウンは相変わらずの笑顔で。

八神はカリムの名前をだした時点で引き攣った笑みを浮かべて。

高町は完全に青ざめていた。

第十四話 刺客が増えた

「お前たち今週は体育祭があるから怪我とかしないようにしろよ。後、リレーの選手は決まったか？ 決まったなら体育員は後で報告に来るように以上だ。じゃあ委員長号令」

終礼が終わり職員室に戻って今日の授業内容の確認と中間テストの範囲が間に合うかの確認をしていた。

最近はお断りスリーも少しだが成績が伸びてきた。

ハラオウンはもとも成績が良いので除く。

八神は英語が赤点になるかならないかぐらいだ。

高町は数学以外の成績も少しだが伸びてきたこの調子でいってくれたら良いんだが。

……あいつ等の場合は進路もあるからな！。

今日は他の生徒の進路希望を聞かないといけないしな。

放課後になり月村が今日の面談のついでにリレー選手のリストを渡してくれた。

やはりと言うかこのクラスは優秀な人間が多い。

全ての成績が学年トップのバニングスに、座学はバニングスに劣るが身体能力はかなり高い月村、お断りスリーも高町以外はそこそこの成績だ。

他の生徒達も苦手科目はあるが大体平均以上は取れている。

高町が居ても他のクラスより平均点が高いので学年評価は高いが

……お断りスリー存在感からイメージはマイナスだ。

なにに、第一走者はバニングスで第二はハラオウン、第三は岡田で 第四は杉並、アンカーは月村ね。

全員かなりの身体能力を持っており、岡田と杉並は陸上部だ。他の三人もクラスでは断トツで早い。

特に月村は一族の事もあるので反則レベルだ。

恐らく力を抑えるだろうが、それでも常人では太刀打ち出来ないだろう。

「これは期待できそうだな」

「先生は、出ないのですか？」

「なんで先生が出るんだよ」

「いつもクラス対抗には各学年の先生たちが出ていますから。…

…まあ、先生チームが勝った所を一回も見ていませんけどね。

前の担任の先生も歳だからと言っていましたし」

「別に何時もは偉そうなこと言っているのに説得力がないとか、手加減が分かり易過ぎて萎えるとか、本当は大したことがないんじゃないとか考えていませんよ」

ガタッ!!

月村―！ 止めてくれ！ 職員室が殺気立ちそうだ。

ああ！ 体育の西田先生がアップしだした。
教頭が会議の準備をしだした。

月村！ 何をニコニコ笑っているんだ！

「あー、 月村？ 進路相談室に行くぞ」

「はい」

月村を連れて進路相談室に入る。

「な^あ頼むから先生たちを刺激しないでくれ。ただでも先生は、他の先生に迷惑かけているんだから」

「あははは、すいません。ただ……先生には一度本気で私と勝負して欲しかったんです」

「はあー、それでこれか？ まあ、これで確実に先生もメンバー入りだな。お互いにベストを尽くそうか」

「はい！ お願いします！」

物凄い笑顔で頷かれた。

花が咲くようなとはこういうことを言うんだな。

間違っても高町達みたいな獲物を狩る肉食獣のような顔を女性が

するべきではないな。

「さて、月村は進路が進学だがこのまま上に上がるか？ それとも他に行くのか？」

「このまま上に上がります」

「分かった。後は文系と理系決まっていたら教えてくれ」

「理系に進みたいと思います」

本当に大したものだな。

この年でここまでやりたいことを理解しているなんて……俺なんて中二の頃は何も考えずに進学しただけだったしな。

しかし理系ね。確かに物理の成績も良いから可能だな。

「何か作りたいものとかあるのか？」

「はい、人型汎用決戦兵器を」

「人造人間は付かないよな？」

「あははは、冗談です。でも、物作りが好きなのは本当です。だから勉強して大学行って色々試してみたいんです」

「そうか。そこまで考えているんなら安心だ」

やれやれ、本当にこの子は14歳か？

まあ、ここまで明確に先を考えていてくれるならこちらとしても安心だ。

どこぞの魔法少女を謳っている奴らも見習ってほしい。

そこは俺の手腕か。

「なら、今日はもういいぞ。悪いが次は都筑を呼んできてくれ」

「はい、失礼いたしました」

その後も五人ほど面談したが進路は進学だ。

職員室に戻ると西田先生に捕まり会議室に連れて行かれた。

会議室には全学年の教師が集まっていた。

教頭が壇上に立ち俺と西村先生が入ってきたのを確認したら会議が始まった。

「諸君、急に呼び出してすまない。だが、今は私の話を聞いてくれ。今年の体育祭だが、我々教師も積極的に参加することにした」

教頭の話聞いた瞬間周りがざわめきだした。

「いいか、我々教師陣が今まで体育祭で参加していたのはリレー競技だけだ。それもいつも最下位だ！」

「確かに生徒たちを最下位にしない事を目的としてきたが……今年は違う！ 本気で生徒達にぶつかり合い勝ちに行くのだ！」

「そして教師の本当の実力を見せつけるのだ！」

「「「お—————！！！！！！」」」

いつの間にかほとんどの先生がやる気になっている。本気すぎる。

いつの間にか綱引き、玉入れ、リレーに教師が参加することになっている。

しかもその成績が今度の給料に評価されるとのことだ。

因みに俺はリレーのアンカーだ。

どうやら図らずとも月村と当たることになりそうだ。

とある少女達の放課後

私は先生との面談の後急いで翠屋に向かった。

今日は久しぶりに皆とお茶会をすることになったのだ。

「ごめんね。待たせちゃったかな？」

「大丈夫よすずか。今始めたところだし。それにしても早かったわね？」

私はアリサちゃんの隣に座る。

なのはちゃん達は既にケーキと格闘し始めていた。

「あっ、はやてちゃんの言った通りにしたら本田先生がリレーに出ることになったよ」

「ホンマ すずかちゃん。ふっ私の読みが正しかったな。なんちゃって」

「あははは。はやてちゃんは相変わらずだね」

私も先生とは一度本気で勝負してみたいと思っていたのだ。体育祭は何時も先生たちが接待プレイしているみたいで私個人としてはシラケているのだ。

これで少しは面白くなりそうだ。

「嬉しそうねすずか」

「楽しみだね……アリサちゃん」

「ねえ、みんな。一つ聞いてほしい？」

急になのはちゃんが話しかけてきて驚いた。

何時もは私たちの話を聞いているか興味持った内容の時に話に入ってくることしかしてなかったのに。

「どうしたのよなのは？」

「……なんで私の出場競技が玉入れだけなの？」

……その場の空気が重くなる。

言えない……走ったら高確率でこけるなのはちゃんを走る競技で出せるはずがない。

魔法を使えば飛べるのだろうが、陸上での動きは……何故だろう
リオレウスと言う単語が思い浮かんだ。

皆で一斉にアイコンタクトを取る。

アリサちゃんが私に任せると言ってくれたので任せる。

「何でってなのはは走ったら疲労したティガレックス張りにこけるでしょ？ ……その点、固定砲台になれる玉入れならあんたにも活躍の場があると考えたわけ」

「そ、そんな事ないもん！ 私だって普通に走れるよ！ ね？
フェイトちゃん？」

「なのはは空戦魔導師だもんね」

「ふえ、フェイトちゃん？」

「忘れたかなのはちゃん。私たちは所詮固定砲台がお似合いだと！」

「はやてちゃん！ そんなこと言うけど、はやてちゃんは他に騎馬戦と玉転がしに出てるじゃん」

「いやー、私って指揮官型やん？ それに玉転がしは響きがエロいから参加しただけやし。大体なのはちゃんは、自分から立候補せえへんかったやん」

「ううう……皆して私を虐める。先生助けて！」

「いや、無理。自分から動かない奴を助けるほど先生に余裕ないから」

本田先生の声が聞こえたので慌てて振り返ると本田先生がコーヒーを飲んでいた。

その背中が煤けているのが良くわかる。

直後に背中にフェイトちゃんが抱きつき力二ばさみで動きを止めている。

後は顔を擦りつけるので髪が左右に揺れている。

無駄のない無駄な動きだ。

「先生がどうしてここに？もしかして私の事追ってきてくれたんですか？これは結婚するしかないですよね！」

「ハラオウン、ステイ」

先生の指示に従い瞬時に自分の席に戻るフェイトちゃん……調教は完璧ですね。

もう、フェイトちゃんが駄犬にしか見えない。

「でだ、高町。前にも言ったと思うが自分の言いたいことはちゃんと話さないと分からないぞ。後、暴力は良くない。……先生も高町は運動が苦手だから何も言わなかったと思ったぐらいだ」

「でも、先生。……私が何かしたいといったら皆に迷惑を掛けるかもしれないし」

暗い表情で応えるのはちゃんの姿は痛々しい。

ただし、左手でフェイトちゃんの顔を握っているのに目を瞑ればの話だけだ。

でも、言われてみたらなのはちゃんは口下手の所があるから私から話を振るべきだったのかな。

これは反省しなくちゃ。長い付き合いだから分かっていたのに。

アリサちゃんも一緒なのか気まずい顔をしていた。

そんななのはちゃんに本田先生は優しく話しかける。

「なあ、高町。さっきは友達に言えただろ？ なら後もう少しだ。少しずつで良いから、遅れても良いから流されずに自分の言いたいことも言いなさい」

「で、でも、迷惑を掛けるのはいけないことだし」

ああ、なのはちゃんの口癖だ。

『誰かに迷惑を掛けたくない』が昔からの口癖だ。

アリサちゃんが昔にそのことに怒って『迷惑を掛けても良いからもっと頼りなさい』と泣きながら言っていたっけ。

「なあ、高町？ 人に迷惑を掛けることは確かに良くない。だ

けどな、迷惑を掛けない人なんていないんだ」

「先生も？」

「ああ、先生もだ。 それこそ、お前たちの進路調査の提出が遅いと教頭先生に怒られ、その教頭は校長に怒られている」

「「「ごめんなさい」「」」

なのはちゃん達が一斉に謝った。

なのはちゃん達一体何を書いたんだろ？

「あー、今は進路の事はいい。 でだな、 少なくともこの場にいる人はお前の事を知りたいと思っていると思うぞ。 その人たちはお前に迷惑をかけられてもいいと考えているさ」

「……私を知りたいと思っている人？」

「ああ、 だからもう少しだけ良いから色々話してみような。」

確かに高町の意見や考えに反対する人もいるだろう。だけど皆が皆反対しているわけじゃないんだ。だからお前の考え、言葉、態度の全てが迷惑なんて考えは止めなさい」

「で、でも、 私自信ないよ」

「今も本音を言えているだろう？」

「え？」

「頑張りなさい」

その一言を言って本田先生は立ち上がってなのはちゃんの頭をポンと叩いて出て行った。

その後はなのはちゃんは何か考えているみたいで黙っていた。

私たちは何も言わずにこれまで通りに話すことにした。

唯、奥から士郎さん達の泣き声が聞こえ、桃子さんも目を赤くしていたが私たちも他のお客も皆が聞こえない振りをしていた。

でも、嫌な静けさじゃない。

どこか優しい時間が流れていた。

美由希さんが帰ってくるまで。

「うわっ！ お父さんが泣いてる！ 何があったの？」

第十五話 月村無双

ああ、遂に来てしまった体育祭。

晴天で運動するには実にいい日だ。

だが俺の心は雨模様。

まずは格好がヤバイ。

俺は某人切りの師匠の格好をしている。

外套の左右の肩には40キロ程の鉄板が入っており計80キロが負担になっている、さらにはバネも仕掛けられている。

これで少しは力が抑えることが出来るだろう。

なぜこんな格好になっているかというと、月村事変から翌日の朝礼で先生の参加することになったと聞いて一部の生徒が親睦の為に先生を仮装させてくれという意見がでたからだ。

今回の参加理由が『正面から生徒とぶつかり合う』だからこれにも乗ったらしい。

それぞれのクラス担任ごとに様々な衣装が用意された。

……生徒の要望に応えて用意したのは教師だが……まだましか。

バニングスが速攻で用意してくれたし。安かったし。

他の先生は、女装している先生もいれば三十ピーオの女教師が中学の制服を着ている（満更でもない顔をしている）場合もありかなりカオスだ。

ああ、校長の長話で倒れる生徒が出るたびに中断されどんどん校長の長話が延長されていく。

幸い俺のクラスは無事だったが……。色々あったが開会式が無事終了。

その後は50m走や100m走があったが月村無双でA組の点数はかなりのモノだ。

と言いか月村が陸上競技の全部に出場して全て一位を獲った為に陸上部が落ち込んでいる。

まあ、基礎スペックが違いすぎるが……。それでも本気過ぎるだろ月村あ！

ああ、でもバニングスもハラオウンも同じく一位だし俺の生徒がチートすぎて笑えない。

因みにバニングスが障害物競争でハラオウンが借り物競争だ。

ああ、ハラオウンが俺を見つけて飛んできた。

「先生、先生！ 私一位だったよ。褒めて褒めて！」

「……ああ、すごいなハラオウン。後もう少し落ち着きなさい」

「フェイト、あんた何やってんのよ。さっさと席に戻るわよ！」

ああ、バニングスだけが俺の頼りだ。

バニングスが後10年早く生まれていたらな……。胃が持たないか。

ああ、もうすぐクラス対抗リレーだ。

憂鬱だ。なんでよりによってアンカーなんだよ。

本気出したら誰が俺の動きを視認できるんだよ。

動きに制限掛けながら尚且つ本気の月村に勝てと？

力調整が難しすぎるわ！

ところで誰だ借りもの競争で先生の下着と書いた奴は！

お陰でハラオウンの暴走が酷いものだった。

なんでありつはこのタイミングでこのカードを引くんだよ！

「先生！ パンツ貸してください！ 洗って返しますから！」

「あーハラオウン？ なんで先生のパンツが必要なんだ？」

「借り物競争で先生の下着と書かれていたので！」

「藤野先生は駄目なのか？」

ハラオウンが冷たい目でこちらを見てきた。

と言うかこいつがこんな目で見てくるのは初めてだ。

「先生。……最低ですね。……女の人が公衆の面前で自分の下着を見せられたらどう思いますか？」

全く持って正論です。

「先生が悪かった」

「なら、早くパンツ下さい！」

「……ああ」

俺がトイレに行こうとした時バニングスが声をかけてきた。

「先生！ 何しているんですか！」

「何ってパンツをだな……」

「先生！ 借り物は下着なのでシャツでも靴下でも良いはずですよ！
！ しっかりしてください！」

「そ、そうだったな。助かったぞバニングス！」

「……後少しだったのに」

バニングスの一言で公衆の面前で生徒にパンツを持たせる大惨事を免れた。

因みに靴下を渡しておいた。

どうやらハラオウンにあの目で見られたことに動揺していたみたいだ。

物思いにふけていたらしいの間にかクラス対抗リレーになっていた。

俺の隣には月村が居てニコニコしている。
と、言うかこいつ元気だな。」

「……なあ、月村頼みがある。手加減してくれ！」

「何を言っているんですか先生？」

「……先生なお前に勝たないと来月の給料がヤバいんだ」

「……もしかして私のせいですか？」

「……だとしたら？」

「私が来月養ってあげましょうか？」

「……遠慮する。本気で走ってください」

「……そうそう、走者の順番に変更があって四番がフェイトちゃんになりました」

「……なんでこのタイミングで言うの？」

「……嫌な予感しかない。」

「……そうこうしているうちにリレーが始まった。」

「……第一走者は西田先生がトップを独走し後ろにバニングス、そして他のクラスの生徒が続く。」

さすが体育教師だ。

学生時代に陸上部に所属していたのは伊達ではない。

そのまま第二走者の高橋先生にバトンが渡る。

かなりの速さで生徒との差を広げる。

高橋先生は陸上部の顧問だ。

因みに今年で三十ピ―才で今はブルマを穿いて走っている。
いろんな意味で恐怖だ。

第三走者が椎名先生が顔を引き攣らせてバトンを受け取る。

……が、初めはかなり早かったがスタミナが速攻で尽きてしまっ
たようだ。

後ろから俺の生徒の岡田が追いつきそのまま抜き去って行った。

その後三人に抜かれてしまった。

第四走者は渡辺先生が頑張ってくれているが中盤で四位の生徒に
追いついたところでハラオウンがこっちに来た。

ハラオウンの奴体力試験の時より早くないか？

と言うか俺の方に突っ込んできてないか？

「フェイトちゃんこっち！ そっちは先生だよ！」

「ご、ごめんすずか！」

月村がこっちを見て笑っていた。

五秒後に2、3位の生徒がバトンを引き継ぎ走っていく。

ハラオウンが抱きついてくるかと思ったが、今日はおとなしくし

てくれている。

さらに五秒後に渡辺先生が来た。

「すまない本田先生。後は頼んだ！」

「了解」

渡辺先生からバトンを受け取り少し本気で走る。

月村はもう半分ぐらいまで走っている。

徐々にスピードを上げていき前を走る生徒二人を追い抜く。

二人ともかなり驚いた顔をしているが構っていられるか。

ゴール10メートル手前で月村に追いつく！

後八メートル！

少しペースを上げる！

後二メートルのところで月村の目が紅くなる。

ヤバイ！トランザムか！

月村がさらに早くなる！

後五十センチ！

あと一歩だ！

月村と同時にゴールする。

結果はスローで確認するらしい。
おいおい何の大会だよ。

「はあはあ、早いな月村？」

「はあはあ、先生早すぎです」

お互いに息を切らしているが直ぐに整うだろう。

結果はどうなっているのかね。

それと周りで話を聞いて顔を赤くしてこちらの股間を見た奴。
思春期過ぎるだろう。

『判定結果が出ました。一位は月村さんです』

……えっ？

一瞬で目の前が真っ暗になる。

俺の努力は一体？

『いやー、まさに接戦。流石月村さんです。わが校の陸戦の女王
と呼ばれるのは伊達じゃないですね。皆さん拍手を』

月村の勝利に会場が湧く。

俺はそのまま地面に崩れ落ちたいが我慢した。

『後、流石と言いますかあの状態から追いつく本田先生に拍手を
！』

今度は俺に拍手が送られる。

取り敢えず周りに手を振っておく。

取り敢えずその後三年のリレーが終わりこれで午前の部が終了する。

職員室に戻ると他の先生方から拍手を送られる。

軽く笑いながら自分の席に着くと教頭がこちらに近づいてきた。

「いやー、本田君良くやってくれた！最後の最後で惜しかったがそれでも十分な結果だよ」

「そう言って貰えると助かります。それに他の先生方の走りがあった結果です」

「うんうん。この調子で綱引きも頼むよ。大島先生が先ほどのリレーで腰を痛めてしまったのでね」

「……分かりました」

因みに俺の敗北の原因は胸の差だったらしい。

年齢の割に大きい月村の胸が先にテープに触れた為俺の負けだった。

このことを公表出来るはずもなく終了したらしい。

こうして午後は見回りだけかと思っただが再び競技に参加が決定し

た。

因みに綱引きは教師側が10名で生徒側は20名だ。

まあ、教師陣は俺を含め男が4人いるから何とかなるか。

休み時間が終わり午後の部が始まる。

最初は応援合戦からだ。

ああ、やっぱりこの学校の女子のレベルが高いから色々なところの学生が来ているな。

まあ、盗撮とかナンパとかしてないから良いけどな。

さて色々回っているうちに今度は玉入れが始まった。

玉入れでは以外にも高町が活躍している。

八神が玉を拾い高町に渡す。

高町はそれを正確に籠の中に放り込む。

高町の成功率に気付いた他の生徒も何人かが高町に話しかけ玉集めをして高町に渡していった。

高町は笑顔で受け取り投げ続けている。

……ちゃんとやれているじゃないか。

一方教師陣は苦戦気味だな。

ああ、御堂先生無茶だな。

四十肩だと言っていたからなー。

なんで出たんだろ？

これは綱引きが負けられないか。

そして綱引きが来たがまあ、問題なく教師陣の勝利だ。
生徒がいくら引っ張ったところで動かなかったもんな。

途中で力自慢の保護者VS教師となったが勝てたので問題ないだろ。

まあ、次は騎馬戦だ。

女子校で騎馬戦があるのはどうかと思ったがウケはイイらしい。

先日、八神が自称した通りあいつが司令塔になってクラスを動かしている。

自分はまだ前線に出ずに周りを的確に把握し指示を出している。

ハラオウンは八神の狙いを正確に理解し騎馬の子を誘導し一対多に持ち込むように動いていた。

自身も結果を出しながらも時には味方を援護し、かなりの奮闘していた。

ただ、月村自重しろ！

可愛い顔して何お前？

呂布なの？忠勝なの？

単騎で無双するな！

まあ、騎馬のバニングスが正確に立ち回っているから問題ないのかもしれないがそれでも一瞬で六人抜きしないで！

その後も玉転がしや色々あったが俺のクラス2-Aが圧倒的な強さを見せていた。

と言うか殆ど月村無双な展開だった。

あと、嬉しい誤算があった。

玉入れ以降が終わってからのあの高町に何時ものメンバー以外に話友達が出来たみたいだ。

……雨が降ってきたな。

雨が振ってきたので人気の少ない屋根のあるところに移動する。

ああ、本当に良かった。

……本当に良かったな高町。

その後閉会式を行い生徒は一端教室へ移動。

そのまま終礼を始める。

と言うか疲れ果てた生徒達はほとんどだらけている。

お前たちね。先生も一応男だからそういうだらけ方は無いと思うぞ。

「きょう一日皆よく頑張ったな。学年別でもクラス別でもトップだ。本当に良くやった」

「今日はもう帰ってゆっくり休め。以上、委員長号令」

その後は生徒が帰り教師は片付けをしてから帰る。

まあほとんど俺が片付けた。

と言うのも教師陣もかなり疲労していたからだ。

ああ、これ以後は中間テストで、次は修学旅行に文化祭で期末か……ハード過ぎだろ。

……もういらいや、帰って寝よ。

第十六話 中間試験で奇跡が起きた？

今日も進路相談だ。

まあ、高町が順調に真人間に復帰していることとしてるので安心だ。

「さてお前たち、進路もそうだがそろそろ中間試験だぞ。ちゃんと勉強はしているのか？ 頭が悪いとどんな仕事もしんどくなるだけだぞ」

俺の問いにお断り3の面々はいつも通りだ。

「ふっ……なめてもらっちゃ困るの。これでも伊達にSランクの魔法少女やってないの」

「ああ、高町？ 前にも言ったよな？ 現実見てくれと。なんだ一学期の成績は？ 補習の後は勉強したんだよな？ まさか魔法にかまけてないよな？ 新しい魔法とか進化形態とか言っただけでブラスター化とか言わないよな？」

高町が顔を背ける。

RHさんの情報は間違ってたのか。

「先生！ 私は語学得意だよ！ 漢字はまだ苦手だけど頑張るね！ 理数系は任せてよ」

「ああ、ハラオウンは偉いなー」

「えへへへっへ」

満足そうにしているハラオウン。

確かに成績はいいがこの脳内お花畑がどうにかなればいいんだが。

「なあ、せんせフェイトちゃんに個人授業してるんちゃう？　うわ、やらしーわー。私も一緒に教えてーなー」

「八神は何を言っているんだ。大体お前は平均点にギリギリ届くか届かないかのレベルだろ？　と言うかなお前等三人の中で一番成績良いのがハラオウンなんだぞ」

「「えっ？」」

「えへへへ」

「お前らは知らないかも知れないが、ハラオウンは国語系以外はトップクラスなんだぞ。最近はその国語系も成績が伸びてきているしな。でだ、高町、この間の漢字テストの結果なんだが何か言いたいことはあるのか？」

「漢字なんてググれば正解が分かるの。問題ないの。もしくはサーチャー飛ばしてアリサちゃんの答えを見せてもらうの」

最近見直したと思ったらこれだ。

また補習かな？

胃が痛い。土郎さんも最近家族でよく話すようになったと言っていたがもう少し常識を教えてください。

「高町な。カンニングが分かればその場でグシャってするぞ？」

「えっ？」

高町が顔を青くしているが放置だ。

八神が何かひらめいたようだ。

「しかしな^あせんせー私らの魔法の才能は本物なのは先生も認めるところやる？これを活かさへん手はないんちゃう？」

「あのなら八神、銃の腕がいいからS W A Tに入れなんて言う教師がいると思うか？」

「なのはもはやても最低だよ。……先生がこんなにも親身になってくれているのに魔法、魔法って……精々利用するならマルチタスクで複数の教科を勉強するぐらいにしなよ」

ど、どうしよう。あのハラオウンがまともな事言っている。

本当にハラオウンなのか？

実は使い魔の子が化けるとかリンディさんが化けているとかじゃないよな？

「というか、せんせとフェイトちゃん仲良くなったなー」

「うん！私と先生はもうラブラブだから！一緒のお布団でも寝たし！」

「…………え？」

何を言っているんだこいつはもうやめて俺のSAN値は零よ。

「ははははは、ハラオウンは冗談が上手いな！」

「ほら！これ見てよ！」

ハラオウンが胸の谷間から写真を取り出してきた。

この子はどこに仕舞っているんだ。

「…………せんせ？こりゃちょっとまずいんとちゃう？」

「そうなの…………ちょっとまずいの…………」

高町と八神がニヤニヤ笑ってこちらを見てくる。

俺も写真を確認するとそこには確かに俺と裸のハラオウンが寝ていた。

「……って、これは前にお前達が勝手に上がり込んできたときの写真だろ！」

しかし高町と八神はどこ吹く風な対応だ。

「教育者としてのモラルが問われるの」

「これは俗に言う性教育者ってやつやな」

「ふふふ……今回のテストのヤマを教えてくれたら見逃してもいいの（ええで）」

「先生はなお前たちに隠撮や人の弱みを握って優位に立とうとする奴は許せないな」

「バルディッシュ！ザンバー！」

「ああ、写真が燃えた！」

ハラオウンが一瞬で魔法を使って処分した。

「ダメだよ二人共……！脅迫なんて！人のすることじゃないよ！」

はぁ、今日はハラオウンが比較的マシだなー。

しかし気のせいかなハラオウンの行動で俺の外堀が埋まってきたりする様な……いや、止そう。

きっと気のせいだ。

「はぁ、という訳で、テストのヤマを教えてください」

「どういわけか知らんが全部教科書に載っていることだぞ？ちやんとノートとっていたらわかるだろ？それに少なくとも先生の授業ではここが出るぞーと何回もいったぞ」

「……ふっ、凡人には理解できないの」

高町が寝ぼけたことを言い出した。

最近さらに変な影響を受けているような気がする。

「ポン……凡人はお前だよ……格好付けているのかわからんが格好悪いぞ高町」

「大体現代文はまだしも何で漢文、古文が出てくるの！あんなの現代では役に立たないって福沢さんも言っているの！」

「うん、それはな読めないより読めたほうがいいからに決まっているだろ」

「それが理不尽なんだ！」

何この子、今日はテンション高すぎる。
メンドクさい。

「まあまあ、せんせものはちゃんも落ち着いて」

「先生は冷静だぞ……疲れているがな」

「落ち着け言うけどはやてちゃんはどうなの？」

「ふふふ……私はどの教科も平均点をキープ！ なーせんせ？
ほめてほめてー」

確かに八神はほとんどの教科を平均点だが……

「……確かにな……なら何で英語はダメなんだ？いつもいつも赤点になるかならないかのギリギリにいるけど先生の教え方が悪いのか？」

「そ、そんなことあらへんよ。つ、次、次は頑張ります」

「ああ、期待しているぞ。まあ、八神はその性格さえどうにかすれば彼氏も直ぐに捕まえられるだろう。先生はゴメンだが」

はぁー本当に頑張ってくれるのかねー。

「本気を出せばSSだけどめんどくさいからBなの。まだ慌てる時間じゃないの」

「今慌てないでいつ慌てるんだこのポンコツ娘。大体めんどくさいからBってお前そんなにないだろEにしときなさい」

「ブラのカップならEでも歓迎なの」

「……そうか」

今のお前を見てるとそれも無理だろうな。

ふと後ろを見るとハラオウンが歯ぎしりしていた。

「ギリギリ……先生！私は満点！ 満点取るよ！」

「そうか。……ハラオウンなら頑張れば取れるだろう。頑張れよ、分からなかった先生に聞きなさい」

高町に向き直る。

「で、高町、何か言うことは？」

高町は突然土下座してきた。

「……勉強、教えてください」

「よろしい」

「なのは（ちゃん）の土下座初めて見た（わー）」

「いつもはさせてる方なのにね」

「そやね。なぎ払ってバインドして土下座させてるもんね」

高町の奴何時もそんなことしていたのか。

管理局の白い悪魔、暴虐の高町は伊達じゃないな。

中間試験中はお断りスリーも大人しく勉強していた。

ハラオウンも暴走せずに分からないところは積極的に質問してきた。

八神も月村と勉強していた。

高町はバニングスも協力してくれたのでなんとかなると信じた。

試験の終わった教科の採点をしている職員室はカオスだった。

「ば、馬鹿な！ あの高町が古文で42点だと！」

「現代文は48点です」

「こ、これは、夢か！俺のテストで満点が二人だと！」

「や、八神が平均点を大きく上回っているだと！」

現在、職員室では他の先生たちが混乱状態だ！

ムゥー、アイツ等本当に頑張ったんだな。

ハラオウンは英語満点だったし、八神も67点とそこそこ、高町も60点とかなりの進歩だ。

本当にどうしたんだアイツ等？

試験返却時の教室は静かだ。

「じゃあ、試験を返すけど今回は皆よく頑張ったな。平均点もうチがトップだ。さらに満点が二人いる。赤点無し！」

生徒一人一人に声をかけながら返却していく。

「高町！お前は本当によく頑張ったな。この調子だ」

「はい」

高町が嬉しそうに席に戻っていく。

「月村は今回もいい感じだな。この調子で頑張ってくれ」

「はい」

月村はいつも通りだ。

「バニングス。今回も満点だな。この調子で頼む」

「はい！」

いつも通り自信に溢れているな。

「ハラオウン。宣言通り満点だな。よくやった」

「はい！」

元気よく戻っていくハラオウン。

長い髪が揺れて一瞬尻尾に見えたが気のせいだ。

「八神。お前はやれば出来るじゃないか。これからはしっかりな」

「はい」

全員の試験を返し終えて解説する。

この時も全員が真剣に聞いて聞いている。

いつもこのぐらい真剣なら嬉しいんだが。

因みにお断り3には試験時に特別注意事項を設けた。

試験注意事項

- ・ 念話禁止
- ・ 辞書持ち込み可、但し魔導書は不可
- ・ 携帯持ち込み禁止、マジックアイテム持ち込み禁止
- ・ 使い魔は発見次第カンニングとみなす
- ・ 問題が解らなくても答案用紙をアルハザードに転送しないこと
- ・ 時間が余っても問題用紙の裏に魔方陣を書かないこと

上記の注意に従わない場合は即本田先生のアイアンクローレベル

3が発動し、保護者を含めて強制面談

発案者 クロノ・ハラオウン

協力者 リンディ・ハラオウン

ユーノ・スクライア

高町 士郎

高町 桃子

八神 シヤマル

八神 ヴィータ

ミゼット・クローベル

と、多くの人たちの協力があった。

ミゼットさんは知らないので機会があればお礼を言っておきたい。

放課後進路指導室に高町達が来た。

「ふっふっふ、先生。赤点は免れたの！これが私の全・力・全・開！」

ドヤ顔している高町が少し可愛く見えたが気のせいだ。
疲れているんだ。本田淳。

「……ああ、すごいなお前たち。見直した」

「先生！褒めて！褒めて！先生！」

ハラオウンが抱きつきいてくる。

これも何時もどおりだな。

八神はカメラをしまいなさい。

「ハラオウンもすごいな。宣言通りほとんど満点じゃないか。数学だけ計算ミスで一問間違えただけで取り逃した十分すぎる結果だ」

「クゥンクゥン♪」

ああ、頼ずりまででした。

本当に犬みたいな子だ。

将来の彼氏は頑張ってくれ。

「と、いう訳で、せんせ私らにご褒美っちゅうわけでなんかおごってや」

「はぁー、金ないけど……今回は特別な。といってもたい焼きぐらいだけだな」

「そうと決まったら善は急げや」

お断りスリーを連れてたい焼き屋でたい焼きを買ってやる。

「そーいやはなのはちゃんは今までの平均点より何点上がったん？」

「愚問だなはやてちゃん。なんと二倍いや三倍近く上がったの」

「……なのはちゃん？　もしかしてせんせはアレか、私たちの最後の砦か」

「……ようやく気がついたか……まあ、お前たちもやれば出来るんだから普段からやりなさい」

これが本日のブロークンワードだった。

「やれば出来ちゃうんだ……中学生ママにされちゃうんだ……普段からやっちゃうんだ」

「……先生サイテーなの」

「せんせが生徒相手にスケコマスなんて……性根疑うわー」

ハラオウンがピンクモードになり高町と八神が俺を責める。
胃が痛い。

「お祝いに兆を越えるプレゼントが子宮にダイレクトアタックしちゃうんだ……一姫二太郎なんだ……」

「はぁーハラオウンは夢の世界から帰ってこい。高町は分かって

て言っているだろ。八神はこのあと生徒指導室な」

「ちょ、ちょっと待ってーな。何で私はゴチンされるん？」

「あのなお前たち、ウチはエスカレーター式とはいえそこそのレベルの私立中学だからな成績悪くて魔法だー何だーって訳の分からん事年中言ってる子に世間がどれだけ冷たいか……この調子ならまあなんとかなるだろうが、締めるところは締めていくぞ」

「分かりました！頑張ってシメますね」

もうヤダこいつ等。

またこんな感じか！

「お前たちは常識を身に付けろー！往来で変なこと言うな！」

第十七話 恐怖の文化祭

第十七話 恐怖の文化祭

もう直ぐ文化祭なので出し物を決めさせているのだが中々報告に
来ない。

決めている間に小テストの採点をしていたのだが終わってしまっ
た。

しかし、まあ人間変われば変わるもんだな成績的な意味で。

最近高町が頑張っているのに釣られてなのかクラス全体の成績が
伸びてきている。

まあ、一部の生徒によると高町に負けたら終わりかなと言ってい
た。

……高町あいつどんな目で見られているんだと頭を抱えていたが

……ああ、魔法少女ねと納得してしまった。

……確かにそんな事を謳っている奴に負けるのは嫌だな。

とりあえず様子でも見に行こうと思いき教室前に来たのだが……嫌
な予感がする。

……でも、逃げられないのが教師の宿命だ。

意を決して教室に入る。

「そろそろ決まったか？」

俺の呼びかけに月村が振り向いて応えてくれた。

「ああ、先生。今さっき何をするかを決めたのですが……細部で揉めています」

月村の返事に嫌な予感がしながら黒板を見るとお化け屋敷や、模擬店、俺の女性遍歴、バニングスに習うツンデレの極意、男を墮とすテクニック（教師編）、お尻叩き！あえて何もしない。

……大丈夫か？俺の生徒たちは。

最近の子は何を考えているのか分からない。

まあ、見たところ喫茶店に印がついてるから喫茶店をするのだろう。

なんと言うか漫画かゲームみたいな展開だな。

「で、喫茶店をするみたいだが何を揉めているんだ？ 今年は去年より予算が多いから少しぐらいなら大丈夫だといったよな？」

因みに予算額が増えたのは体育祭での俺達の給料分が回されたからだ。

まあ、何に使われたか分かっているだけでもましかな。

それに生徒が楽しめるならまだ我慢できるな。

「ええ、コーヒーはどこの豆にするのか紅茶はどの葉っぱにするのか、軽食系のメニューはどうするのか、衣装は何にするのかで揉めています」

……まあ、文化祭なんかは始まるまでが楽しいんだよな。

しかし、メニューはともかく衣装は拘らなくてもいいだろう。
俺の時は私服か制服の上にエプロンだったけどな。

「メニューはともかく衣装は制服の上からエプロンで良いだろう？」

一瞬で白い目で見られた。

……俺が悪いのか。

急にハラオウンが席をたち俺に期待した目で見始める。

「やっぱり先生は制服エプロンが好きだったんだ。わかったよ先生。若奥様……ううん、幼妻喫茶が良いんだね。分かったは、あ・な・た！」

頭が痛い。

どうしてその結論に至ったのか誰か俺に教えてくれ。

他の生徒たちはハラオウンに生暖かい目を送っている。

「あー、ハラオウン？ 先生はそんなこと一言も言ってないだろう。第一衣装は派手すぎなければ私服でも良いだろう。それが面倒なら制服にエプロンでいいだろうと思っただけから言っただけだ」

「……せんせ。本当に興味ない？ 先生ちょっと想像してみ。家に帰ったら制服エプロンの可愛い女子中学生が台所でご飯作ってくれてるんやで！これで喜ばへん男はおらへん！」

「八神な何度も言っているが先生は年下に興味がないから何も思わんな。それより喫茶店と言いだしたのは誰だ？」

その後ハラオウンが暴走モードに入ったためスルーすることにした。

他の生徒も慣れたものでハラオウンの後ろの生徒がハラオウンの肩を掴み座らせる。

ハラオウンは椅子の上で体をクネクネさせている。

八神はその後も裸エプロンとかスク水エプロンとかスク水ニーツエプロンとか猫耳とか全身タイツエプロン、雌犬喫茶とか言い出したが月村とバニングスの手によって物理的に黙らされた。

「わ、私です！」

声のぬしは高町だった。

高町の奴が自分の意見を言ったのか。

驚きもあったがそれより嬉しさの方が上回った。

自分の顔が笑っているのが分かる。

「そうか、高町の実家は喫茶店だもんな。なら高町に色々任せても大丈夫か？」

「は、はい。頑張ります！」

「じゃあ、文化祭委員はなのはちゃんでもいいかな？」

「うん！すずかちゃん」

その後はそれぞれの分担が決まり話し合いは終了。
最後にバニングスが前に出てき全員の顔を見渡す。

「じゃあ、皆！ 文化祭を成功させるために頑張るわよ！ そのためには何があっても協力すること！ 気に食わなことがあったら私に言いなさい！ じゃあ皆やるわよ！」

「「「「「オー！」「」「」」」」」

バニングスは本当に中学生か？

と言うか男いや漢だな。

ホントクラスの中心だね。

高町もある意味クラスの中心だが。

その後、高町はかなり積極的に色んな人と話すようになり自然な笑顔が出るようになった。

自分の意見も言うし他人の意見も聞いてどうするか考えて考えてそれでもダメなら俺やバニングスの所に来るようになった。

正直、子供の成長スピードに驚く。

いや、これが本当の高町の姿なのかもしれない。

恭也から「なのはが家で自分から話しかけてくれた」と夜中にイキナリ電話してきた時は驚いた。

今まで当たり前だと思っていた家族関係が歪だったことに気付いた高町家はよく相談に来ていた。

その度に学校での様子と家での様子を照らし合わせて出来るだけアドバイスをしてきたが……本当に良かった。

ここまで人の人生に左右することは余りなかったが事高町家に関して言えば特別だ。

後は魔法少女を捨ててくれれば問題ないのだが……これからだな。

文化祭当日

文化祭当日になりかなりの人が来場した。

で、俺のクラスはかなり評判が良いらしく見回りついで寄る事にしたのだが……入る前から嫌な予感しかしない。

だが、一応休憩と見回りを兼ねているので入ることにした。

ドアを開けたら目の前にはハラウンが笑顔で立っておりトンでも発言しだした。

「おかえりなさい、あなた。お茶にする？ ケーキにする？
それともわ・た・し？」

その瞬間この場に居た一般客からすごい目で見られた。

もうヤダ帰って寝たい。

とりあえず席に案内してもらい座っているとバニングスが注文を

聞きに来た。

ついでにメニューを見ていると気になるものがあったが聞いておくか。

「先生、何できたんですか？」

「いや、見回りと休憩を兼ねて来たんだが……何か問題は？」

「問題は今のところ先生が来たことによるフェイトの暴走ぐらいです。これから接客態度を変えないといけなくなりました」

「そうか、それは悪かったな。注文はコーヒー、ブラックで。後はクッキーを頼む。ところでこの『ぶっかけ』ってなんだ？」

「ああ、それは上級者向けのサービスです。説明するより見たほうが早いですね。ちょうど右から三番目のお客様が頼まれたので見ていてください」

バニングスの言うとおりにして見ているとそのお客は何故かレインコートを着ていた。

しばらくすると体操服にエプロン姿の月村が頼まれた品オムライスとポタージュを持って来た。

オムライスは机に置いたあと月村はものすごい暴拳に出た。

ポタージュを客の顔にぶっかけたのだ

……ニコニコと笑う月村に戦慄し、直ぐに注意しようとしたが、

客の男は恍惚とした顔で月村にお礼を言い出した。

もうヤダこのクラス。

これの発案者絶対！八神だろ！

まあ、これ以外は呼び方を変えるオプションがあったりしたがお金は取らないように注意しておいた。

と言ってもこれはハラオウンの暴走用にバニングスが事前準備しておいたみたいだ。

因みに受付で変更可能になり希望する呼び方で呼んでくれるので更に人気が出たみたいだ。

名前と呼び方をメモったノートを見せてもらう事にした。

後日見たところバニングスが俺の考えを読み取ったのか括弧書きで年齢も書いてくれていた。

もし、三十以上であなたとか呼ばせている奴がいたら危険だからだ。

このオプションの事で後日教頭に呼び出されて怒られた。

番外編 文化祭の裏側

番外編 文化祭の裏側

私、アリサ・バニングスは頭を抱えていた。

文化祭の出し物が決まったのは良い。

内容も決まってきたのはよししよう。

それにだ幼馴染のなのはが勇気を振り絞って自分の意見を言ったのは更に良い。

なら自分がすることはこれが成功するように全力でサポートすることだ。

そう、あくまでサポートだ。今回メインで頑張るのはなのはだ。ここで私やすずかが前に出てもなのはの成長に繋がらないと思う。

本田先生もそのことを理解しているのか文化祭での事はなのはに聞くようにしていた。

ただ、問題が色々と山積みだったわ。

何を思ったのかなのはが一人で抱え込もうとしているのが問題の一つ。

次に問題はフェイトの暴走こと。

これは何時ものことだが、今回は外部からも人が来るのでフェイトの暴走で台無しになる可能性もあるからね。

さらにはやても何をしでかすか分からないといった油断ができない状態ね。

これに対しての対策をしっかりとっておかなければ本田先生がクビ

になる可能性があるのだから、しっかりしなければ……もし本田先生がクビになればあの三人のストッパーが学校から消えツッコミ役が私人になってしまう。

そんな最悪な未来を回避するためにも全力を尽くさないで。

「なあ、皆聞いてくれへん？」

メニューが決まったところではやてが手を挙げた。

直感的にこれはヤバイと思ったが、なのはがはやてに聞いてしまった。

「どうしたのはやてちゃん？」

「いやー、普通の喫茶店やっても余り面白くないやん。それに他のところでもやるやろうし。差をつけるには何か他にサービスをすべきやと思うんよ」

はやての言いたいことは分かるが先程から嫌な予感が止まらない。

「はやてちゃんが言いたいことは分かるけど具体的にはどうするの？」

「そやねー、例えばツンデレ喫茶ならぬぶっかけ喫茶とか」

「「「「は？」「」「」」」

クラス全員の考えが一致したと思う。

こいつは何を言っているのだろうか。

「ああ、そういうこと」

訂正、すずかだけ分かったみたい。

「つまり、はやてちゃんはお客さんに飲み物とかスープとかの液体をお客さんに言葉通りぶっかけると言う事だね」

「そうや、さすがすずかちゃん」

何を言っているのか分からない……理解したくない。

と言うか体育祭が終わってからすずかも壊れてきたような気がする。

あの、真面目で胸以外は控えめで優しくかったすずかはどこに逝ったのだろうか。

ああ、なのはが慌ててはやてとすずかを止めようとしている。

「い、いや、はやてちゃんそれはお客さんが逆に来ないから！て言うか片付けとか衛生面とか色々問題があるから！」

「ねえ、はやて？ どうしてそれで集客につながるの？ そんな

こととして先生の迷惑になるなら……はやてを○すよ？」

……教室の雰囲気が一転した。

物凄く寒い。と言うかフェイトの殺気が物凄い。

返答次第では本当に、はやてを殺ってしまえそうだ。

「お、落ち着いて聞いてやフェイトちゃん。これはあくまで裏メニューとしてや。それに世の中には自分の性癖を出したくても出せない人もおるんや。これは、ネタとしてならその人の歪んだ性癖も人様にバレなくて満たされる。画期的なアイデアなんよ。それにせんせが表立って見せてないだけで裏ではという可能性も」

「そ、そうだったんだー。ゴメンネはやて」

「そんなわけあるかー！」

叫んだ私は悪くない。

……ダメだこいつ等私がしっかりしないと！

「あーでもいいかも」

「えーありえなくない」

「いやー、こないだ彼氏と喧嘩してさー。お仕置きと憂さ晴らしも兼ねてやってもいいかも」

「それなら、岡村の奴にもやってやらない？」

「えー生物の岡村の事？」

「だってあのおっさんの視線ヤバイじゃん。どう見ても私たちのことそういう目で見てるよ」

「と、言うことは日頃そういう目で見てくる奴らを対象にして日頃の鬱憤を晴らすということだ賛成！」

拍手が沸き起こり私は頭を抱えることしか出来なかった。

なのはの方も頭を抱えている。

どうやらこの中で正気を保っているのは私となのはだけみたいだ。

フェイトはよく分かっている様子で、はやてはニヤニヤ笑っており、すずかはニコニコしている。

……実は問題児はあの三人でなく私を除く全員がアウトだったのでは？

……誰がこんな酷いクラス割を考えた。

その後は私となのはで内容を頑張っってまとめていった。

特に見回りで本田先生が来た時にフェイトがいたら暴走することは占い師でなくても分かることなので誤魔化す為に客の呼び方を変えられるサービスも用意することにした。

そんなこんなで気がつけば文化祭当日を迎えた。

全員格好は色々だ。

私とフェイトは制服にエプロンで、なのはは翠屋の制服、すずかは体操服に紺色ブルマ、はやては旧スク水にエプロンだ。他には私服の子もいれば、メイド服、タケ〇トピ〇ノの全身タイツ等様々だ。

因みにぶっかけコース用の座席と言うか、簡単なビニールハウスを用意した。

まあ、多少はなのは達の魔法での仕掛けもあるらしいのだが詳しくは聞いていないし聴きたくない。

後は見回りにきた先生たちをどうするのかを考えていたのだけど、はやてが『私に任せてや』と得意げに言っていたので任せているのだが不安ね。

時間になりしばらくすると段々人が集まってきた。

どうやら勧誘部隊が成功したようね。

で、しばらくすると罰ゲームで『ぶっかけ』があると説明すると男子達が一斉にその場でジャンケンなり何らかのゲームをして注文しました。

その後『ぶっかけ』の状態を見て初めは周りは笑っていたが、段々客層がおかしくなっていた。

明らかに『ぶっかけ』を目的にしている客が増えてきた。

ひどい客はクラスメイト全員に頼んでいる強者も。

当然これに関して色々な先生がきたがはやてが携帯の写真を見せると黙って去っていったわ。

中にはそのまま『ぶっかけ』に挑んだ先生もいたわ。

「ねえ、教頭先生？ 教え子に足蹴にされて紅茶頭からかけられて今どんな気持ち？」

「……くうう、教え子たちに馬鹿にされこれではビクンビクン」

思い出したくないわ。

日頃厳しい教頭先生があんな顔をしていたことを。

どうしよう、私のSAN値がそろそろ尽きそうだ。

なのははまだ厨房係だからマシだろうけど。

……自分の目が死んでいくのが分かる。

しばらくするとフェイトが落ち着き無くソワソワしたので話しかける。

「どうしたのフェイト。さっきからそわそわして？」

「あっ、アリサ。もうじき先生が来るんだ！」

「どうしてそれが分かるのよ？」

「先生の匂いと足音が近づいて来ているから」

どうしようこの駄犬。

絶対に暴走する。

私は急いで対フェイト暴走用の準備をしておくことにしたわ。

もう嫌だこの幼馴染達。

私も壊れたら楽になれるのかな？

二分後本当に本田先生が来てフェイトをスルーしていた。

とりあえず席に案内して、注文を聞く。

フェイトは他の客に呼ばれたから渋々そっちに向かった。

本田先生の言いたいことが良く分かったし何より苦勞も良く分かったわ。

いつもこんな濃い生徒の相手をしているのに死にそうな顔をしながら頑張っている姿は尊敬に値するわ。

その後呼び方を変えるキャンペーンという形で客呼びをしたところかなり好評だった。

それも色んな層に。

特に保護者と言うか父親達に……何でも日頃娘が口を聞いてくれないとか、最近はパパと呼んでくれなくなったとかで落ち込んでいるお父さん層に人気が出たみたいね。

他にも下の名前で呼んでくれと同級生が来たり二十代から三十代の男があなたとか旦那様とか言い出したので身に危険を感じたので本田先生に報告できるようにしておいた。

風の噂では教頭もこのサービスを受けたかったみたいで後から本田先生に八つ当たりしていたそうよ。

まあ、喫茶店で休みが取れたときにはやてが色々写真を取って齎しているのを本田先生に見つかり指導されたり、空手部対柔道部対剣道部の異種格闘技大会していたりしていたけど普通よね？

空手部が光を纏って攻撃したり、剣道部が飛伊綱だしたりしていたけどどこにでもある光景よね？

後は射的みたいに景品にボールを当てる奴があり、なのは達が魔法で強化したり、フェイトとすずかがフランクフルトや、チョコバナナを口の中に入れたり出したりして一部の男子が座り込んだりしていたけど普通だと信じたい。

こうして私の文化祭は終わった。

何か最近私の常識がどこかに行きそうなんだけど誰か行き場所知らない？

第十八話 アリサ覚醒

第十八話 アリサ覚醒

放課後になり明日の授業の準備をしていると珍しくバニングスが俺の所に来た。

「どうしたバニングス？」

「あの、先生に相談が……」

一瞬で職員室の空気が凍った。

それはそうだろう。

あのバニングスが俺に相談？

いや、泣きそうな顔をされたら余計に困るのだが……正直彼女の能力なら大抵のことは一人でどうにかするのに職員室に相談を持ちかけてくる事はそれだけことが重大だという事だ。

「ああ、大丈夫だ。場所は変えたほうが良さそうだな」

「本田先生、進路指導室なら今空いていますよ」

空いている部屋を探そうとしたら西田先生が教えてくれた。

「バニングス先に行って待っていてくれ」

「……はい」

何時もの元気がなく一回り小さく見えた。

ほかの先生方も俺の方を心配そうに見ている。

教頭先生が話しかけてくる。

「……本田先生。ココアを作っていていきなさい。それから彼女が泣いても君が慌ててはいけない。確かに彼女は類い稀なる才能を持っているがまだ十四の少女だ。しっかりと相談にのってあげなさい」

「はい」

教頭の言う通りにココアを作って自分のコーヒーを用意して進路指導室に入る。

バニングスは俺が入ってきたことに気が付きすぐに立とうとしたのでそれを止めて、正面に座りココアの入ったカップをバニングスの前に置いてやる。

「……先生が入れたから美味しくないかも知れないがそれを飲んで落ち着いてから話してくれ」

「……はい」

目が死んでいる状態のバニングスになんて声をかけたらいいのか分からない。

とりあえずバニングスが話すまで待つことにした。

バニングスがココアを飲むのを見ながら何故ここまで追い詰められているのかを考えてみた。

考えられる要素は二つ。

一つは最近の高町たちの奇行。

もう一つは、月村の仮面が剥がれてきていることか。

だが、一つ目は最近はマシになってきていると思うし、月村はそういうことを意識すれば直ぐに元に戻ると思うので心配はいらないと思うのだが……。

「先生。私も常識とか良心とか無くせば楽になるのでしょうか？」

……最悪の事態じゃね？

もしバニングスが常識を捨てた状態になったら俺は死ぬと思う。

うん、暴走しやすい生徒が集まっている中普通のバニングスが今の俺にとっての最後の砦だったのに。

……俺の目が死んでいくのがわかる。

「……バニングス？ 頼むからそういうことを言わないでくれ。

お前は先生にとって最後の希望なんだ。それにな一度壊れたら人間は治ったと思ってもどこか壊れたまんまだ。酷な事かも知れないが」

「でも、先生、……この学校でやっていく自信がなくなりました」

死にそんな顔をしているバニングスに本当になんて声をかけたらいいのかわからない。

「……理由を話してくれないか？」

「……はい」

その後バニングスから聞いた情報を整理すると最悪な事態になっていた。

やはり『ぶっかけ』の提案者は八神だった。

問題はそれにノってしまっただけで、教え子たちに頭が痛い。

アイツ等普段は猫かぶっているのに……。

……教頭。あなたのことは尊敬していました。

剣道部と空手部は何をやっているんだ！

と、言うか氣を使用している奴と戦える柔道部が一番ヤバイ。

「……私が可笑しいんでしょうか？　もしかして私の常識が世間の常識とズレが生じているのでしょうか？」

「バニングスは可笑しくないし、世間とズレていないぞ。ただ、ウチに少々常識外れな人間が集まりすぎているんだ。ほら考えてみる？　お前の友達にリアル魔法使いが三人もいるだろ。この地域はそう言った人材が集まりやすい場所なんだ。だから外に出たらここは少しズレが生じている」

「じゃあ、私は何でここにいるのでしょうか？」

「今回お前の目に付いたのがそういうズレた奴なだけだ。そんなのこの学園に一割もない。それにだ、クラスメイトのことだが何時もの三人は除くが、あいつらも文化祭でテンションが上がりがぎてよくわからんうちにノってしまったのだろう。だから普段はそんなことはないだろう?」

バニングスは下を向いて何か考えているようだ。

「……私って空気が読めていないんでしょうか?」

「そういう訳ではないと思うぞ。本当に読めていない奴は周りから排斥されるかイジメられるかだ。……少し考え方を変えてみたらどうだ?」

「……え?」

「バニングスは将来はお父さんの会社を継ぐのだから?」

「はい」

「それなら、今のうちにどんな人材がいても対処できるようになるのが望ましいだろう。……かなり濃いメンツだがこれから社会に出るにあたっての予行演習だと考えればどうだ?」

バニングスはじっと何かを考えてる様子で俺の顔を見ってくる。

「……そうですね。ここで流されてはいけませんよね。…
…どんな人材だろうと使いこなせてこそ一流の経営者ですよ。
…フッフ、分かりました！ 先生！ 使いこなしてみせます！」

あれエー？ バニングスが違う方向に覚醒したような気がするが
気のせいだよな？

もしかして扱いにくい生徒がフルコンプしちゃった？

ああ、ここで慌ててはいけません。

「落ち着けバニングス。人は使うものじゃないぞ。人が奇行
に走ってもそれを受け入れて、尚且つ引き込まれない様にしろと言
っているんだ」

「ええ、ですから！ 清濁飲み込んで私の信じる道を進めば良い
んですよ！ ありがとうございます！」

……俺はとんでもない怪物を作ってしまったかも知れない。

……アレか？ バニングスは霸王にでもなるのか？

優秀な奴が、どんな人材でも100%の力を出させるそんな会社
は理想だが怖すぎる。

……バニングスは俺に一礼するとそのまま進路指導室から出て行
った。

その顔にはなんの迷いのない晴れやかな顔をしていたが……。

どこで選択を間違えたのだろう。

……もういい。もう疲れた。

後少しで保護者面談も始まるのに。

今回は高町家もハラオウン家も来れると言うのに……。

まあ、来年のクラス替えで俺も解放されるだろう。

高町たちも少しは変化が見えてきているのだ。

あと少し頑張って……後は次の担任に任せよう。

第十九話 お前たちの進路はそれで良いのか？

第十九話 お前たちの進路はそれで良いのか？

さて今日は久しぶりにお断りスリーの進路相談だ。

だが、三人とも何時もの元気がないと言うかおとなしい。

「お前たちどうしたんだ？」

「「「……アリサ（ちゃん）が」「」」

「うん、バニングスがどうしたんだ？」

理由は解っているが惚けてみる。

「「「……怖いです！」「」」

「どういう風にだ？」

「なんて言うたらええのかな……とにかく迫力がすごいんですよ。あとリーダーシップが半端ないんですよ」

「迫力はともかくリーダーシップは前からあっただろ？」

「……先生。今のアリサにはある意味カリスマがあります。少

し前までは落ち込んでいたんですがここ最近ではそれが吹っ切れて色々受け入れてそれで最善の答えを出しているんです」

「……必要があると考えたらその人をそのレベルまで引き上げるプロセスまで教えてくるんです。的確すぎて誰も文句も言えないですし。何よりその指示に従うと安心感を持ってしまいうんです」

「正直、今のアリサちゃんに口では勝てへんわ。……この前までアリサちゃんを煩わしく思っていた子が一回アリサちゃんに精神的に限界まで追い詰められたあとにアリサちゃんが『私に付いてきなさい。あなたの才能は私が活かしてあげる。大丈夫あなた一人無理でも私がそこまで引き上げてあげる』と言ってそのまま指揮下に置いたときは恐怖やったわ」

「……どうしよう。バニングスが完全に覇道を目指しているように思える。」

あいつはどこに行こうとしているのだろう。

何故か頭の中に霸王少女（常識が）バニシングアリサという単語がチラついたがが黙っておこう。

これもこいつらの影響かな？

……しかし、このままだとバニングスは理解者を得られず潰れる恐れもあるな。

でも、クラスがこれまでに以上に纏まっているしな！。

どうしたら良いんだろうな。

こんな経験はきつと他の先生もしていないだろうし。

「……まあ、バニングスは今まで溜め込んできたものがあるから

今はそれを発散させているのだろう。時期を見て先生から話を
からそれまでは我慢してくれ」

「「」……出来るだけ早くして下さい」「」

珍しく悲痛なお願いだった。

「あーでも、あんな風に人使える様になりたいわー。せんせ何か
コツとかあらへん？」

「八神はバニングスと自分を比べたとき何が足りないと思う？」

「うーん、おっぱい？」

「なら一生お前には無理だな」

「し、失礼な！」

自分で言っておいてこいつは何を怒っているんだろ？

「真面目に考えろ」

「いやー、ホンマのこと考えても予想できひんの実状です」

「かなりキツイ事を先生は言うぞ」

「構いませんよ」

「さっきハラウンが言ったカリスマだな。正直お前にはカリスマが不足している。人を惹きつける何かが足りない。まあ、先生が思うにお前は参謀とかの方が向いているような気がするな」

八神は俺の言葉にショックを受けたのかそのままorzと崩れ落ちたが放置する。

まあ、しばらくはこいつらにもいい薬だろう。

バニングスの影響の件は他の先生たちも授業がしやすくなったが、空気が怖いとか言っていたが問題ない。

大体ウチの教師陣はバニングスの指摘にビビリ過ぎなのだ。

俺なんか英語の教師なのに発音が成っていないと何回怒られたとか。

おかげでTOEICをこの前受けたら900超えたよ。

生徒のおかげで成績が上がるとはある意味教師冥利に尽きるな。

「さて本題に入るか。 どうして呼ばれたか分かるよな？」

「遂に結婚してくれんですか！」

「どうしてそうなる。大体それなら三人まとめて呼ばないだろう」

「いや、分からへんでー。なんやかんや言ってハーレム狙いやうの？」

「懲りないな八神。心だけでなく頭も一回グシャっとしないと分

からないか？」

八神の冗談を冗談で返したつもりなんだが八神の顔が引き攣っている。

高町がそろそろと手を上げて話しかけてきた。

「もしかして進路指導ですか？」

「もしかしなくてもそうだ。ここに呼んだ時点で気付けよ」

「いやーそうじゃないかなーと思っていたんですけど」

……最近忙しくて碌に出来ていなかったのでこいつらは油断していたようだ。

まあ、そろそろしっかりしてもらわないと時間がないのだがな。

「さて、来週から保護者面談が始まるがお前たちはこの進路調査表を保護者に見せていいのかわかるか？」

三人とも余裕をかまして「別にいいよねー」とか言っている。

「どうせ親が来ないとか思っても無駄だぞ。高町は家族全員集合だぞ。良かったな？ ハラオウンもリンディさんから連絡取れたしクロノさんも時間を作ってくれるそうだ。それから八神はシャマルさんだけでなくギル・グレアムさん、カリム・グラシアさんも来てくれることになったからな」

三人とも顔色が青を通り越して真っ白になっている。

「さて、もう一度聞くがこれで良いんだな？」

そのまま三人が前に提出してきた魔法少女と書かれた進路調査表を見せる。

「「「……真面目に書いてきますから返してください」「」」

「……本当に真面目に書くんだな？」

「「「……はい」「」」

「なら、保護者に書いた紙を直接渡しておけ。先生は当日に見る。それで今後の進路を保護者の方と真剣に検討する。ただ、本当に今思っていることを書きなさい。……どんな答えであれ本気で考えたことに先生は怒らないぞ」

「「「……はい」「」」

三人に進路調査表を返して今日は終了した。

……これで少しは改善出来たら良いのだが。

この際性格とか行動とかは諦めても進路だけはしっかりしてもらいたいものだ。

……改めて思うと俺のクラス編成に悪意しか感じない。

これは来年もヤバイ事になりそうだ。

やはりバニングスだけでも元に戻らないかなー！

無理だよなー。自分で言ったもんな一度壊れたらそのままだって。

今度の保護者面談が怖すぎる。

第二十話 保護者面談 高町家編

今日は高町家、ハラオウン家、八神家の保護者面談だ。

この三家だけは時間がかかりそうなので他の家庭とは別の日に設定したのだ。

と言うかこの三組で一日が終わる。午前は高町家、午後はハラオウン家、夕方から八神家だ。

初めは高町家だ。

時間になりドアがノックされたので入室を促す。

「どうぞお入りください」

「失礼します」

士郎さんを先頭に桃子さん、恭也、美由希が入ってきた。

ついでにと言うと少し空気に違和感を感じたが気のせいだろうか
いや違うな誰かに見られている？

……誰が見ている？ いやそれはどうでもいいな。

「どうぞお掛けください」

「はい」

士郎さん達が緊張した様子で椅子に座る。

「本日はお忙しいところお時間を頂きありがとうございます」

「こちらこそ特別に時間を作っていただきありがとうございます。それでこちらがなのは進路調査表になります」

挨拶もそこそこに正面に座る桃子さんが高町の進路調査表を渡してきた。

「ありがとうございます。ところで何が書いてあるかご存知ですか？」

「「「はい」」」」

そうか高町は家族とちゃんと話したんだな。

普段からあまり会話がないと言っていたけど話せるようになったんだな。

進路調査表を見てみると事情を知らない教師が見たら頭を抱えるような内容だ。

第一進路：就職（管理局で教導官）

第二進路：進学（パティシエ専門校かそのまま上にあがる）

第三進路：就職（管理局の災害救助隊）

……本当にアイツは分かっているのかね。

はっきり言って俺が賛成できるのは第二進路だけだ。

で家族の意見を聞こうと思う。

と、言うか真剣になりすぎて土郎さんに恭也、美由希が少し殺氣らしきものを感じる。

……これか去年に担任が逃げた理由か。

「皆さんこれについてどう思います？」

……。

……沈黙か。

「もう一度聞きます。これについて賛成ですか？　なのはさんとしっかり話しましたか？　なのはさんに信じているから好きな事を書きなさいと言って甘えませんでしたか？　土郎さんどうなんですか？」

俺の問いかけに真剣な表情の土郎さんが応えてくれた。

「……私、私達の意見は賛成できるのは進学です。今回はなのはとしっかり話をしました」

俺が高町に甘えていないかと聞いたのは少し前に娘の成績を信じているから成績表を見なかった。

娘を信じているから何をしようとしても止めなかったと話を聞いたとき俺は本気でキレそうになった。

信じるのは良い。だが、干渉しないのは如何なものか、そして今までの高町本人と家族での話を聞いての俺は『高町家は高町なのはに甘えてきた』と考え柄にもなく『いい歳した大人が娘に甘えるな！』と説教までしてしまった。

後になって下手したらこれでクビが飛ぶと思ったが逆に高町家からは泣いて感謝されたので結果的に良かった。

「……では、管理局に就職は反対と告げたんですね？」

「……はい」

「なら、何故これには一番初めに管理局に就職と書いてあるんですか？」

「……そ、それがなのはの本当に今一番やりたいことなので」

……娘がやりたいからそれを応援したいという気持ちは痛いほどわかる。

俺も教え子がやりたいというなら応援したい。

しかし今回は事情が普通ではないのだ。

はっきり言って高町家は高町自身もそうだが家庭内意識変革しなければこれから危ない。

「それは中学を卒業して直ぐにでもしなければならぬことですか？」

「……いいえ」

「どうして止めなかったんです？ これでは娘さんに反対だけ応援すると言っているように見えるのですが」

「……反対はしたのですが……今まで私達のして来た事を考えると止めて良いのか分からなくなりました」

……土郎さんの考えていることもわかる。

自分たちを許せないのだろう。

だが、ここで高町の進路を許してしまったのは非常に残念だ……それでもここで俺がそうですかと引けば高町は完全に手遅れになる。

「正直に言いますと私はなのはさんに教導官は向いていないと思います」

俺の言っていることに賛成なのか恭也は頷いた。

「なのはさんは今では普通に話す様になりました。が、それは日常会話での範囲であり、仕事は別です」

「最近ミッドチルダに知り合いが出来ましたので現役の教導官の方と話すことができました。やはり難しいみたいですね。なのはさんは何度かお世話になったみたいですが向こうで何やったか知っていますか？」

「……いいえ。詳しくは聞いていません。聞いたことは何度か模擬戦をしながら教導したとしか聞いていません」

「まあ、そうでしょうね。初めに教導官と言ったときにどうするのかと聞いたなら『初めに相手のプライドを粉碎する』と返事が帰

ってきました。まあ、あながち間違えてはいないんですが、なのはさんのやり方は粉碎した後フォロワーが全くなっておらずそのままドロップアウトする人間が多かったみたいですよ」

……高町家の面々はどうしたら良いのか分からないようだ。

「他には教導以外の仕事の話はお聞きになりました？」

今まで黙っていた桃子さんが直ぐに返事をくれた。

「ええ、犯罪者を逮捕したとか災害現場で人を助けて感謝されたとかは聞きました」

「そうですね、まあ自分が自覚していなければそこで終わりますよね。なのはさんは犯人発見時いきなり魔法で犯人を攻撃してから捕縛……何が足りないのでしょうか？ 分かりますか美由希さん」

美由希は俺にいきなり指名され驚いた様子だったが直ぐに応えてくれた。

「日本の警察と同じ考えでいいなら問題点が多すぎてなんとも言えないよ。まあ、罪状は捕まえてから言うからそれは良しとしてイキナリ攻撃したのは問題ね。降伏を促さなかったのと恐らくなのはのことだから逃げられたらイケナイと思って先制攻撃したんだと思うけど」

「……概ねその通りです。後はなのはさんの魔法の威力とか色々あったみたいですけどね。それに向こうの法律も覚えていない。最低限自分がしてはいけない法律のみ覚えて後は魔法のみ覚えているみたいです」

「災害現場ではまあ、数少ない飛行魔法の使い手として重宝とされたらしいですが脱出ルートを作るのに砲撃魔法で道を作ったらしいです。幸い射線には人は居なかったらしいので確認はしたそうなんです、普通そうだったことをするときには現場指揮官に連絡するのが当たり前ですよ？ これは子供だから許されません」

「向こうではある程度戦えるならもう大人と扱いが変わらないのです。理由は幾つかあると思いますけどね。こちらとあちらでは文化が違いすぎます。今までリンディ・ハラウンさんからお話は聞かなかったのですか？」

高町家は全員が俯いている。

それでも土郎さんが応えてくれた。

「今までリンディさんから話を聞いてきましたが、そんな状態になっているとはきいていませんでした」

「ああ、リンディさんから話を聞いたのは何時ですか？」

それには桃子さんが応えてくれた。

「大体二年前です」

「そうですか、大体これがあったのは今から一年半ぐらい前のなのはさんが過剰なまでに攻撃してきた時の様子です。恐らくリンディさんも全て把握出来てなかったんでしょう。リンディさんもかなり忙しい立場の方でそれでも小学校までの間はなのはさんや八神さんの面倒を見てくれたみたいですね。中学に入ってからは大丈夫だと判断したみたいですね」

リンディさんに高町達をいつまで自分の目で見ていたのか確かめたことがある。

結果は先ほど言ったとおり、リンディさんは子供の体力でも無理のない範囲の任務と出撃を依頼していたみたいだ。

子供に危険地帯に行かせる行為自体、俺は反対だが……その時は文化の違いで引くことにした。

「……私は今でも初めてなのはさんに出会ったことを覚えてますよ」

「「「え?」「」」」

「恐らくかなり無茶をしてきたんでしょうね。返事の割に顔色が悪い。それに体に負担のかかることばかりしてきた事で体幹が他の子と違いました。それは士郎さん達も気づきませんでした?」

俺の問いかけに全員思うところがあったのか黙って頷いた。

「だからあの時私は成績と出席率のことを理由に出撃を止めたのです。最近では成績はかなり良くなってきたと思いますけどね。でも下手をすれば今年か来年でなのはさんは体の限界が来てたと思います。最悪任務中に倒れたり大怪我したかもしれません。自分の体調管理も出来ないのに力だけは普通よりあるから動いてしまふ。限界を知らないうちは良くする事ですけどね。でもなのはさんの場合はそれが命取りになる。本当にそんな状態の彼女を向こうに出していいのですか？」

俯いて聞いていた桃子さんが声を絞り出すように応えてくれた。

「……正直怖いです。自分の目の届かない所でなのはに何かあったらと思います」

「……ですが、今まで私たちがしてきたことを考えるとなのはの意志を尊重させてあげたいと思います」

士郎さんの言葉に本気で泣きたくなった。

まだ気付いてくれてなかったのかそれは贖罪でもなんでもなく逃げていくことに！

「高町家の皆さん、また自分の子供に甘えるのですか？ 確かに子供の事を何でも親が決めるのは違います」

「しかし！ここでなのはさんの思考を変えなければ卒業した時は止まらなくなります。そして下手すれば私たちの知らないところで死んでる恐れもあるのですよ！ 本当にそれでいいのですか！

お願いします！　なのはさんを説得して下さい！」

自然と俺は頭を下げていた。

「ほ、本田先生！　やめてください！」

「……お願いします。私の力だけではあの子を止められないのです。止めるにはご家族の皆さんの力が必要です！　お願いします！　あの子はまだ何も知らない！　まだまだ学ぶべきことが沢山あります！　……だから……お願いします。なのはさんから逃げないでください」

正直自分がここまでしている事に驚いたが、それでも高町を本当に止めるならここしか無い。

ダメな子ほど可愛いのとあいつの話を聞いてきたから感情移入しているのが自分でもよくわかる。

高町家と言うと俺に土下座していた。

「……申し訳ありません！　必ず分かり合えるまで話します！　今一度時間を下さい！」

「すまない！　淳いや、申し訳ありません本田先生！　なのははいざとなれば俺が止めます。それこそ嫌われてもいいので全力で止めます！」

気がつけばこちらを見ていた気配が消えていた。

それから高町家の高町に対する接し方と本当に聞かない場合どうするのか話し合った。

今日は土曜日なので月曜日に高町本人から結果を聞くことにした。

因みに話し合いで納得しなかった場合は土郎さん恭也、美由希の三人を倒すのが条件になった。

……多分無理だろうな。

まあ、最後はOHANASHIになるのは高町家の業かも知れないな。

第二十話 保護者面談 ハラオウン家編

午前の高町家の面談が終わり昼飯を食べている時高町からメールが来た。

メールにはただ一言『ありがとう』と書かれているだけだった。これから本当の意味で家族と自分に向き合うことになるだろうけど頑張れと送っておいた。

しかし、初めから疲れた。

これに後ハラオウンと八神かー。

正直気が重い。

特に八神はどうしたら良いのか分からんが現状だ。

そこを踏まえて関係者の話を聞きたいと思う。

ただ八神はなー藪啄いたらジュデッカがでたとかになりそうだからな。

それから時間になるまで考えていた。

時間近くになると廊下から足音が聞こえて来た。

ただ、疑問なのは何故ハラオウンの気配もすることだ。

時間になりノックする音が聞こえたので返事をする。

「どうぞお入りください」

「「失礼します」」

入ってきたのはリンディさんとクロノ君、そして問題のハラオウ
ンだ。

「本日はお忙しい中、時間を頂きありがとうございます」

「こちらこそありがとうございます。本日はフェイトから直接本
田先生に話がしたいと言う事で同席させました」

「すみません。私のわがままで」

今までに無いハラオウンの様子に少し驚く。

俺の中のハラオウン像は、頭はイイがお花畑と言うか妄想たくま
しくクネクネしているのが印象で偶にマジになる。

だけど今日のハラオウンはそう言ったものは無くなんと言うか隙
を感じさせない振る舞いなのだ。

「いえ、構いません。で、進路はどうなっただんですか？」

ハラオウンが俺に進路調査表を渡してくる。

そこに書かれていたのは

第一進路：就職

……これは……いや真面目に書いてきたんだろう。

紙はもうヨレヨレで、何度も消した痕がある。

多分涙の跡もあった。

ここまでされたら最後まで話を聞くしかない。

「これがお前の進路か……」

ハラオウンは俺の顔を見ながら少し困った顔をしながら応えた。

「はい」

「理由を聞いても良いか？」

「はい。と言いますか今日はその為にここに来たんです。 それにこれは母さん達だけでなく先生にも聞いて欲しいことですから」

「分かった」

ハラオウンはそれから何度か深呼吸を繰り返してからこちらを見て話し始めた。

「少し長くなります。 まずは私の生まれになります。 私は、プロジェクトF・A・T・Eと呼ばれる実験により生まれたクローン人間です」

最初から重い話が来たな。

……あの小さな体で何を抱えているのか分からない。

「前の母の事を話しましたよね。 だからその辺は省きます。 それと前に先生が私が戦わされていると言っていましたけどそれは仕

方がないことだったんです。だって私の戦闘データとバイタルデータを母さんが管理局に提出してくれなかったら恐らくモルモットして扱われたでしょうから」

「フェイトさん。……あなた知っていたの？」

「……うん、私も執務官なんだよ。少し調べればわかるよ」

「それでフェイトさん。あなたが戦ってきた理由はわかりました。データはまだ不十分ですか？」

「恐らく私が死ぬまでデータは必要でしょう。私は初めての成功例ですから。ああ、でも今は戦っている理由は違います。それは私のような子供を出さない為にです。先日私と同じ技術で生まれた子供がいると知ったんです。その子は今は自分の親と離れて管理局に保護……と言えば聞こえは良いですが隔離されています」

そこでハラオウンは間を置き深呼吸する。

「先生。私は今、一人の犯罪者を追っています。そいつは私を生み出した研究を私の実母に渡した研究者です。そして今も私を生み出した技術や他にも人と機械を合わせた人間を創りだす研究して、外に出そうとしています。コイツだけは絶対に許せないんです。コイツだけは許してはいけません」

「早くあいつを捕まえないと私のような子供が増えます。私の

ような思いをするのは私だけで十分なんです。……だからごめんなさい。そして今まで私の事をしっかりと見てくれてありがとうございます
「ございます」

「……言い方が悪いかもしれんが何をしにこの学園に来た？」

「……最後の思い出作りに来ました。ここで友達といっぱい話して、誰かに恋をして、それで最後に人間らしくして……悔いの無いようにして私という……人間がここに居た証を……作り……たかったんです。……後ごめんなさい今まで巫山戯た事ばかりして」

ハラオウンは顔は笑っているが、泣くのを堪えているのが良く分かった。

リンディさんも泣きそうな顔をしながら優しくハラオウンを抱きしめていた。

ただ俺が気になったことはその犯罪者を捕まえてその後が無いことだ。

……ハラオウンの言い方ではまるで自分が死ぬかもしれない……刺し違えてでも捕まえる……先のことを考えているようで考えていない。

気がつけば口を開いていた。

「……フェイトさんのお気持ちは良く分かりました。そしてこの場にリンディさんにクロノさんが居ると言うことはこの事を了承しているということですね？」

「「……はっ」」

三人とも決意は硬いようだ。

しかし俺には直ぐに分かりましたと返事が出来なかった。

「では、もし在学中にその犯罪者を逮捕出来たらあなたはどうするつもりですか？」

「……そんな先のことは考えていません」

本当に考えていないのだろう。

まずは目の前の事をどうにかするために全てを切り捨てる為に今は一生分を楽しみ後は修羅の道を行くつもりなのだろう。

「もし仮に捕まえたら。もう一度考え直す事は出来ませんか？」

「……そうですね。もし出来たら考えても良いかもしれませんが」

ハラオウンの顔にはそんな事は出来ないと書いてある。

でも悪いが、教師の立場として、大人としてやはり認めるわけにはいかないのだ。

「そうですか……しかし卒業後管理局で働くのは私は反対です」

「「「本田先生！」」」

三人が驚いた顔をしてこちらを見ているが……今はそれを無視する。

「フェイトさん、あなたは死ぬ気ですか？」

「そ、そんなことはありません！」

「本当に？」

ハラオウンは下を向きながら答える。

「………本当です」

その様子はどう見ても嘘とわかる。

………ふう………。

「違うでしょう。いや、死ぬ気は違いますね………。心のど

こかで死ぬかも知れないと思っているのでしょうか？」

「そ、それは」

明らかに動揺を隠せていないし、リンディさんとクロノ君はそれでも彼女を戦わせようと考えているのだろうか。

「私はそんな考えの生徒を管理局に就職させるのは反対です」

「せ、先生！ それでも私がやらないといけないんです。……私
と言う存在が生まれてしまったから……」

頭が真っ白になる。

この子は自分の事を全く考えていない。

思わず叫んでしまった。

「ハラオウン！」

ハラオウンは体を一瞬縮こませてこちらを見た。

ついでにリンディさんとクロノ君もビクッてしていたがまあ、良
いだろう。

「もっと自分を大切にしないで。自分の生まれ方を卑下するの
は止めなさい！ お前の事を大切に行っている人達の事を考えたこと
はあるか？ 考えたこと無いだろう！」

「……で、でも私は……」

「馬鹿者が！ 確かになお前が追っている奴は話を聞いた限りで
は碌でもない奴だ。お前の意思が固いのは分かった。だがな、
何故自分を省みない。何故周りに救いを求めない」

「これが……私の戦いだからです！ 死ぬなら私一人で十分です
！」

「この大馬鹿者！」

俺は生徒を感情任せに怒鳴りつけるなんて何をしているのだろうか？

どうにも俺の生徒は自己犠牲や自己満足の為に簡単に自分の命を賭けすぎているように思えてそれが許せない。

……普通の教師ならここまで介入しないだろうな。

……ああ、そうか、俺はきっとハラオウンの事を生徒というより父親の視線で見ていることが多いのか。

「なんで……なんで分かってくれないんですか！」

「生徒が生き死に関わるなら止めるのが普通だ！ ましてやお前が進もうとしているのは修羅の道だ。そんなものを認めんぞ！」

「それは先生と言う立場だからでしょう！ 私が卒業すればそんな事気にしなくて良いはずです！」

ハラオウンがそう叫んだ瞬間にクロノ君が立ち上がりハラオウンの頬叩いた。

「フェイト！ 僕が賛成したのはそんな状態の君にじゃない！ 純粹に人を助けたい、自分と同じ思いをさせたくないと言っていたからだ！ 僕は今の君の進路に反対だ！ 自分の命を大切にしない奴に人の命をどうこう言う資格は無い！」

「私も反対です。 そんな精神状態のあなたに仕事は任せられません。 これはあなたの母としてそして管理局に働いている一人間

としての言葉です」

「……そ、そんな。……嘘だよな？ ……クロノも母さんも？
……嘘だよな？」

「……嘘なもんか。 そんな覚悟の奴にアイツの相手をさせられるか。 ……僕は、妹が死ぬ覚悟をして平然としていられるような兄じゃないぞ」

「……皆……どうして」

そのままハラオウンが進路相談室から出て行った。

「待ちなさいフェイト！」

「母さん今追いかけても何も聞かないよ。 それより申し訳ありません本田先生」

ハラオウンを追いかけようとしたリンディさんを止めてクロノ君が謝ってきた。

「こちらこそすみません。 イキナリ怒鳴るような事をしてしまいました」

「いえ、今回は私たちがもっとフェイトさんの状態を理解しておけばこんな事には……」

リンディさんとクロノ君は改めてこちらに謝罪してきた。
はっきり言ってここまで謝られるとこちらが困る。

正直リンディさんには俺の方が頭が上がらないのだから。

あの三人の出撃のことについての便宜を色々取り計らって貰い、
また今回は生徒に感情的になって対応してしまったのに……。

「二人共おやめください。……あの調子では本当に危ないです
ね」

「そうですね。時間を少し置けば頭を冷やすと思いますのでし
ばらくはそのままにしておいて下さい」

「……クロノ。あなた」

「……母さん……今はフェイトを信じよう。彼女は何時もどん
な形であれ絶望を乗り切ってきた今回もそれを信じよう」

「……そうね」

しかしハラオウンが追いかけている犯罪者か……クローン技術や
人と機械の融合した人造人間か。

……うん？ 最近そんな奴らに襲われたような……？
思い出せ……カリムがいたのがベル力だっけあっちの方で居たよ
うな？

……全身タイツでそこそのスピードで動いて殴った感触が金属
に近かったような奴が居たような？

そうそうどっかの研究施設だったような？

それで確か奥に居たのが紫色の髪の毛で目が金色で……白衣を着ていたような？

うんコイツか？

「お二人共少しよろしいでしょうか？」

「なんででしょう？」

「フェイトさんが言っていた犯罪者とは紫色の髪の毛に金色の目をしており白衣を着ていて、全身青いタイツを着た女性を連れてくる奴ですか？」

「……ど、どこでそれを？」

二人が揃ってかなり驚いた顔をしている。

そんなに驚くようなことだろうか？

「この夏にミッドチルダに行った時にね。……カリム・グラシアさんの所に行こうとしてちょっと変な気配がしたので……ベルカでしたっけ？ ……道に迷ったのでカリムさんの義理弟さんが迎えに来てくれたんですが……」

リンディさんが信じられないといった顔をしている。

クロノ君はどこか諦めたような顔をしている何故だ？

「もしかしてアツシさん襲われました？」

「……はい。何か？」

リンディさんが顔を引き曇らせていた。

「……良くご無事でしたね」

「いえいえ、あの程度で音を上げていたらここで教師なんてやっていられませんよ」

リンディさんはそのまま頭を抱えていた。

だが、あの程度の戦力で一組織に対抗しようなんて馬鹿としか思えないのだが？

クロノ君が小声で「スカリエッティの奴無茶しやがって」とか言っていたのは気のせいだよな？

「しかしこれで目標の特定が出来ましたけど……やはりリンディさんは海でしたっけ陸の事になりますから頭を突っ込んだら問題になりますよね？」

「ええ、しかしスカリエッティ程の犯罪者になりますと事情が事情なので無理はできません」

「直ぐに戦力を整えていつでも出撃できるようにしておきましょう」

何か直ぐにでも飛び出しそうだが、ここでレジアスさんに迷惑をかけるのは忍びないが……。

「あー、待ってください。陸と揉める前に一度レジアス・ゲイズ少将に連絡をとってください。あの方なら力を貸してくださいと思いますので……」

すっごい微妙な顔をされた。

何故だ？ あんなに話のわかる常識人に微妙な顔をするとは一体何が問題なのだろう？

「いえ、すみません本田先生からレジアス少将の名前が出てくるとは思いませんでしたので……それにレジアス少将は海嫌いであるのでして恐らく手は貸してくれないと思います」

「そうなんですか？ じゃあ私から一度話してみます。いけそうでしたらまた後ほど連絡します」

「「えっ？」」

「え？」

思わず同じ返しをしてしまった。

リンディさんもクロノ君も訳が分からないといった顔をしている。

「失礼ですが本田先生はレジアス少将の連絡先をご存知何ですか？」

「ええ、これも先ほどと同じくミッドチルダに行った時に知り合いました。　どうかなさいましたか？」

「イエ、ナニモゴザイマセン」

リンディさんがカタコトで答えるが問題なさそうには見えない。クロノ君はああ、やっぱりと言わんばかりの顔をしている。

「そう言えば、先日の中間試験の時に特別注意事項を作っていたありがとうございます。　ああ、もしミゼット・クローベルという方にも今度お礼をさせて頂きたいんですがどういった方なんでしょう？」

「……本田先生、どこでその名を？　いえ、もういいです。その件は私の方から言っておきます。　忙しい方なので」

「……そうですか。　それは残念です。　御手数ですがよろしく願います」

本当に残念だ。

忙しい方なら仕方がないな。

お断り3の抑止力になると踏んだんだがなー。

特に八神あたりに効果を期待したのだが……。

「そう言えば、お二人もう一つお願いがあります。　次は八神さんの御宅なんですが、保護者が今いち掴みきれないので色々な方をお呼びしたのですが申し訳ありませんがお二人にも参加していた

だけないでしょうか？」

「ええ、それは構いませんが、良いのでしょうか？」

「僕も構いません」

「ええ、八神さんも少々問題が多いので協力していただけるとありがたいです。あと、ギル・グレアムさんという方も来られますのでよろしくお願いします」

「……はい」

俺のお願いに快く了解してくれたのにグレアム氏の名前が出た時に気まずい感じの顔になった。

これはまた厄介な事になりそうだ。

と、言うかこれ以上面倒な人ならいい加減キレてしまいかも知れない。

「ああ、長々と申し訳ありませんでした。取り敢えずフェイトさんの進路は保留にしておきます。必ずフェイトさんに将来の事を考えさせてもらいましょう」

「はい」

二人共真剣な表情で答えてくれた。本当に頑張ろう。

アイツはここで諦めてはいけない。

「それでは八神さんの面談は午後4時からになっていきますのでそれまでの間休憩しておいてください」

「分かりました。ありがとうございました。ではまた後ほど」

そしてリンディさんとクロノ君は出て行った。

さて、ハラオウンは……体育館の方か。

全く悪いことしたが……まあ、嫌われて当然だがやるしかないよな。

体育館に向かっていくと裏の方からハラオウンの気配がするのでゆっくりと近づいた。

体育館裏でハラオウンは膝を抱えて座り込んでいたのでその隣に座る。

ハラオウンはじっと地面を見つめたまま動かない。

「ハラオウン……さっきは怒鳴ったりして悪かったな」

「……」

ハラオウンが自分から話し始めるのをじっと待つことにした。

五分ぐらい立った時だろうかやっとハラオウンが俺の方を向いて

話しかけて来た。

「ねえ、先生？ ……私は生きてて良いのかな？」

「当たり前だろう。 どうしてそんな事を言うんだ？」

ハラオウンはまた泣きそうな顔をしながら答えてくれた。

「だってだよ。 私と言う成功例がいるから私のような存在を作ろうとするんだよ？」

「それで生まれたら見た目は同じ子供かも知れない。 確かに私たちにはオリジナルになった人の記憶があるよ。 でも些細なところで違いが出るんだよ？」

「……きっと実の親はそれをすぐ気にするんだ。 ……初めは良いかもしれないけど時間が経てば経つほどそれが許せなくなる。 ……そうしたらあの子はこんな子じゃなかったとか……こんなことをしなかった……こんなはずじゃなかった。 ……大嫌いって言われるんだよ！」

「……あんな思いをするのは私だけで良いんだ。 ……なんで私は生まれて来たんだろう？ ……ねえ先生？ もう訳が分からないよ……助けて」

そのまま俺に抱きついてくるハラオウン。

俺はハラオウンの抱えている闇の大きさに驚きを隠せない……そ

してその慟哭が非常に痛い。

正直この現場を人に見られたら色々誤解を生みそうだが……何時でも突き放せるが……だがどうしてそれが出来るだろうか。

この小さく震える体を俺はただ抱きしめてやることしか出来ない。

しばらくして泣き止んだハラオウンは俺の方を見てじっとしている。

でもここで俺は卑怯な事を言わなくてはならない。

「ハラオウンは、優しいな。だから辛いんだな。でもなハラオウン、生まれ方がどうこうとかもういいんだ。だって生まれてしまったものはしょうがないだろ？ なら精一杯生きて欲しいな。

この世界には生きてくても生きていけない命がいくらでもいるんだ。なあ、ハラオウン？ 今のお前の気持ちを味わっているのはお前だけか？」

「え？」

「お前と同じ気持ちを持っているのは少なくとも一人は知っているんだろ？ ならば、その子を本当に理解して上げれるのはお前だけじゃないのか？」

「……わ、私だけが？」

「ああ、正直戦うことなら誰でも出来る。そう言った違法な研究している奴を捕まえることが出来るのは他の人間にでも出来る。」

でも、同じ境遇に陥った奴を分かってやれるのはお前しか居ないんじゃないのか？ 他の奴らが何を言ったところで慰めにもならない」

「……卑怯だよ……先生……そんなこと言われたら戦えなくなるよ」

「そうだな。……卑怯だろ？ 大人は自分の都合でいくらでも卑怯になれる。……また一つ勉強したな？」

「あははは、何それ？ でも、先生？ 卒業して管理局に行かなかった場合どうしたらいいの？」

さっきまで死にそうな顔をしていたが少しはマシな顔になった。

「……さあな。それはこれからゆっくり考えていこう。急がなくていい。そのための時間だ。お前の人生なんだからその場凌ぎじゃなくてもっと腰を据えろ」

「……うん。やっぱり第一志望は先生のお嫁さんかな？」

「勘弁してくれ」

それから暫くの間ハラオウンは今まであったことやその時に思ったことを色々話してくれた。

ただ思ったことは、この子は本当に優しい子だということ。

他人が傷つくぐらいなら自分が傷ついた方がいいと考えてしまう

ぐらいに。

だからこそ戦い以外のことで幸せになって欲しいと思うのは俺の我侷なのだろうか。

……どんな進路を選んだとしても六年後は笑って幸せだよと言ってくれたらそれに越したことはないな。

ハラオウンが泣き出した時に近くにリンディさんとクロノ君の気配を感じていたが気がついた時には気配が消えていた。

……少し鈍ったな。

さて、最後は八神家か。

カリムに会うのは久しぶりだな。

こんな再会になるとは思わなかったが。

多分一番問題が複雑な家庭だ。

第二十話 保護者面談 八神家編

……気が重い。

……お断りスリーの担任ですが、進路相談室の空気が最悪です。

この場にいるのが、八神家はシャルさんとシグナムさん。

次にギル・グレアムさんとその使い魔のリーゼロッテとアリア、

さらに先程まで話していたリンディさん、クロノ君のハラオウン家。

最後にカリム・グラシアさんとその護衛シスターシャッハ。

……俺を合わせて計十人……前代未聞の保護者面談だ。

……正直狭い。

シグナムさんとグレアム家の空気が最悪です。

「……本日は皆様お忙しいところお時間をいただきありがとうございます。改めまして、私は八神はやてさんの担任をしております本田と申します」

それでも始めなくてはならないので始めたが全員がどこか気不味い感じでこちらと視線を合わせようとしてくれない。

「ああ、私は時間があるので構わないよ。しかし、何故このメイツを集めたのかお話していただけないだろうか……本田先生？」

かなり渋いオジ様……ギル・グレアムさんがこのメンツについて聞いてくる。

まあ、それもそうか。

「ええ、はやてさんの保護者が、どなたか分かりませんでしたので繋がりのある方を集めさせて頂きました。グラシアさんとシスター・ヌエラさんには今後の相談という形で呼ばせていただきました。率直に聞きます、どなたが保護者……身元引受人になられるのでしょうか？」

……………。

場を沈黙が支配する。

と言うか誰も目を合わせようとしない。

なのでそのまま進める事にしよう。

「……そうですね。なら、はやてさんに一番近い所にいるシャマルさんにシグナムさんは、はやてさんの保護者はどなたになると思いますか？ ああ、あなた達は書類上は保護者となるかも知れませんが……実際の立ち位置は知っていますので除外させていただきます。で、どなただと思いますか？」

シャマルさんとシグナムさんは顔を見合わせて考えている、と、言うか恐らく念話と言うやつで相談しているのだろう。

やがて決まったのかシグナムさんが答えてくれた。

「私達はやはり色々世話になっていました石田先生が保護者だと考えております」

それを聞いた瞬間この場にいた全員表情がなんとも言えない顔になった。

「そうですか、ありがとうございます。 それではリンディさんはどのようにお考えですか？」

リンディさんは直ぐに答えてくれた。

「私はグレアム提督が保護者と考えております。 これは、はやてさんが一人になった時から今まで経済的に支援してきたりして見守って来たからです。 私は学校やその他もろもろの事務的な手続きを手伝っただけです。 もちろんはやてさんの事は心配していましたが……」

そして最後はグレアムさんだ。

「……私は、あの子にしたことを考えると合わせる顔が無い。 だからハラオウン家はふさわしいと思う。 ……幸せにはなって欲しいと考えている。 なので影ながら援助をして来た。 今も偶に手紙でやり取りしていたが……」

グレアムさんが何をしてきたかは全てザフィーラとクロノ君から聞いたし、 八神がどう思っているのかも先ほどハラオウンから聞いた。

その言葉に使い魔の二人は支えるように寄り添い、 他はなんとも言えない顔をしている。

それにハラオウンに頼まれたこともあるしな。

『先生、はやてを止めてね。このまま行くとはやては管理局に消されるかも知れないから。私がいくら話しても』大丈夫やヴオルケンリッターの皆がいてるから何とでもなる。それに私は、夜天の書の主や。私がしっかりせえへんと皆に示しがつかへん』って聞く耳持たなかった。母さん達は家庭のことだから話しくいし、グレアム提督は自分のやったことに負い目を感じてはやてに強く言えない。でも、先生は違う。今、はやてを唯一怒れるのは先生だけだから。ゴメンネ先生役に立てなくて』

ここまで言われたらここに居る全員を利用してでも今の八神の行いを止める必要がある。

……実はレジアスさんからも一応助け舟がきたが八神がどうするかわからないと言っていた。

さて、まずは保護者だが、やはりグレアムさんと考えておこう。

「……これまでの話を改めて聞いたところ、保護者はグレアムさんが保護者と考えさせていただけます」

正直言ってグレアムさんの事を聞いてまだ、どう接するか考え中だったがさっきの態度を見て遠慮する必要はないと思った。

感情論でなくて態度で示せ！ と言いたくなるが……。

……確かに闇の書事件とやらで選んだ手段は最低だが、方法はそれがベターだっただろう。

……だが、終わってからのことが一番許せない。

……合わせる顔がないからと言って金とコネを使わせる……これ

が八神の増長を招いたと言える。

「いや、……私にそんな資格はない」

俺は自分を抑えるのに精一杯だ。

もし抑えるのをやめたらこの場で首をへし折りそうだ。

……俺の様子に気付いたのかシグナムさんやクロノ君、シャッハさんは顔色を変えている。

「あなたの気持ちは関係ありません。……あなたの過去にしたことも知っていますが、今は大人としての責任を全うして下さい」

「お前！ お父様の気持ちは知らないで！」

使い魔の二人がすごい形相をして睨んできたが関係ない。

と、言うか俺がキレそうだと言うかキレた。

「五月蠅いぞ！ 使い魔ども黙ってる！ 俺は今ギル・グレアムに話しているんだ！」

……しまった場の雰囲気がかかりますますます重くなってしまった。

隅っこで八神家、ハラオウン家、シャッハさんが固まっている。

使い魔の少女達は腰を抜かしたのかうまく立てない状態だ。

グレアムさんも驚きに体が固まっている。

そんな中カリムだけは平然としていた。

「……申し訳ありません。 大声を上げてしまって。 それでな

んでしたっけ？ ……ああ、資格がないでしたっけ？」

「……ああ、この手で殺そうとしたのにどの顔で保護者面できると思うのかね？」

「……それはあなたの判断です。はやてさんは気にしていないそうですね。じゃあハラオウン家が保護者ですか？ それともロシア家ですか？ まさかと思えますがはやてさんがとは言いませんよね？」

苦悶の表情で黙り込んでいるグレアムさんを見ると少しの同情と苛立ちを覚える。

と言うか高町家もそうだが子供から逃げる大人が多すぎる。別にそれは保護者だけでない俺達教師にも言えることだが……それでは子供がたまったもんじゃない。

だから、俺は生徒から逃げようとは思わないし逃げてはいけなと思う。

ここで嫌われてもいつかこんなこと言われたなで思い出してくれて次に活かしてくれたらそれで十分だ。

「私よりもリンディ君の方が……」

「……あなたはそうやって全て人任せにするんですか？ ああ、はやてさんの行動の一部はあなたの影響ですね。あなたのした事は責任を取ると言って管理局を辞めて、はやてさんにお金を渡し困ったことがあるとコネを紹介するで終わりですか？ 別にそれは贖罪でもなんでもありませんよね？ しっかりとはやてさんの将来を

考えて話しました？ あなたは自分の罪悪感のみではやてさんを甘やかしてきただけではありませんか」

本当に最悪で最低だ。

俺はこの人に当たっているだけだ。

「……シャルさん。申し訳ありませんが進路調査表を見せてください」

「……はい」

シャルさんが進路調査表を見せてくれた。

第一志望：就職

第二志望：進学ベルカ

第三志望：進学ミッドチルダ

……ああ、第二第三はカリムとレジアスさんが手伝ってくれたのか。

「……そうですか。シャルさんとシグナムさんは何か聞いていませんか？」

「……主はやては中学校を卒業するとそのままミッドチルダに席を置くと言っておりました。それで管理局に勤めてそのままトップを目指すと……。第二志望は騎士カリム殿の意見がありました……第三志望にしましては陸のレジアス少将より直々に連絡が来

ました。　主はそれを信用しておりませんが……」

八神がトップの世界ね。

……無理だな。

アイツには人を惹きつけるカリスマが足りない、知識も知恵もない。あるのはたまたま手に入れたコネとヴォルケンリッターと言う戦力、後は少しの悪知恵。

正直……本気状態のハラオウンの方がよっぽどカリスマがあるだろう。

………いっそのことバニングスに支配者になってもらい八神が参謀すると考えた時点でこの考えを放棄した。

「第二志望について詳しく話させてもらいます」

カリムが第二志望について教えてくれるみたいだ。

「ハヤテには卒業後ベルカ領にてこちらの学校に通ってもらい古代ベルカの研究をしてもらおうと思います。……それに失われた技術ユニゾンデバイスを復元させた実績もありますので」

「なるほど。　大体何年ぐらい学校に行くことになるのですか？」

「そうですね。　三年間はこちらの基礎知識を習得してもらいます。それからアカデミーに入ってもらい本格的に古代ベルカ式の研究をもらう予定です。　生活の方は私が手配しますのでご安心ください」

……意外だったが、八神はそんなことが出来たのか。

まあ、研究職なら戦闘になることもほとんど無いか……あいつが研究か……不安だ。

下手したら巨乳の等身大ダッチワイフとか作りかねんと思うが……まさかな。

後は第三志望は一体どんなプランなんだ？

「ええっと、本田先生。私からゲイズ少将からお聞きしましたプランを説明させていただきます」

シャルさんが恐る恐るといった感じに声をかけてきた。

クロノ君は普通の態度だったが、グレアムさんとリンディさんは、呆然としている。

カリムとシャッハさんは少し苦い顔をしている。

「お願いします」

「それでは、ゲイズ少将ははやてちゃんが卒業してこちらに来るなら士官学校に入ってもらいしっかりと基礎や地盤を固めるようにし、卒業後は部隊の運用方法を陸の部隊で勉強してからゲイズ少将の下で組織運用方法を学んで行くとのこと。これによって将来的に管理局をになっていく人材になってもらうとお聞きしました」

「なるほど。他に何かありませんでしたか？」

「……後は、魔力制限やデバイス制限、他に監視も付きます。はやてちゃんはそのことが気がかりにしまして……。更に陸で学んでも本局に通用するとは思わないと言っていました。他にも『レジアス少将は黒い噂も絶えへんし、私が来たらヴォルケンリッターも引き抜けるから地上の戦力が上がると考えているんやろ』とも言っていました」

……あの子は自分の立場を全く理解してないな。

レジアスさんに聞いたことだが、八神は闇の書事件と言う事件の被害者なのに闇の書の所持者だから守護騎士が犯した罪は自分の罪と言って加害者となる事を受け入れた。

確かにこれによりヴォルケンリッターの罪は軽減されたらしいが……。

……正直子供がやっと出来た家族とまた離れ離れになるのが嫌だから我儘を言ったようにしか思えない。

だからかグレアムさんやハラオウン家、さらにはグラシア家の圧力をかけることで監視も付かなかったしその他の制限もかけられなかった事に気付いているのだろうか？

さらには、レジアスさんの黒い噂もことを言っているが、八神もかなりやらかしている。

コネやバックに付いている人たちの力があるせいで管理局内の権力者の暗い部分を啄きまくって、脅迫まがいの事をしているみたいだ。

さらには有能な人間に将来的に部隊を設立するから来ないかと声をかけている。本局の人間だけならまだしも戦力の乏しい陸には迷惑な話らしい。

特に陸の方でよくやっておりますソロソロ目障りだから上手いこと消

す方法はないかと相談がよく来るとレジアスさんがボヤいていた。

「……ありがとうございます」

「……あのー本田先生？」

シャルさんが不安そうに聞いてきた。

「どうしました？」

「本田先生は、はやてちゃんがこのまま管理局に就職するのは反対なんですよね？」

何を当たり前のことを言っているのだろう。

初めから魔法に関わっている人間とそうでない人間との常識に溝があるのは仕方がないことなのだろうか？

だからと言って簡単に認めるわけにはいかない。　　と言うか教
子が死ぬかもしれない所に送り出す教師がいたら会ってみたい、
一発殴ってやる。

「……ええ、そうです。　　はっきり言っ
てはやてさんは、『私
て可哀想だから皆許してね』と悲劇のヒロインでも演じて甘えてい
るようにしか思えません。　　まあ、　　今まで怒られてきた経験と言
えば精々石田先生に注意されたのが精々でしょう。　　皆さんもがは
やてさんの過去を知っているので怒るに怒れないでしょう。　　それ
に、ほかの人間は管理局いようが聖王教会にいようがバックが強
すぎて注意すら出来ない。　　……それによっ
てはやてさんは物事は

自分の思い通りになると思っている節がありますからね。しかし、現実はその甘くないでしょう。学校卒業して就職したらそんなことが通じる職場だとは思えません」

「主はやてはそんな方ではありません！」

シグナムさんが怒るが、正直こっちは冷めたままだ。

「そうですか……ならどう言う人間だと思うのですか？」

「主は我々を人間として扱ってくれており人格面でも……」

急に話すのを止めたと思っただらこちらを見て固まっていた。

一体どうしたと言うのだろうか？

「……人格が優れているから……人間として扱ってくれるから……主の事を盲信するのは結構です。……ですが、これならまだヴィータちゃんが面談に来た方がマシですよ。……少なくともあの子はやてさんが管理局で働くことに……戦う事に反対してましたから」

「なっ！ ヴィータが！」

驚いた様子で俺の方を見てくるが何を驚いているのだろう。

「ヴィータちゃんとザフィーラに関しては管理局で奉仕活動しながらどうにかしてはやてさんを現場から遠ざけようと考えていたみ

たいです。……理由は分かりますよね？」

「……何時も我々が側に居るとは限らないから……ですか？」

シャルさんが冷静に答えてくれる。

それがまだ救いだ。

「そうです。……はやてさんの管理局内での評価は知っていますか？ 厄介なコネだけがある犯罪者ですよ。少なくともここにいる人間の耳には入らないようにされていたみたいですけど……私も最近出来たミッドチルダの友人たちに話を聞いて驚きましたよ」

「本田先生、一つ良いですか？」

さっきまで黙っていたクロノ君が俺に話しかけて来た。

「なんででしょう」

「はやてさんは、もしかして相当なところまで脚を突っ込んでいられると思われているので反対しているのですか？」

「思っているのでは無く……突っ込んでいるんですよ。それも命を狙われるぐらい。はやてさんはまだまだ若くそして詰めが甘い。何時でも消そうと思えば消せるのに放置されているのは、今のコネのおかげです。ただ、それもどこまで持つか……陸はレジアス少将が表立って動くことで周りを抑えてくれますが……本局は魔窟らしいですね既に何人かは動き始めているみたいです」

「……本田先生、あなたは一体何者です？ 場合によっては私達はあなたを拘束しなくてはなりません。ここまで管理局の内情を知られていられては黙って置いておけない立場なので……」

いけないな。喋り過ぎた。

……ああ、本局の話は言いすぎたか。

ラルゴ爺さんの言うとおりに黙っておけば良かった。

さてどうしようか？

「母さん、いやリンディ提督やめてください。恐らく本田先生に話をしたのはかなり立場のある方だと思います。それに本田先生は我々の世界に介入する気はないでしょう。と言いますか先生と戦うぐらいなら管理局を敵に回したほうがまだ生き残る可能性があります。それに、もし本田先生から情報を引き出そうとするぐらいならなら管理局にスパイを送り込んだほうが建設的です」

……クロノ君の中での俺って一体どういう扱いなんだろう。

まあ、確かにこの場にいる人間なら本気を出すまでもないが……と、言うか戦わないよ。

「……クロノさんが私の事をどう思っているのかは後日個人的に聞きますので今は置いておいて。……はやてさんの場合は進路も問題ですが、普段の学校生活にも問題がありまして、はやてさんのセクハラに結構苦情が来てますのでそれもどうかして下さい」

「「「「「「「「……はあ？」「「「「「「「「」

全員が一気に気の抜けた返事をする。

……これもかなり問題なんだよな。

「ええ、ですからはやてさんのセクハラ問題です。何でも胸を揉まれた、お尻を触られた、パンツを頭に被られたとかその他もろもろです。……正直言いますと私が庇うのもソロソロ限界が来ます。拳句に進路がこれです。面倒なので何らかの理由をこじつけて公立の学校に転校してもらおうと考えている先生もいるのが現状です。……こちらは一応私立で……色々あるんですよ。私としましても、はやてさんをそのまま放置するのはちょっと……いや、かなり心配でして……。どうにか出来ませんか？」

すごく重い空気になっている。

なんと言えいいのか……体が鉛の様に重い。

年の功なのかグレアムさんが立て直したようだ。

「……はやて君はそんなにアレなのかね？」

「はい。残念ながら。……グレアムさんでしたら地球の常識とそちらの常識の違いが分かると思われます。それにですな……地球で最終学歴が中学卒業で学校が学校ですので更にこちらで使える資格なし、職歴無しとなりますと……管理局に勤めていて何かあった時の事を考えますと……」

ここに居る全員が一斉に頭を抱えた。

あちらでも結構。パワハラ、セクハラしてそうだしな。

「……フェイトさんや高町なのはさんは、条件が違うのでなんとも言えません。ですが、はやてさんの場合は今後こちらで生活するのが難しくなります。……はやてさんの将来についてももう一度考えてくれませんか？」

八神の関係者は一斉に口を開いた。

「「「……どうしましょう？」「」」

……手詰まりだった。

……手遅れだったのか。

いや、まだだ！ まだ終わらんよ！

「……とりあえずですね。はやてさんは後何年ぐらいの刑期があるのですか？」

「もう終了しています。今までの実績がありますので」

クロノ君が直ぐに答えてくれた。

ああ、つまり卒業したぐらいには晴れて自由の身か。

なら、後は何で八神が管理局に固執するのかが分かればなんとかできるのか。

「……一つよろしいでしょうか？」

カリムが俺の方を真剣に見てくる。

「なんでしょう」

「ハヤテの件は私に任せてくれないでしょうか？ 私が、もう一度あの子が管理局やこちらに固執する理由を聞いてみます」

カリムの申し出はありがたいが本当に全部話すか微妙なラインだな。

うーん。でもここは一旦距離を置いて魔法関係者以外の人間からも一度聞いてもらった方が良いかな。

だが、そうなるが高町家が石田先生になるだろう。

石田先生は魔法の事を知らないし巻き込みたくないのが正直な気持ちだ。

そうなるが高町家になるが……今は自分たちの娘のことで精一杯だろうし。

いっそのこと八神の目の前でヴォルケンリッターを叩きのめしてみるか？

「あのー本田先生？」

シャマルさんとシグナムさんが何故か震えながらこちらを見ている。

「どうかなされましたか？」

「……声に出てました。後、それだけはやめてください」

「失礼しました」

しまったな。

冗談で考えていたのに声に出していたのか……。

誰かいなものか。

それから五分間沈黙が続いた。

……二人思いついた。

……月村とバニングスだが生徒を巻き込むのは気が引けるしな！。

何よりバニングスは絶賛、霸道街道爆進中だしな。下手したら八神を洗脳しかねん。

だとすれば月村か？

……彼女も最近壊れてきているしな。

でも月村に頼むのが一番良さそうだな。

「取り敢えず、皆さんの意見をお聞かせください」

「「「「「「「……性格矯正が最優先かと」「」「」「」「」

「……ですよねー」

満場一致で八神の性格矯正が決まった。

グレアムさんは暫くの間八神家に住んでもらうことになった。

初めは嫌がっていたが、全員から白い目で見られて折れた。

ハラオウン家とグラシア家も八神の動向に注目し暴走しそうなら

止めてくれることになった。

一度、カリムにも八神の話を聞いてもらうが、月村にもそれとなく話を聞いてもらうことになった。

因みに進路はイギリスに海外留学で報告することになった。

保護者はグレアムさんで、グレアムさんのところにホームステイすることにした。

……最低な報告書だ。

嘘だらけだ……バレたら俺のクビががががが。

……カリム？どうしてそんな笑顔なんだ？

え？クビになったら私のところに婿養子として来い？

……今からちょっと辞表書いてくる。

疲れたー。今日は濃い一日だった。

帰りにカリムを食事に誘ったがベルカに仕事があるから直ぐに帰ると言われた。

……鬱だ死のう。

おまけ

地の文無し

本編関係なしです。

……どうも本田淳です。

ただいま絶賛保護者面談中です。

ところで問題児がお断りスリーだけだと何時から錯覚していた。

ほぼ全員問題児なんだよ！

パターン1

「先生、最近娘の様子がおかしいんです。今まではバニングスさんの事をあまり快く思ってたのに、最近では私の将来は、バニングスさんの下で働くことだと言い出したので不安なんですけど」

「……最近では、娘さんはバニングスさんと仲が良く、一緒に勉強をしているのを見かけます。多分将来的にバニングスさんの会社に就職したいということなんでしょう」

「……本当にそうなんでしょうか。確かに成績は伸びてきていますし、何か満ち足りた顔を良くしていますけど」

「……バニングスさんなら大丈夫ですよ。何かありましたら私が止めますのでご安心ください。……他に何かありましたか？」

「……そうですね。あのバニングスさんですものね。それによくよく考えたら就職先をしっかりと見据えているってことですよ。先生も何かあったら止めてくださるとのことですし安心しました」

……バニングスの暴走で胃が痛い。

パターン2

「……ええ、娘さんの成績は非常に伸びてきてますね」

「本当ですか。これも先生のおかげです」

「ははは、ありがとうございます。……ですが、授業中に鋼糸を使って私を操ろうとするのは止める様に言ってください」

「ふふふ、そんなこと言いましたも先生は見事な鋼糸返しで捌い

ていると娘も言っていますの。 ええ、最近では人形遣いも成長してきましたし。 本当にありがとうございます」

……鋼糸使いの家系が居てよく操ろうとしてくる。

パターン3

「先生、最近の娘の隠密行動はどうですか？」

「……娘さんに隠密行動を取らせないで下さい。 最近は圏境を覚えてきたのか気配遮断が上手くなりましたね」

「がははは、 そうですね。 イヤー娘には忍者になってもらいたいものです」

「……ですが、その技術を写真部で生かすのは止める様に言ってください」

「うーん、何時かは情報収集のスペシャリストとして育てたいのですが」

「……一族ごと滅ぼしますよ？」

忍者の家系で写真部兼新聞部の生徒が居る。

パターン4

「先生！ 最近娘の拳が痛いです」

「何をして叩かれているのですか？」

「いやー、一緒にお風呂に入ろうとしたら八極拳で殴られました」

「まず、娘さんのお年を考えてください。それから、この時期の子供はそういったことに敏感なので奥様とよく話してください」

「分かりました。いやーこの学校に入ってから気も身体も弱かった娘が強くなりました。本当に良かったですよ」

学園内に八極拳を使うのは空手部だ。

因みにこの子は空手部でも補欠。

……保護者が問題だ。

パターン5

「先生、娘が株を始めてから笑いが止まりません」

「そうですか。娘さんにはほどほどに言ってください。授業中にもされては困ります」

「でもですね、一瞬でも目を離すと相場が変わったりするらしいじゃないですか。何かあったらどうするんです」

「……何かあったらって、そもそも子供にさせないでください。どうしてもとおっしゃるのなら奥様も教えてもらえばイイじゃないですか」

「そうですね」

その後、本当に初めて資産が300億を超えとは思ってもよらなかった。

パターン6

「……すずかさん、最近はよく一族の症状が出ているのですが大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫。ただ、発情期に入ると休ませるけどね」

「そうしてください。……ところで何か吹き込みました？ 異性関係のことです」

「うん、あの子男が怖いみたいだから将来付き合うなら自分の言うことを聞いてくれる人を探したと言った。けど何を勘違いしてかDMな子探し始めたけどあの子が幸せなら良いかなって」

「止めてください。最近は探すんじゃなくて作ろうとしています」

「……マジで？」

「……はい」

「ちょっと本気で話し合いしてくる」

「頼みます」

忍が本気で走っていった。

凜ちゃんが手を振っているので振り返したら笑ってくれた。

……少し癒された。

パターン7

「先生、最近のアリサの様子が」

「……申し訳ありません。私の不注意で」

「……いや、何時かはああなると思っていたのですが……余りにも早すぎる。それに人を使うだけでは経営は成り立たない。どうすべきか悩んでいます」

「……私に考えがありますが、成功するか分かりません。……交渉力は、まだ先でいいと思います」

「そうですね。先生申し訳ありませんがアリサを頼みます」

魔法の言葉

「バニングス、このままだと高町達みたいになるぞ！ お断り四天王になる気か！」

「はっ！ 私は今まで何を」

第二十一話 高町の今後

月曜日になり高町が進路調査表を持ってきた。

「おはよう、高町」

「おはようございます。これが私達家族の答えです」

高町から進路調査表を受け取る。

第一志望：進学

第二志望：パティシエ専門校

……良かった。

それが初めに思ったことだ。

「高町はこの進路で本当に良いんだな？」

「はい！」

今まで見た中で一番の笑顔だった。

憑き物が落ちたような感じだ。

「ご家族に言いたいことは言えたか？」

「はっ」

「……そうか。放課後に詳しい話を聞かせてくれ」

「分かりました。失礼しました」

そのまま高町が出ていくのを見送り教頭に報告に行く。

他の先生方が俺を注目しているのがわかる。

「教頭、今よろしいでしょうか？」

「……ああ。高町さんはどんな答えを持ってきたのかね？」

「こちらになります」

教頭にそのまま高町の進路調査表を渡す。

教頭はそれを見たあと進路調査表を集めたファイルに挟み込んだ。

「……本田先生。本当に、本当に良くやってくれた。後は

ハラオウンさんだけだな。頑張ってくれ」

「はい。ハラオウンさんはもう少し時間が掛かると思いますが、今年中には解決できるようにします」

「ああ、方法は君に任せる。必ず、彼女に後悔させるような道を歩ませないようにしてくれ」

「はい。失礼しました」

自分の席に戻ると隣の八代先生が話しかけて来た。

「本田先生、高町さんはどうなったんです？」

「進学です」

「「「「「ヤッター！」「」「」」

俺の答えに職員室が盛り上がる。
と言うか、叫びすぎだろう。

さて、朝礼に行くかね。

今日は本当に気分が良い。

この調子で頑張ろうと思った矢先、教室前に着くと胃が痛くなる。

何故だ、物凄く嫌な予感がする。

意を決してドアを開けてようとするどドアが勝手に開いた。

「おはよう、あ・な・た！」

目の前にはハラウンがいた。

どうしよう、今まで巫山戯てきた自覚があったからこれからは普通にしてくれるものだと思ったのに……なんだこれ。

「おはよう、ハラオウン。取り敢えず、席につきなさい」

「はい」

返事と共に既に席に着いている。

朝から飛ばしてんな。

「皆、おはよう」

「「「「おはようございます」「「「「」

「出席を取るぞ」

出席を取りながら生徒の顔色をチェックしていく。
ふむ、八神の調子が悪そうだな。

「八神、気分が悪いなら保健室に行くか？」

「……大丈夫です、せんせ。ただ、知り合いが私の家に急に引越してきて家族間の空気が……少し気が滅入っているだけです」

「……そうか」

「……グレラムさん仕事が早いな。」

「他に気分が悪い奴はいないか？」

見渡すが大丈夫そうだ。

「最近はずかしくなってきたから体調管理はしっかりな。もし、少しでも気分が悪かったら直ぐに教えてくれ。じゃあ、朝礼を終わる。一時間目は移動教室だろ。挨拶はいいから移動していいぞ」

「「「「はい」」」」

生徒が出ていくのを見ておく。

バニングスが、クラスの大半を連れて行った。

荷物は他の生徒に持たせて、先頭を歩いていく。

その姿はまさに霸王。

高町は最近仲良くなった者たちと、ハラオウンは何故か俺の背中に張り付いて匂いを嗅いでいる。正直やめて欲しい。

「……ハラオウン、早く行きなさい」

「はい先生。早くイキます」

何か違うニュアンスで答えたような。

「月村と八神、悪いがハラオウンを引き剥がして連れて行ってくれ」

「「はい」」

……なんだろう。何時もの光景だった。

「ほら、フェイトちゃん行くで」

「早く、行くよフェイトちゃん」

「あと、もう少しだけ」

月村と八神がハラオウンの両腋に腕を入れてそのまま連れて行っ
た。

「ハヤテ、おっぱい揉むのやめて。今日、ブラするの忘れたから」

「げへへへ、やらしい子や。ほれほれ、ここがええんやろ。

私のストレス発散に付き合ってや！」

「ヤーマーデー」

……胃が痛い。

八神はどうしたらいいのかねー。

放課後になり、高町が来たので、進路指導室に連れて行く。

「さて、まずは、もう一度確認させてくれ。本当にこの進路で後悔しないんだな？」

「はい！」

本当に高町かどうか疑いたくなるぐらいの返事だ。

それから高町の話を書き留めると、ミッドチルダに行くのは、
「教導隊に入りたい」「ダメ！ 向いてない……云々」「だって、家に私の居場所なんてないじゃない！」
「」「ごめんなさい」「」
「」みたいなことがあったらしい。

「……皆が私と話してくれたような気がします。今まで私のことをご存知だったのか分らなかったから。それにやっと言いたいこと全部言えました。その上で色々ありましたけど分かり合えました」

「……そうか。良かったな」

「……はい」

本当に良かった。

進路が直ぐに変わらなくても家族と向き合うことが出来たらと考えていたが、ある程度は高町の中で答えも出ていたみたいだ。

ただ、これだけは聞いておかなくてはならない。

「ところで、魔法はもういいのか？」

「アハハハ、未練はあります。もっと色々学びたいし、空を飛びたいです。でも、それよりも先に私は色々と勉強しないといけないと思います。思えば私は早く家から出て行きたかったから魔導師の道に逃げ込んだのかも知れません」

「そうか。なら、お前の愛機にもお礼と今後のことをしっかり話しておけ。それから、先生としたら翠屋継いでくれると嬉しいがな」

「はい。レイジングハートにももう一度言っておきます。…
…ところで先生？」

嫌な予感がしてきた。

「な、なんだ？」

「魔法少女喫茶翠屋二号店ってどう思います？」

「……勘弁してくれ！」

「……高町？先生の聞き間違いだよな？また、魔法少女と言
いだしたの？」

「……先生。頼むからそんな目で見ないでください。冗談です。
冗談ですから！それに一人前のパティシエになる頃にはもう少女
とは言えない年齢ですから」

「……そういう問題じゃないだが」

……ミッドチルダへはまだ諦めが無いようだ。
なんで、まだ行く気なんだよ。

「先生。ミッドチルダにはこちらにないモノがまだまだあります。
今の私の目標はお母さんに並ぶこと。そして将来的にはお母さんを超えること。だって、味のコピーだと言われたら悔しいじゃないですか。それに、こ、こ、恋人探しも兼ねてます」

最後の方は顔を赤くしてモジモジしていた。

高町は目標を見つけたからその為にね。

……あれ？ 最後はかなり重要なこと言っていたような？

「そうか。目標は分かった。向こうに行きたい理由もな。

それなら安心だ。ただ、向こうで恋人探しする前にこちらでも捜しなさい。結婚とかも視野に入れるなら」

「うーん、でもそれだと魔法が……」

「魔法は、本当に必要になったら使いなさい。それまでは禁止だ。それにだそれも含めて受け入れてくれる人を捜しなさい」

「……はい」

「さて、時間も時間だ。送っていくぞ」

「はい！」

……めっちゃ嬉しそうにされた。

はぁー、高町はどうにかなったな。

後は、ハラオウンと八神か。

ハラオウンと言えば、レジアスさんがまだ準備中らしい。

イキナリ海と協力は難しいから色々と根回しに調整が難しいそう
だ。

それにスカリエッティの部下が潜り込んでいるかも知れないから
慎重になっているとのことだ。

八神はグレアムさんとリンディさんが徐々にコネを与えないよう
にして、どうなるかを見るので時間かかる。……一番厄介だ。

まあ、あと少しだ。頑張ろう。

おまけネタ！

リリ狩るなのはSKL

金色の死神（19歳）はこう言った。

「神（創造主スカリエッティ）に会うては神を斬り！」

管理局の白い悪魔（19歳）はこう言った。

「悪魔に会うてはその悪魔をも撃つ！」

夜天の主（19歳）はこう言った。

「戦いたいから戦い！ 潰したいから潰す！」

そして三人の少女？（しっこいが19歳）はこう言った。

「「「私たちに大義名分なんてないの」「」」

そして三人の少女達？（でも19歳）は次元犯罪者に砲撃魔法を
繰り出し。

「「「私たちが魔法少女だ！」」」

と叫ぶ。 今日もミッドチルダは平和です。

第二十二話 俺は私立学校の教師をしているんだがそろそろダメかもしれない

現在、職員室は戦場だ。

最近の学力低下をPTAにつつかれた。

根拠としては、外部から入ってきた生徒とそのまま上がった生徒との学力差があることだ。

高い学費を払っているのだから、もっと質の良い授業、教育をしろという事だ。

塾に通っている生徒もいるが、それでも差が出ているのが現状だ。

このままの状態が続くと、下手すれば生徒が減ってしまい……。

そして何よりプレッシャーを感じるのは俺だ。

何で俺英語教師になったんだろ。

現在の日本人が使う英語は日本でしか通じないと考えてもいいぐらいだ。

なので、日常会話ぐらいは話せるような教育をしてくれと言われた。

……どうしろと？

ほかの先生方に相談しようにも自分の教科で余裕がない。

英語に関して小中高大の先生方が集結、会議をするが……方向性決まらずに泣きを見た。

……バニングスに意見を聞こうと発言したが、即却下された。

……天才の金持ちって怖いとのことだ。

三回の会議をした後に小学校では発音と単語を優先的にして中学校では文法とリスニングを高校ではその総合を大学ではビジネスレベルを教えるっていく方針となった。

……そして、久しぶりにお断りスリーの面々を呼び出した。

「……あー、お前等な。これから卒業するまで魔法に関わる事禁止な」

……三人とも驚いた顔をして固まっている。
が、直ぐに高町が返事をくれた。

「分かりました」

「なのは(ちゃん)?」

高町の即答にさらに驚く二人。

「ど、どないしたんなのはちゃん?」

「なのは生理がキツイの?」

「……いや、普通に生活するのに魔法は使わないようにするだけじゃないの? 何を驚いているの?」

「う、嘘だ! こんななのは(ちゃん)じゃ無い! 誰だ! お前!」

「えー」

八神とハラウンが、激しく追求しだした。

「ふ、二人とも。私をどうゆう目で見ているのかな？　なのは分かんないなー？　ねえ、教えてくれる？」

「万年魔法中毒のトリガーハッピー！」

「若くして女を捨て、炎のにおいにむせるアマゾネス！　あとコミュ症や！」

「あはは、　バインドしてゼロ距離ブレイカー撃つよ！」

物騒なことこの上ない教え子に胃が痛い。

「あー、お前たちないい加減にしなさい。……と、言うのもハラウンは別にだが……高町と八神の成績な心配なんだよ。部活動をしているならまだいいがな。部活動をしていないお前達は成績の向上を求められているだよ！　……平均点取れているからいいやじゃないんだよ！　いいか、高町はまず、全教科平均点を目指せ！　最近のお前なら大丈夫だ！　お前なら出来る！　八神は向こうに行くつもりならこれからの試験、上位10位以内に入らないと認められない！　不可能だった場合は、大学卒業まで日本で暮らさない！　これはお前の後見人のギル・グレアムさんにリンディ・ハラウンさんとカリム・グロシアさんが出してきた条件だ！」

「「ええー」」

高町と八神が驚いている。

特に八神は、顎が外れるのではないかと心配になるほどだ。

……ハラオウンが、不満そうに見てくる。

「……ハラオウンは、二人の勉強を見てくれ。特に高町の方を。

八神は、まあサボらなければ大丈夫だと思うから。……家族の協力も取り付けたし……うん、大丈夫だ」

「はい！」

物凄く嬉しそうに返事してくれた。

……ああ、やめてくれ。そんな純真な笑顔を向けなくてくれ。

「なあ、せんせ？ 何か私の条件厳しすぎひん？」

「八神はやれば出来るのにしないからな。……何でこんな条件出したか分かるか？」

「あー私の成績が微妙やからですか？」

「……そうだな。でも、一番は出来るのにしないのは感心しないな。癖になってそうだしな。その癖を直さないと社会ではやっていけないぞ。特にお前のやろうとしていることを考えると」

「……分かりました。でも、デバイスのメンテナンスや休暇申請に一度向こうに行こうと思います。それはええですか？」

「ああ、それは大切な事だな。まあ、その申請も直ぐに通るだろうしな」

俺の答えに三人が意外そうな顔をしている。

八神が、代表して聞いてくる。

「えっと、せんせは何で直ぐに通ると思っているんですか？ 私たちこれでも優秀なんで引っぱりだこなんですけど？」

「うんうん」

八神の問いかけに高町とハラオウンが後ろで頷いている。

……頭が痛い。

「あーうん、色々知り合いに頼んだ」

「せんせ、いつの間にそんな知り合いを作ったんですか？」

「さあ？ さて、それよりこれだけお膳立てしてあるんだ。期

末テスト期待しているぞ」

「……はい、頑張ります」

「先生！ 今度こそ全教科満点取るからね。デートして下さい
！」

「あーハラオウン？ お前は教師に……いや、学校で何をしたい

んだ？」

「教師との背徳恋愛です！」

……相手をするのに疲れた。

廊下にまで声が漏れているが、きっと誰も気にしない。

「じゃあ、帰っていいぞ。解散」

「「はーい」「」

「だからね……先生」

ハラオウンがピンクなことを言いながらクネクネしだしたので八神と高町に連れて行ってもらった。

……ハラオウンは本当に何がしたいんだ。

……あの時の言葉は一体……胃が痛い。

あー授業の準備しよ。

後は、来年度用の資料を考えないと。

……で、期末試験の二週間前の今日お断りスリーが俺のところに来た。

「……なんの用だお前たち。……何時もの所で待ってなさい」

「「「……はーい」「」」

お断りスリーを先に進路指導室に向かわせて、パソコンの電源を切っておく。

「はあー、試験問題作成に思ったより時間が取られているなー。」

「まあ、ここ最近は俺だけじゃなくて殆どの先生が残業して、問題を作っている。」

「それだけ、これからの試験の加減が難しいのだ。」

「下手に難しくしすぎると成績は落ちて再びPTAが介入してくる。」

「だからと言って、簡単にするとそれはそれで文句がくる。」

「と、つらつら考えながら進路相談室に入る。」

「あー、何の用だお前たち？」

「勉強を教えてください」

「高町が一瞬で土下座しました。」

「なんとも見事な土下座や。……最近見慣れたけど。管理局

の人間がエースオブエースを土下座させる一般人がいるって知ったら大混乱やね」

「……そうだね。なのはに語学を教えるのがこんなに大変だと

は思わなかったよ」

「八神とハラオウンが遠い目をしている。」

「ほら！二人とも何してるの！早く先生に頼んで！」

「はいはい」

「せーの」

「「「お願いします」」」

どうしよう、ここで忙しいからと言って追い出すのはまずいが、問題は試験が近づいているために出来るだけ生徒を近寄せたくな
いのが本音だ。

それに、俺はこの三人の面倒を見すぎて鼻負しているのではとP
TAの会長様から直々に指摘されたらしい。

……血を吐きそうだ。

「……英語だけだよな？」

「……古文もお願いします」

「……今日か？」

「「「出来るだけ早くお願いします」」」

「……分かったが、古文は長谷川先生に聞いてくれ。それから
どこがどのように分からないかを伝えること。先生からもお願い
しておくから。英語はどこだ？」

その後教えるのに下校時刻になったので帰らせた。

ハラオウンは内容は理解しているが、人に教える方法を学びに來たらしい。

……こんな修羅場の状態でこんなことを教頭に話すのはなんだが、話さないとそろそろ俺が死ぬ。

「教頭先生今お時間よろしいでしょうか？」

「……本田先生、顔色が悪いが大丈夫かね？」

「大丈夫です。それよりお願いがあります。試験一週間前になりましたら放課後に教科ごとに分かれて教室に担当教師を配置しませんか。先ほど私の所に生徒が來まして英語だけでなく古文も聞かれましたので」

俺が古文と言った瞬間長谷川先生の顔色が変わった。

悪いが全員道連れだ！

「……明日、緊急会議を開くので資料を制作してくれたまえ。あと、プレゼンもしてもらう」

「……はい」

……会議の結果俺の提案は可決され次の日にはホームルームで話すことになった。

殆どの生徒は無反応だったが、成績がヤバイと感じている生徒に

はかなり反応が良かった。

それから試験までの間、かなりの生徒が残った。

……英語で残った生徒が思ったより多くて泣く。

どうやら教え方を変えたほうがよさそうだ。

……奇跡が起きた。

高町があの高町なのは、全教科平均点を取ってくれた。

ハラオウンは、全教科満点と、バニングスに並んでくれた。

八神は17位だったが、今までのことを考えると再考の余地ありだな。

……うん？ 水？ ……いや、俺の涙か。

終業式になり、お断りスリーからこれからミッドチルダに長期休暇の申請とデバイス点検に行くご連絡があった。

……何事もなければいいのだが。

一週間後翠屋に呼ばれたので行くと、お断りスリーが既に集まっており新聞記事を見せてきた。

見出しに『臨海空港で大規模火災発生！』

内容としては、見出しそのまま、ただ、高町達が空港に着いた時に起こったことで魔法を使って救助活動を行った。

幸い怪我人は出たが、死人は出なかったらしい。

かなり、三人の活躍がピックアップされている。

で、その三人は今俺を前にして怯えている。

だが、この記事を読めば高町達がいなければもっと被害が出ていたと思う。

「「「……ごめんなさい」「」」

「……何を謝っているんだ。お前達は良くやったよ。褒めはするが、怒る要素は何もないだろ」

それでも高町達の顔は晴れない。

「人命救助なんてそうそう出来るもんじゃない。しっかりと考えての行動だろ？ なら、怒りはしない。ただ、怪我もなく無事で良かった。教え子の葬式なんてゴメンだぞ」

「「「はい」「」」

「で、これだけか？」

「「「はい」「」」

「分かった。じゃあ、冬休みの宿題を忘れないように」

「「「はい」「」」

そのまま自分と高町達の分のお金を払って翠屋をあとにした。

家に帰るとレジアスさんからメールが届いていた。

どうやら、さっき見た空港火災の事で高町達が陸の指揮官の指揮

のもと協力的に動いたためとの協力体制が楽になったらしい。

なので、リンディさん達と会談を開くから連絡してくれとのことだ。

近いうちに俺も挨拶に行かないとな。

外伝 フェイトの決着

……俺の家にハラオウンが来ている。

……泣きたくてしょうがないのにそれでも我慢して無理やり笑おうとしているのが痛々しい。

「どうした？ ハラオウン」

「……スカリエッティの居場所が分かりました」

そろそろ来るだろうと思っていた。

先日、レジアスさんとリンディさん達を引き合わせた事もあり大體は知っていた。

それでも、お互いに準備が出来上がっていたのか年内にスカリエッティを捕まえると言っていたが、早すぎるだろう。

「……そうか。行くのだろうか？ ……止めても無駄だろうから

もう止めはしない」

「……えっ？」

ハラオウンの安全の保障は出来ていない。

戦場に立つ以上何が起こるかは分からないからだ。

それでも陸のエースと海のエースが集まるし、レジアスさんの直属で作った特殊部隊も送り出すとの事だ。

……安全の事を考えたら反対だが、ここでハラオウンがしっかり

と区切りをつけなければ後々禍根を残す場合もある。

それに周りが認めて本人も行く気があるなら止めることが出来ない。
い。

「……ただ、約束してくれ無事に帰ってくると」

「……それは出来ません」

ハラオウンの顔を見たらよく分かる。

かなり不安と怒りが絢交ぜになっており何とか自制心を保っている状態だ。

本当に大丈夫なのか？

こんな危うい状態で戦闘に出して。

「……そうか。なら仕方がないな。言いたいことは何でも言

っておけ。今抱えている不安も怒りも全部ここで吐き出しておけ。

それで良い……それだけで良いから」

「……はい」

それからハラオウンは3時間ほど泣きながら話したあと疲れたのかそのまま寝てしまった。

……はぁー、溜まっていたんだな。

俺が出撃を禁止した為に戦闘のカンが鈍っているかもしれないとか、高町達には黙っていたのでそれが苦しかったとか……その他諸々だ。

俺は自分の事だけしか見ていないのかな……と言うか、本当にこ

の時期の子供は何を抱えているか分かったもんじゃない。

ああ、俺もかなり矛盾しているな。

生徒の前だから表に出さないけど……。

ただ、ここまで来たら生きて帰って来いと言えないな。

暫くするとハラオウンが目を覚ましたのでそのまま送って行った。

「なあ、ハラオウン？」

「何ですか？」

「先生からアドバイスだ。……スカリエッティにきつと精神的に攻撃されると思う。お前に全てを受け入れる覚悟がないならこれだけは覚えておけ。お前がどんな生まれだろうと何者であってもお前は俺の生徒だ。だから間違い過ちを犯したら何度でも直してやるからな。忘れるなよ？」

「……はい」

ハラオウンを家まで送り届けたあと、翠屋に寄った。

無性にコーヒーが飲みたくなった。

士郎さんが席に案内してくれると何も言わずにコーヒーを出してくれた。

桃子さんもシュークリームを出してくれた。

俺の顔はそんなに酷いのかね。

私は今ミッドチルダにいる。

隣にはクロノとアルフが居てくれた。

これからスカリエッティを逮捕するのに集められた部隊に驚きを隠せない。

だって、反目し合っている海と陸が協力しているのが信じられない。

そして壇上には陸のトップ、レジアス・ゲイズ少将が立って作戦の開始前に演説をするみたい。

「まずは、この場に集まってくれた魔導師達に感謝する！ この度、陸と海が共同で作戦を取ることを疑問を覚えた者たちもいるだろう。ましてや私が積極的に動いたことを信じられない者いるだろう。だが、聞いて欲しい！ 本来我々が守なければならないのはなんだ！ 管理局か！ それとも自分のプライドか！ 否、断じて否！ 我らが本当に守らなければならないのは管理局でもなければ我らのプライドでもない！ ミッドチルダで暮らす者たちだ！ 私は彼らを守るためなんだってしよう！ だが私には戦う力が無い。だから頼む諸君らの力を私に貸してくれ！ ミッドチルダの為に！」

「ミッドの為に！」

一人が叫んでデバイスを掲げると皆が呼応しだした。

「「「「ミッドの為に！」「」」」」

「「「「どこかにいる誰かの笑顔の為に！」「」」」」

今までのレジアス・ゲイズ少将のイメージが崩れた。

私のイメージは必要以上に力をそれも質量兵器を使うことも辞さない乱暴な人だと思っていたからだ。

もちろんこの演説が表面上な可能性もあるが、私はこれが本心から出た言葉だと思う。

私もいつの間にかバルディッシュを掲げていた。

「諸君ありがとう。 それでは、作戦開始！」

それぞれが、一斉に持ち場に向かう。

私もアルフと一緒に持ち場に向かった。

「アルフ、それにバルディッシュ。これが私にとって最後の出撃にしたいと思うの。 ……終わったら一度これからの将来の事を真剣に考えたいんだ」

「私はそれでいいと思うよ。 何かに囚われるより自分のしたい事をした方が絶対イイって。 私はフェイトの使い魔だ。 どこまでも付き合うよ」

『Good Luck』

「ありがとう。じゃあ、行こうか」

スカリエッティのアジトに侵入した私達は信じられないものを見た。

アジトのありとあらゆる所が破壊されているのだ。

まるで嵐でも通った如く、そこかしこにガジェットの残骸が散らばっていた。

「……なんだよこれ」

誰かのつぶやきが響き同時に動きが止まってしまった。

予想外の出来事に思考がフリーズしてしまった。

「さっさと行きましようや。もう撤退しているかも知れないですが、多少の情報は手に入るでしょう」

「そうだね。でも、くれぐれも油断しないように。こちらを

油断させる罠かも知れない」

「りょーかい」

ヴァイス・グランセニック陸曹とティード・ランスター一等空尉は特に驚いた様子もなくそのまま油断なく進んでいった。

残されたメンバーもその後を追いかけていった。

その後は奥に進むにつれてガジェットは出てきたが、今までの合

計で16体と少なすぎる。

途中二手に別れたので、私とアルフとヴァイス陸曹と、あと2人が行動し、ティーター等空尉が4人連れて行った。

〈パターン1〉

私たちが奥に進むと開けたところにでた。

そこにはスカリエッティと戦闘機人が2人待ち構えていた。

「ようこそ。 管理局の諸君。 いやーフェイト君が来てくれるとは思わなかったよ」

「ジェイル・スカリエッティだな。 罪状XAX4ー7 世界規模のテロリズムにおいてお前を逮捕する」

「ふむ、出来るのかね君に？ それより君は私たち側だろ？」

「黙れ！ スカリエッティは私が抑えます！ 皆さんは戦闘機人を頼みます」

「「「了解」」」

皆が一斉に散開する。

アルフともう一人が眼帯をした少女にもう一人が髪の毛の長い方に向かっていった。

ただ、ヴァイス陸曹だけ誰もいない所にデバイスを向けている。

私は、バルディッシュをザンバーモードにして斬りにかかる。
獲ったと思ったらスカリエッティが手を出してザンバーを受け止
められた。

「な、なに」

「こんなモノかね君の力は？」

「ドクター。カんではイケマセン。後は頑張ってください。私
とチンクは降伏します」

「ま、待ちたまえウーノ！ 私を置いてどこに行く気かね」

どういう訳か戦闘機人の二人は投降して大人しくバインドにかか
っている。

なら一気に畳み掛ける。

「スカリエッティィィィ覚悟！」

「無駄無駄無駄無駄！ アッヒー！ ケツが！」

……スカリエッティが突然お尻を抑えて蹲った。

……どうしよう？

取り敢えず、お尻が弱点みただしザンバーで叩いておく。

「ぎゃー！」

スカリエッティはそのまま泡を吹いて倒れた。

戦闘機人の二人は顔を背けていて、他の隊員もこちらを見て固まっている。

沈黙が場を支配する。

「あーフェイト？ そいつのお尻から血の匂いがする。 多分そいつ痔だよ」

……こんな奴を私は追っていたのかと思うと虚しくなってきたのでバインドを掛けた後、数回お尻を蹴り飛ばした。

私は悪くない。

「さて、隠れているお嬢さんもいい加減に出てきたらどうだ？ どうせ闇討ちしようと考えていたようだが、スナイパーの目は誤魔化せないぜ」

ヴァイス陸曹の視線の先を見るときもう一人メガネをした戦闘機人が姿を現した。

「どうしてバレたのか分かりませんが、降伏しますわ。 ……前回の襲撃者にもバレておりましたし。 私達の能力も大したこと無いのかもしれないわね」

……えっ、終わり？

これで終わりなの？

私はスカリエッティのお尻をしばいて終わり？

……なんか虚しくなってきた。

……精神攻撃も無かったし。

……帰って先生に甘えてから寝よう。

その後、ティーター等空尉とも合流したが、こちらも戦闘機人がいたが部屋の隅で毛布かぶってゲームをしていたらしい。

……強そうなのにどうしたんだろう。

ずっとティーター等空尉の袖を掴んでいるし。

他の戦闘機人を振り返って見てみたが、誰一人こちらを見なかった。

さらに本隊に戻るとレジラス・ゲイズ少将の秘書の一人が少将の手によって押さえつけられており何事かと思ったが、戦闘機人の変装だったみたいだ。

……私の誓いってなんだったんだろう。

……護送中気がつけばヴァイス陸曹の姿がなかったが、どうやらアジト内の情報収集に向かったらしい。

こうしてスカリエッティ事件いや、痔件か……終わりを迎えた。

スカリエッティは痔の専門病院で手術をしてから取り調べに入る。

取り調べで分かったことだが、今年の夏の初めにスーツ姿の男性が一人迷い込んできて情報が漏れない為に処置しようとしてガジェット向かわせたら素手で破壊されて、戦闘機人も手も足も出ずに倒されスカリエッティはお尻に鉄パイプを突き刺されたと供述した。

……ずっとあんな所に引きこもっていたからそういった幻覚を見たのだと思う。

……だって、ガジェットどころかSクラスの強さを持つ戦闘機人を一般人が倒すなんてありえない。

……あーでも、なのはのお兄さん達なら刀を持っていたら出来るか。

………こっちはそこまで無茶苦茶な人間いないし……誰だろう。

今後、戦闘機人達は第17無人世界の「ラブソウルム」軌道拘置所11番監房に収監されるか捜査協力や教育を受けて管理局に務めるかの二択らしい。

……素直に従うとは思えないけど……。

でもトーレは従うかも知れない。異常なほどスーツ姿の男性に怯えていてティーダー等空尉には非常に協力的だ。

ティーダー等空尉はどうやって、説得したのだろう？

他にも気になる情報があった。

管理外世界のとある人物に預けて性格矯正させてみるかという意見もあった。

恐らく、私たちより先にスカリエッティ達に接触した人の所だろう。

そうになったら大変だなと思う。

〈パターン2〉

私たちが奥に進むと開けたところにでた。

そこにはスカリエッティと戦闘機人が2人待ち構えていた。

「ようこそ。 管理局の諸君。 いやーフェイト君が来てくれるとは思わなかったよ」

「ジェイル・スカリエッティだな。 罪状XAX4ー7 世界規模のテロリズムにおいてお前を逮捕する」

「ふむ、出来るのかね君に？ それより君は私たち側だろ？」

「黙れ！ スカリエッティは私が抑えます！ 皆さんは戦闘機人を頼みます」

「「「了解」」」

皆が一斉に散開する。

アルフともう一人が眼帯をした少女にもう一人が髪の毛の長い方に向かっていった。

ただ、ヴァイス陸曹だけ誰もいない所にデバイスを向けている。

私は、バルディッシュをザンバーモードにして斬りにかかる。

殺ったと思ったらスカリエッティが手を出してザンバーを受け止めて刀身を砕かれた。

「な、なに」

「こんなモノかね君の力は？ ふむ、プロジェクトFの成功例と言う事で期待していたんだが、期待はずれも良いところだ。まあ、AMF状況下ではこんなものか」

気がつけば私は赤い紐に捕らわれていた。

「ああ、しかし私は君をこちら側に勧誘したい。何故だか分かるかね？」

「知るか！」

嫌な予感がする。

あのねっとりとした視線は嫌いだ。

「君は私に似ると思うのだよ。私は自分で生み出した生体兵器を……君はいずれ自分と同じ立場の子供を。そして反抗できないように調整し自分の目的の為に戦わせるだろう。あたかも自分の意思で戦っているように思わせてね。そう、君の母、プレシアと同じようにね。周りすべての人間は自分のためだけの道具に過ぎない。そのくせ自分に向けられる愛情が薄れるのを嫌う。クク、何時か君も理解するさ。親が親だったのだからさ。間違いを犯すことを恐れ、薄い絆にすぎる人生など無意味だと思わないか

？」

……母さんの顔を思い出してしまう。　アリシア姉さんに向けていた顔、私に向けていた顔。

確かに母さんは私をそのように利用したし私もそうしないと言い切れない。

……でも、きっと私は大丈夫だ。

私には支えてくれる友達がいる。

きっとなのはとはやてなら私が間違えたなら止めてくれる。

それに先生もいる。

私がどんなに間違えてもきっと叱ってくれる。

時々引き攣った顔をしたりするけど正面から私を見てくれる。

だから、間違えることを恐れるな。

絆が薄い？　知ったことか。　薄いならこれから厚くしたら良い

だけのこと。

少なくとも今まで一緒に関わってきた人達の絆は薄いとは言わせない。

ああ、そうだ。　そうだとも！

だから迷うな弱い私！

「言いたいことはそれだけかスカリエッティ？」

「何？」

「下らない。　実に下らない。　それで私の心が折れると思ったか？」

スカリエッティは驚いた顔をしているが、私のメンタルはそれほど弱くは無い。

直ぐに蛇みたいな嫌な顔をするがだからどうした。

「なら、さらに絶望的な話をしよう。ここで私を捕まえた処で戦闘機人達の体内には既に私のコピーを仕込んである。一つでも逃げ延びれば直ぐに復活し一ヶ月もすれば私の記憶が蘇るようになってる。フッフ、アルハザードでは当たり前前の技術だよ。さて限界に近い君たちにそれが出来るかな？」

狂っているが効果的な方法だと冷静な私が判断する。

しかし、それは意味がない。

仮に私達を取り逃がしてもクロノ達が次に控えてる。

つまり負けはしない。

「そう、ならさっさとお前を倒してこの場にいる戦闘機人を倒せば、後は第二陣に任せたら良い。仮に他に居ても知ったことか。

出てきたらまた叩き潰せば良い。じゃあ、こちらも切り札を切

らしてもらおう」

「君は何を」

「バルディッシュ！ オーバードライブ。真・ソニックフォーム」

『Get set . Sonic Drive』

一気に魔力を放出しバインドモドキを引きちぎりスカリエッティに肉迫する。

右で袈裟斬りし防御を誘い左で突きを繰り出す。

後ろに下がるが遅い。

大剣に戻して後ろに回り込み振り抜く！

スカリエッティの体はそのまま眼帯をした戦闘機人を巻き込んで壁にぶつかり止まる。

もう一体の戦闘機人はそのまま手を上げて降伏した。

スカリエッティはボロボロの状態でこちらを見ている。

「ああ、私の予想を上回る力。それも欲しかったな」

「力なんて欲しくなかった。それよりスカリエッティ。お前には一っだけ感謝している。お前の技術のおかげで生まれた私は沢山いい人に出会えた。このチャンスを作ってくれた事だけに感謝してやる」

「……完全に私の負けか」

後の流れは大体一緒です。

スカリエッティの痔の病院以外。

さて、どっちを本編にしよう。

第二十三話 冬休みの過ごし方

先日ハラオウンが怪我一つなく帰ってきた。

敵がほとんどいなくて楽だったと言っていた。

後、怨敵を倒したら他は抵抗することなく捕まえる事が出来たそう
うだ。

それで言いたいことは言えだし、精神的に優位には立てたからそ
れで納得したみたいだ。

これからの事を考えたいからよろしく頼むとの事だ。

それと同時に厄介ごとが増えそうだ。

……なんでも、管理局は俺がお断りスリーの高町の更生に成功し
た事に興味を示し、最近捕まえた戦闘機人を更生させようとするプ
ランがあるみたいだ。

……俺、何か悪いことしたかな？

あー流れ星、うふふふ。

きっと今なら死兆星もよく見えるだろうな。

さて、気を取り直して……何でクリスマスイヴなのに俺一人なの
？

馬鹿なの死ぬの、これはアレか除夜の鐘を聞きながら自分の婚期
が終わりそうなのを予感しないといけないの？

……カリムは、年末年始も仕事があるみたいで目に隈があった。

………実家に帰ると早く結婚しろと五月蠅いし。

だからと言って、この歳でクリスマスイヴに男友達と遊ぶなんて
自殺行為したくない。

大人しく来年度の準備に入ろう。

クリスマスとか仕事なんてざらだし、よくあることだし。

……恭也からメールが届いた。

件名『家族でクリスマスナウ』

写真が貼られておりそこには高町家と月村家が全員集合していて非常に楽しそうだ！

返信内容は、自害せよランサーで送っておいた。

後から来ないかとお誘いがきたが断った。

あんな所に居たら精神が死んでしまう。

次はクロノ君からもメールが届いた。

現在スカリエッティと戦闘機人の取り調べをしているが、中々進展しないらしい。

だが最近は痔についての手術データと俺に関する情報があれば何をしようとしていたのか話しても良いと言い出した。

ただ、俺に関しては海と陸の一部の上層部しか知らない様になっているみたいだ。

さらに厄介な情報として、八神を疎ましく思っている奴らがこちらの人間を脅迫材料にするかも知れないから注意してくれと書かれてあった。

面倒だと思うが一般生徒に向かない様にしてくれと頼んでおいた。

ザッフィーは、普段犬扱いなので携帯を持ってないので連絡が来ない。

後は、卒業生から昨日彼氏と別れましたとかメシウマメールが来

たり、……後輩からギャルゲーを渡されたりしてました。

この時の悲しみは癒えません。何が悲しくてL+とか言う二次元で慰めなくちゃならんのだ。

でも年末になりなんだかんだで忙しいのに励ましの連絡も来たりするのでありがたい。

あと実家からのお見合い写真付きメールだけは勘弁して欲しかった。

どう見てもクリーチャーです。

36歳バツ1の子持ちでした。

どうして結婚できた？と思うぐらいの顔でした。

性格がいいので結婚したらしいが旦那の浮気が原因で離婚したらしい。

……そら、これ見たら土佐犬だって可愛く見える。

それから新学期の休み明けテストを制作しているうちに俺のクリスマスは終わった。

………うん、オワタ。

一人寂しくコンビニでケーキとチキンを買って食べました。食べました！

後は、部屋を大掃除して車を洗車して気がつけばテレビを見ながら年越しそばを食べていた。

……この1年早かったな！。

後、三ヶ月我慢したら……あのクラス替えがあって、俺は解放されるはず。

まあ、お断りスリーがバラけたら儲けもの。

せめてお断り四天王やペンタグラムが完成しないように願うしかないな。

………来年は平和に暮らせませうように。

こうして俺の大晦日は過ぎていった。

………どうしてこうなった。

正月現在朝の7時インターホンがなったから見に行けば……。

「「」明けましておめでとうございます」「」

「………おめでとう。よし、帰っていいぞ」

お断りスリーが居ました。

「せんせのいけず！ せっかく可愛い生徒がおせちを持ってきてあげたのにその反応はないんじゃないんです」

「あっ、私もお母さんに言われておせち持ってきました」

「先生！ 私はお酒を持ってきました。わかめ酒にします？」

「………そうか。うん、玄関に置いておいてくれ」

………教え子を放置してそのまま集合ポストに向かう。
うん、まだ早かったか。

部屋に戻ると……八神がお雑煮を作り始めていた。

高町は食器の準備をしているし。

家族で迎えてくれ。

……でハラオウンは炬燵に入っている。

「……ハラオウン？ 何で下着姿で炬燵に入っているんだ？」

「寒いからです！」

「服を着なさい」

「先生！ 肌と肌で暖め合いましょう！」

「……高町後は任せた」

……俺はそっと炬燵の電源を切った。

「八神、何か手伝うこと無いか？」

「うーん、お雑煮の具はあらかじめ切って持ってきましたし後少
しで出来ます。なのでせんせは、私たちにお年玉を用意しとい
て下さい」

「いや、教師、担任にお年玉を求めないでくれ」

「えー、こんなに可愛い美少女中学生の手料理を正月から食べれ
ると考えたら安いもんじゃないですか？」

「一部ではそうだろうが、先生の興味範囲外だし立場上不味い」

「……なるほど援交やね！ 姫はじめやね！」

八神の思考回路はどうなってんだ。

……後、後ろの二人が反応した。

「「姫はじめ！」」

「……恥じらいを持ちなさい」

高町が携帯を取り出して物騒な事を言い出した。

「初めてが4ピ―なんて！ 皆に自慢しなくちゃ！」

「母さん、アリシア、クロノ、アルフ、 私は女になるよ！」

「やめんか」

「「ちょ、ちょっと先生痛い痛い」」

本気で書き込みそうな二人をアイアンクローで頭を握りそのまま吊るし上げる。

「あー、せんせ？ ホンマに何もんなん？」

「普通の先生だぞ？」

「イヤイヤ、普通の教師は生徒の頭を掴んでそのまま持ち上げる
ことなんて出来ひんて」

「そんなことないぞ。 体育の西田先生もこのぐらいは出来るぞ」

「……もしかして聖祥は人外魔境？」

「……………さあ？」

本当に否定できない。

……………この辺りはマジ人外魔境。

高町家しかり、さざなみ寮しかり、喋る狐しかりだ！

「「痛いー！ はやて（ちゃん）助けて！」」

「いや、無理。 おせちの準備中や」

「「おいー！ 元凶！」」

……………あー新年早々騒がしいな。

まあ、悪くは無いか。子供の頃は田舎でこんな感じで騒いでいた
もんな。

その後初詣に行くことになり、それぞれの家族も合流。

まさか、バニングス家も合流するとは思わなかった。

神社の参拝で今年でこの悪夢から解放されますようにと願ったら鈴にヒビがいったような気がするが気のせいだよな？

おみくじ引いて何故か存在した大凶とかありえないよな？ 今年は大変な1年になるなんて信じてないからな！

保護者達から本年もよろしくお願いしますと熱く言われたけど協力してくれるよな？

「「「「今年もよろしくお願いします！」「」「」

「……………はい」

これだけの人数に言われたら頷くしかなかった。

その後男連中ばかり集まって飲みに出かけた。

まあ、家庭の事もあるから夕方には解散したが……………一人で家に帰っても寂しくない……………寂しくないぞ。

それから学校が始まるまでの間はずっと一人酒でした。

……………グスン。

おまけ フェイト 甘える？

ハラオウンが出発して三日後に家に来た。

……早すぎるだろう。結構大掛かりな作戦になると聞いていたのに。

どこにも怪我をしていないようなので安心した。

……ただし、目が死んでいた。

「……よく無事に帰ってきたな。……部屋に上がりなさい。詳しい話は部屋で聞く」

「……はい」

ハラオウンを部屋に上げて炬燵で待つように言って飲み物の準備をした。

今回はコーヒーにしておいた。

……ココアにしたらまた問題が増えるかもと考えてしまったからだ。

ハラオウンの前にコーヒーを置き正面に座った。

……何故かハラオウンが炬燵に潜り込んで俺の足元から出てきてそのまま俺の上に座っている。

……なんだこれ？

「……ハラオウン、これは何のつもりだ？」

「……恥ずかしいから顔を見て欲しくないのよ」

えー……恥じらいがあったのかこいつ。

もういいや。突っ込んだら負けかな。

後狭い。

「そうか。で、早かったが何があった？ 無事に終わったんだろ？」

「……はい。死傷者無しで、全員逮捕、文句なしの結果と申したいですが……何か私のしてきたことが虚しくなってます」

「……そうか。で、何でそう感じたんだ？」

「……だ……んです。」

余りにも小さな声だったので聞こえなかった。

「何って？」

「……たんです」

「何？」

「痔だったんです！」

「……はい？」

イキナリ痔とか言われても意味が分からない。

「私の追っていた犯罪者が戦っている途中でお尻抑えて倒れたんです！ で、追撃にお尻叩いたらそのまま泡吹いて気絶しました！ その場にいた共犯者は何もしないで投降！ 戦闘時間は雑魚合わせて約五分！ こっちが覚悟決めていたのに痔で倒れたんです！ やってられません！」

……どうしようこんな時どんな顔したらいいのか分からない。

……これはハラオウンの顔を合わせないで良かった。

「おまけに私に新しい二つ名がつかまりました！ 漆黒のスパンキン グクイーン（笑）ですよ！ もう恥ずかしくて管理局で働けません！」

本当に何を言ったら良いのか分からん。

誰か教えてくれ。

「前までは、金色の死神とか中二病チックに呼ばれていましたよ。確かに中学二年生でしたけど漆黒のスパンキングクイーン（笑）あんまりです。これから管理局員や犯罪者にあったら痔になるまで叩かれるとか、痔でもお尻を狙って来るとか言われると考えただけで死にたくなります。最低です ……最低です」

誰か助けてー！

「……恨みます」

「え？」

「……私より先にスカリエッティに攻撃して痔にしておいて自分はさっさと帰った人を！」

……もしかしなくても俺だよな？
どうしよう冷や汗が止まらない。

「先生、聞いてください。私達より先にスカリエッティのアジトを襲撃した人がいるらしいんです」

「へ、へー凄い人もいたもんだ」

「そうですね……凄い変態ですね。わざわざトラップやガジェットを全部壊して最後にやったのがスカリエッティのお尻に鉄パイプさして帰って行くんですから。どう考えても変態です！」

「ははは、そ、その人もそいつが犯罪者と気がつかなかったんじゃないのか？ へ、変態は言いすぎじゃ……」

「そ、そんな事ありません！ あんな有名な次元犯罪者を知らないなんてありえません。大体ですね命狙われてやるのが相手のお尻を掘るですよ！ どう考えても変態じゃないですか！」

どうしよう正論過ぎて返せない。

「ま、まあまあ落ち着け。その人が先に襲撃したからお前が怪我も無く帰って来れたんだから良かったよ。せっかく可愛い顔をしているのに怪我とかあったら大変だからな」

「……そうですね。先生、もう何もかも嫌になりました。ギョッとして下さい」

ヤバイ。完璧に俺が元凶だから断りにくい。

「あー、それは勘弁してくれ。この態勢も十分にやばいのに」

「……してくれなきゃ……死にます」

涙声で言われて負けました。

「……はい」

……どうしてこうなった。

誰か代わってくれ。

……この姿勢でしばらくしたらハラオウンは俺に預けて寝てしまった。

…………はあー、何でこの子はこんなに無防備なのかね。

まあ、今回は無事に帰って来てくれたから良いか。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~441

教え子の進路に頭を抱えています。

2013年4月15日20時54分発行